

この世界は悲しみに満ちている

スターダイヤモンド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それはハロウィーンイベントも終り、ラブライブの最終予選に向けて練習を頑張っている最中に起こりました…。

初めはとても小さな出来事だったのに、まさかあんな事件に発展するとは…。

…

第30話（最終話）

ああ無情

2020 / 1 / 15 22時UP

…

※私が展開している『ム S 物語シリーズ』とは、一線を画すサスペンスコメディ(?)
です。

※他作品も含め、ご意見・感想は随時受付中です。

頂いたコメントに対しては、極力返信致しますので宜しくお願い致します。

目次

私の上履きが無くなっちゃいました…

1

今日は何から始めよう？

7

屋上ランチ

14

ファンなんです！

24

この中の誰か？

32

アフタースクール

41

あった！

49

何事もなくて…

59

新たな上履き

70

謎は深まるばかり

79

季節外れの怪談話

87

そんなことあるの？

96

体調不良

103

成長してる

114

どっちもどっち

127

怪しいふたり

141

w ↓ 草生えた…的…

154

ことりのおやつ

166

伝える…伝わる

179

南無三!?

193

スクールアイドルの器

211

三人寄らば…

226

想像できません！

239

みんな優しいね

252

謎は解けた!?

隠されていた記号

死ぬのは誰だ?

キレたのは…

真相究明

ああ無情(最終話)

268

285

302

319

334

349

私の上履きが無くなっちゃいました…

美しい花には棘がある。

凜 …「さあ、今日も部活頑張るにや！」

真姫 …「その前に授業を頑張りなさいよ。私のノートは見せないからね」

凜 …「…いいもん、かよちゃんに見せてもらうから」

真姫 …「あのねえ！…花陽、凜を甘やかしちゃダメよ」

凜 …「真姫ちゃんは意地悪にや」

真姫 …「当たり前のことを言ってるだけじゃない」

花陽 …「あははは…って…あれ？」

凜 …「？」

真姫 …「？」

花陽 ……」

凜 ……「かよちゃん？」

真姫 ……「どうかした？」

花陽 ……「えっ？…あ、うん…上履きが片方…」

真姫 ……「ないの？」

花陽 ……「入れ忘れちゃったかな？」

真姫 ……「そんなハズないでしょ？」

凜 ……「周りに…落ちて…ないか」

花陽 ……「昨日、どこかに置き忘れて来ちゃったかな？」

真姫 ……「どこかってどこ？」

花陽 ……「屋上とか部室とか…」

真姫 ……「じゃあ、花陽は練習終わりに上履きを片方だけ履いて、ここまで来たつてこ
と？」

凜 ……「真姫ちゃん、いくらかよちゃんでもそれはないにや！」

花陽 …「うう…凜ちゃん…いくら花陽でもって…」

凜 …「口が滑ったにや」

真姫 …「とにかく、昨日私たちと練習終わってから一緒にここまで来て…2年生とも一緒に帰ったわけだし…そこに片方しかないってことはありえないわ」

凜 …「…だとすると?…」

花陽 …「家出しちゃったのかな?」

真姫 …「なに可愛いこと言ってるのよ!普通に考えれば…悪戯された…としか考えられないでしょ!」

花陽 …「悪戯?」

凜 …「希ちゃんか穂乃果ちゃんの仕業かな?」

真姫 …「そうね…あの2人ならやりそうだけど…さすがに朝から、こんな面倒になることはしないと思うわ」

凜 …「確かに…」

真姫 …「花陽…あなた…誰かに恨まれるようなことした?何か心当たりは?」

花陽 …「…うん…」

凜 …「かよちゃんに恨みを持つ人なんか、いるわけないにや!」

真姫 …「わかってるわよ、そんなこと…一応、訊いてみただけよ。こういうのは考え

れることを全部列挙して…ひとつずつ消していくしかないのよ」

凜 …「消去法ってヤツにや」

真姫 …「正解」

凜 …「そうすると…あと考えられるのは…」

真姫 …「…逆のパターン…」

凜 …「逆？」

真姫 …「つまり花陽のファンが…盗んだ…」

花陽 …「ええ!？」

真姫 …「ありえないことじゃないでしょ？」

凜 …「うん!それは考えられることだにや」

真姫 …「まあ、ファンだからって盗んでいってわけじゃないけど」

花陽 …「で、でも…よりによって上履きなんて…」

真姫 …「気持ちのいいものじゃないわね…」

凜 …「変態さんのすることにや」

真姫 …「凜…あなたじゃないでしょうね？」

凜 …「ぶっ…にや？にや？真姫ちゃん！り、凜はそんなことしないにや！それは酷いにや！」

真姫 …「冗談に決まってるじゃない…そんなに焦ると余計怪しく見えるわよ…」

凜 …「だよね…」

花陽 …「…」

凜 …「にや？凜が盗んだのは、かよちんのハートだけにや…」

花陽 …「…」

真姫 …「…」

凜 …「えっと…職員室に行って、先生にスリッパ借りてくるにや〜!!」

花陽 …「あ、ありがとう。じゃあ、待ってるね！」

真姫 …「…照れずに、よくああいうことが言えるわね…」

くつづく

今日は何から始めよう？

：

凜 …「おっはよう！」

真姫 …「おはよう…」

花陽 …「おはようございますう」

モブA …「あつ！おはよう」

モブB …「おはよう」

モブA …「…つて…小泉さん、足、どうしたの？」

モブB …「あつ！ホントだ！スリッパ？」

花陽 …「あ…うん…上履きが片方見当たらなくなっちゃって…」

モブ A …「えっ？」

モブ B …「そんなことあるの？」

花陽 …「私、ドジだから…」

モブ A …「うそ？それって関係ある？」

花陽 …「ないかな？」

モブ B …「ないでしょ」

花陽 …「あはは…」

モブ A …「でも、どこ行っちゃったのかな？片方だけ？」

モブ B …「悪戯でもされた？」

花陽 …「うーん」

モブ A …「でも、この学校で小泉さんたちを嫌ってる人なんていないでしょ？」

モブ B …「そりゃあね！なんて言っても、sは学校を廃校の危機から救ったスターだからね」

モブ A …「だとしたら…他校のスクールアイドルの嫌がらせとか」

モブ B …「ああ！ありえるかも」

真姫 …「ないわよ…そう簡単に部外者が入って来れるわけじゃない」

モブA …「そっか…」

モブB …「だとすると…内部の犯行になるけど…」

真姫 …「…」

凛 …「…」

花陽 …「あつ…えつと…まだ見当たらないっていうだけで、悪戯されたとか…つて決まったわけじゃないし…もしかしたら、ちゃんと仕舞えてなくて、どこかに落っこちて、転がっちゃったのかもしれないし…その…ほら…おむすびころりん…的なの？」

モブA …「ぷっ！そこで、おむすびの話が出てくるなんて、さすが小泉さんね！」

モブB …「どれだけお米好きなのよ！」

花陽 …「へっ？うひゃあ…ち、違うよ！そういう意味じゃ…」

モブA …「まあ、知ってるけど」

モブB …「小泉さん、おにぎり、いつも本当においしいそうに食べてるもんね…」

モブ A :「今日もお昼前に食べるの?」

モブ B :「良くあれだけ食べて太らないよね?」

花陽 :「ギクッ」

モブ A :「?」

モブ B :「何かあった?」

真姫 :「この間、強制ダイエットさせられたばかりなのよ」

モブ A :「えっ?」

モブ B :「強制ダイエット?」

モブ A :「ええ? 私たちからみれば、全然太ってるように見えないけど」

モブ B :「ねえ!」

凛 :「スクールアイドルの世界って、結構厳しいんだよ」

モブA …なるほど。最初、あなたたちがスクールアイドルをやり始めた頃は『小泉さんができるなら私もできるかな?』…なんて思ってたけど」

モブB …「そうは甘くないってことね」

真姫 …「ちよつと、花陽でも…ってどういう意味よ?」

花陽 …「ま、真姫ちゃん!」

モブA …「あ、ほら…まだ全然、みんなの性格とか知らなかった頃の話だよ。クラスの中じゃ小泉さんが一番大人しそうで、アイドルとかやりそうになかったから…」

モブB …「それを言ったら、西木野さんも星空さんもそうだけど…特に小泉さんは…ねえ?」

モブA …「文学少女っぽい…っていうか…」

真姫 …「そういうこと?…まあ、確かに私も高校に入ってスクールアイドルをやるなんて、思ってたなかったけど…」

凜 …「凜もにや」

モブA …「今は全然違うよ。3人の姿を見て、凄いなあ!やっぱり私たちには無理だ

わ！って思ってるけど…」

モブ B :「それでも普段の小泉さんを見ると、そのギャップに驚くというかなんていうか…」

モブ A :「ねえ！」

モブ B :「うん」

モブ A :「あつ、そうだ！ねえねえ…小泉さん、今日、お昼、一緒に食べない？」

花陽 :「えっ？」

モブ B :「実は前々から思ってたんだ。おいしいおにぎりの作り方とか、*μ*sの話とか…色々訊きたいこともあるし…」

モブ A :「いつも3人一緒に飽きるでしょ？たまには私たちと食べたって、バチは当たらないんじゃない？」

花陽 :「う、うん…」

真姫 ……」

凜 ……「凜のことは気にしなくていいにや。にこちゃんか希ちゃんと食べるから…
ダメなら最悪、真姫ちゃんと食べるし」

真姫 ……「どうして私が最後の選択肢なのよ」

凜 ……「凜だって、たまには違う人と食べたいにや！」

真姫 ……「まあ、いいけど……ということ、私たちのことは気にしなくていいわ」

花陽 ……「うん、ありがとう」

モブA ……「じゃあ、決まりね！」

モブB ……「だったら今日は屋上行かない？天気もいいし」

モブA ……「そうね、どう？」

花陽 ……「うん、いいよ。じゃあ、今日のお昼は屋上で…」

真姫 ……」

くっくくく

屋上ランチ

…

花陽 …「いっただきまゝす！」

モブA …「…」

モブB …「…」

花陽 …「ん？」

モブA …「相変わらず大きなおにぎりだなんて」

モブB …「思わずガン見しちゃったわ」

花陽 …「…ひとつ食べる？」

モブ A :「ありがとう…でも、そんなに大きいのはいらないよ」

モブ B :「だったら、半分づつ貰おうか？」

モブ A :「あつ、そうだね」

モブ B :「いただきます」

モブ A :「いただきます」

モブ B :「もぐもぐ」

モブ A :「もぐもぐ」

モブ B :「美味しい！」

モブ A :「うん、美味しい！」

モブ B :「やっぱりコンビニのおにぎりと全然違うんだね！」

モブ A :「これは、つい食べ過ぎちゃうのもわかるわ」

花陽 :「…ちよつと褒めすぎだよ…でも、ありがとう！」

モブ A :「いつもここで練習してるんだね」

花陽 :「うん」

モブ B :「高いところ、恐くない？」

花陽 :「へっ？」

モブ A :「フェンスがあるっていつでも、屋上は屋上じゃない。もし落ちたら…とか考えない？」

花陽 :「うーん…フェンス際に行ったら、やっぱり恐いかな…だから、あんまり行かないようにしてるけど」

モブ A :「だよね。いくら小泉さんの体型がプヨプヨしても、ここから落ちちゃったら死んじやうようね？」

花陽 :「!!」

モブ B :「ポヨーンとは弾まないしね」

モブ A :「あはは…そうだね…」

モブ B :「気を付けてね？」

花陽 …「えっ?」

モブB …「練習…ほら、不意に事故に遭うことだつてあるでしょ? 知らないでフェンスに寄りかかったら、壊れてた…とか…」

花陽 …「あつ…う、うん…そ、そうだね…それは恐いかも…」

モブA …「ム、sは私たちの希望の星なんだから、何かあつたら困るじゃない」

モブB …「そうそう」

花陽 …「あ、うん…ありがとう…それより…」

モブA …「?」

モブB …「?」

花陽 …「私ってそんなにプロプロしてるかな?」

モブ A :「……」

モブ B :「……」

花陽 :「……」

モブ A :「プツ！そんなわけないじゃない！」

モブ B :「ダイエツトもしたんでしょ？まったく問題ないから」

モブ A :「小泉さんがデブだったら、世の中の女子は、みんな自殺しなきゃいけないレベルだよね？」

花陽 :「いやいや……」

モブ A :「でも、ほら……南先輩と較べたら……ね？」

モブ B :「あ、先輩の名前出しちゃう？あの人はμ s の中でも別格じゃない？女子がなりたいたいスタイル No. 1 だもん」

モブ A :「ああ見えて、出るところは出てるんだもんねえ」

花陽 …「南先輩?…ことりちゃんのことかな?」

モブ A …「ことり…」

モブ B …「ちゃん!?!」

花陽 …「ひゃあ!ち、違うのかな…南…ことり…先輩…」

モブ A …「へえ…小泉さん、先輩のこと、ちゃん付けで呼んでるんだあ?」

モブ B …「羨ましいなあ」

花陽 …「えつと…うん…μ s の中だけの取り決めだけど…絵里ちゃんが先輩後輩を禁止しようって」

モブ A …「絵里ちゃん?」

花陽 …「あ、絢瀬先輩…」

モブ B :「生徒会長のことでしょう？」

花陽 :「う、うん…希ちゃん、にこちゃん、絵里ちゃん…穂乃果ちゃん、ことりちゃん、海未ちゃん…そっか…私たちはもう当たり前のように呼び合ってるけど…みんなには慣れ慣れしく聴こえるよね…」

モブ A :「そ…そうだね。いきなりだから、ちよつとびくりした」

モブ B :「そうそう、本人のいないところで、裏ではそういう呼び方してるのかな？って」

花陽 :「ごめんね、驚かせて。みんなという時は気を付けるよ」

モブ A :「別に無理しなくてもいいよ」

モブ B :「私たちが知らなかったただけだから」

花陽 :「うん…」

モブ A :「それで…南先輩って何食べてるか知ってる？」

花陽 :「ん？」

モブ B :「何食べたら、あんなスタイルになれるのかなって？何か特別な秘密があるんじゃない？」

花陽 …「秘密…かあ…」

モブA …「ないの？なにか…」

花陽 …「うくん…知ってたら私もマネするんだけどなあ…」

モブB …「隠さないで教えてよ」

花陽 …「そう言われても…お菓子はいつも食べてるかなあ…」

モブA …「お菓子？」

花陽 …「うん…スナック菓子とかもそうだし…手作りのクッキーとかマカロンとかもよく貰うし…それで穂乃果ちゃ…高坂先輩のダイエツトも進まなかつたりしたんだけど…」

モブB …「お菓子って普通太るからダメっていうけど…嘘教えてない？」

花陽 …「嘘じゃないよう！」

モブA …「本当？」

花陽 …「本当に！あ、あと…敢えていうなら…チーズケーキ…かなあ…」

モブB …「チーズケーキ？」

花陽 …「うん！チーズケーキには目がないかな」

モブA …「チーズケーキねえ」

花陽 …「美味しいお店を探して、何回か一緒にスイーツ巡りとかしたことあるよ！」

モブ B :「ええ〜いいなあ！」

モブ A :「羨ましい!!今、一瞬、小泉さんに殺意を覚えたわ」

モブ B :「そういえば前に、2人が一緒に歩いてるの見たことがある。練習しなくていいのかな?…って思ったけど、サボってスイーツ食べに行ってた?」

花陽 :「ええ〜?いつのことだろう…多分、それは衣装の買い出しかなにかに行ったんだと思うけど…」

モブ A :「いいなあ…デート」

モブ B :「本当、ズルいわ」

花陽 :「そんなにファンだったのお?」

モブ B :「当たり前じゃない!!」

花陽 :「そ、そうなんだ…」

先輩 :「かくよちゃん！」

花陽 :「!!」

モブ A :「!?!」

くつづく

モブB : 「!?」

ファンなんです！

ことり：「かくよちゃん!!」

モブA：「うわっ！」

モブB：「あっ！」

花陽：「ひゃあ!……あ、こと……じゃなかった……南先輩!!」

ことり：「南先輩？」

花陽：「い、いえ……こつちの話です……ってどうしたんですか？」

ことり：「うん、凜ちゃんと真姫ちゃんに聴いたら、今日は屋上でお昼食べてる……って」

花陽：「あ……はい……」

ことり：「あのね、今日、授業終わったら、買出しに付き合っただけで欲しいの?」

花陽：「えっ…あ、はい…いいですど…練習は?」

ことり：「海未ちゃんに言っておいたよ。えへへ…次の衣装のアイディアがまとまらなくって…かよちゃんに助けてもらおうかな…って」

花陽：「あ、はい!…私で良ければ…」

ことり：「助かるなあ」

モブA：「あの、私たちも」

モブB：「お供させて頂きます!!」

ことり：「?」

花陽：「えっと…こちらは私のクラスメイトなんだけど…こと…南先輩の大ファンらしくって」

ことり：「うわあ、うれしいなあ!」

モブ B :「は、はい…」

モブ A :「以前、サインを貰ったこともあるんです…」

モブ B :「は、はい…ここで…」

ことり:「ああ、そう言えば…そんなことも、あつたかなあ…でも、買い出しは大丈夫だよ」

モブ A :「…ですよね…」

モブ B :「…すみません…」

ことり:「その代わり、*μs*は最終予選に向けて練習してる最中なんだあ!だから、本大会に出られるよう、これからも応援、よろしくおねがいします♡」

モブ A :「も、もちろんです!」

モブ B :「が、頑張ってください!」

ことり:「それじゃあ、かよちゃん、またあとで!授業終わったら教室に来てね!」

花陽 …「承知しました」

ことり …「ん？」

花陽 …「いえ…別に…」

ことり …「じゃあ、また、あとでね! バイバイ」

モブ A …「…」

モブ B …「…」

モブ A …「行っちゃった…」

モブ B …「いいなあ、いいなあ…南先輩とデートだなんて」

モブ A …「本当だよ! ねえ、替わって! 替わりなさいよう」

花陽 …「ははは…デートじゃないよう」

モブ A …「私たちのこと、覚えててくれてなかったね…」

モブ B …「それは私たちなんて、眼中にないわよ。全国に何千万人のファンがいると

思ってるの?」

花陽 ……:「そんなにいるかなあ…」

モブA ……:「ああ、握手してもらえばよかった! そうすれば、先輩の記憶の中にも、少しは残るかもなの…」

モブB ……:「それはそうだ! 緊張して、すっかり頭から抜け落ちてた…」

花陽 ……:「ま、また今度お願いすればいいんじゃないかな?…」

モブA ……:「わかってないなあ。そんな簡単に接触できるわけじゃない」

モブB ……:「だよねえ!」

モブA ……:「これはやつぱり…μ sに入るしかないわね」

モブB ……:「こんな特典があるならなおさらね!」

花陽 ……:「μ sに入っちゃうのお!」

モブA ……:「なに? ダメなの?」

モブB ……:「文句ある?」

花陽 ……:「…う…うん…ダメじゃないけど…あつ、チャイムだ」

モブ A :「おっと、お昼休みが終わっちゃう！」

モブ B :「急いで戻らなきゃ！」

花陽 :「うん！」

モブ A :「でも、取り敢えず……ありがとう」

花陽 :「えっ？」

モブ A :「あなたをお昼に誘ったお陰で、期せずして南先輩に会えたから」

モブ B :「うん」

花陽 :「私は何もしてないけど……」

モブ B :「これを切っ掛けに……って言ったならアレだけど、これからもたまにでいいから、一緒にお昼食べよう？」

モブ A :「うん。もつとμ sのこととか知りたいしね」

モブ B :「……って言うより南先輩のことでしょう？」

モブ A :「あははは……バレたか！」

花陽 :「うん……いいよ」

モブ A :「よし！」

モブ B :「じゃあ、これからもよろしく！か〜よちゃん！」

花陽 :「えっ？」

モブ B :「あ、南先輩がそう呼んでたから」

モブ A :「はなよ……じゃなくて、あだ名で呼ばれるなんて……小泉さんって南先輩とチヨ〜仲いいんだね？」

花陽 :「う〜ん……*μ* s はみんなそうだから、こと……南先輩だけ特別仲がいいわけじゃないと思うけど……衣装作りとか手伝わせてもらってるし……確かに他の先輩と比べて一緒にいる時間は長いかも……」

モブ A :「ふ〜ん、いいなあ……」

モブ B :「ねえ……」

花陽 :「えへへ……」

〜
つ
つ
く
〜

この中の誰か？

∴

真姫 ∴「希∴一応確認なんだけど∴あなた、花陽の上履き、隠したりしてないでしょうね？」

希 ∴「ん？どうしたん真姫ちゃん、藪から棒に」

凜 ∴「かよちんの上履きが片方盗まれたにや！」

希 ∴「えっ？」

穂乃果 ∴「花陽ちゃんの∴」

海未 ∴「上履き∴ですか？」

にこ ∴「盗まれた？」

絵里 ∴「本当なの？」

真姫　：「盗まれた…ってというのは語弊があるけど、今朝、登校した時に、片方無くなつてたの」

凜　　：「昨日帰ったときにはちゃんと仕舞ったはずだから、誰かが隠したか…悪戯したんじゃないかと…」

希　　：「それでウチが疑われとるん？」

真姫　：「そうは言っていないけど…私たちの中で、くだらない悪戯をするとしたら、あなたくらいしかないでしょ？だから念の為に訊いてみただけよ」

希　　：「むふ！ずいぶんやねえ…ウチやったら、上履きなんかやなくて、おにぎり隠すけどなあ…」

海未　：「鬼畜ですなね！」

凜　　：「鬼畜にや！」

にこ　：「鬼畜だわ！」

絵里　：「それは花陽に殺されても文句ないレベルの所業じゃない？」

穂乃果：「希ちゃんの冥福を祈るよ」

希 …「冗談やって、冗談！ウチもまだまだ青春を謳歌したいやん！」

凜 …「かよちゃんは、そんな酷いことしないにや」

真姫 …「穂乃果は？」

穂乃果 …「なにが？」

真姫 …「悪戯…」

穂乃果 …「私が？悪戯？…しないよ、しない！そんな幼稚なことするわけないじゃん！」

海未 …「その言葉に全面同意はできませんが…」

穂乃果 …「どういう意味さ」

海未 …「そのままの意味です。…とはいえ、私たちの中に該当者がいるというのは、考えづらくありませんか？」

真姫 …「わかってるわよ、そんなこと…」

絵里 …「当の本人はなんて言ってるのかしら？何か心当たりがあるとか…」

真姫 …「まるでないみたい」

絵里 …「でしようね…」

海未 :「昨日の帰りに仕舞ったのは、間違いないのですね?」

凜 :「凜たちも一緒だったから:転げ落ちたりすれば、わからないわけないにや」

海未 :「それはそうですね」

絵里 :「だとすると、やっぱり人為的に誰かが持ち出した:ってことになるわね:」

海未 :「はい。それが悪戯か盗んだのかはわかりませんが:」

穂乃果 :「フアンの仕業!」

海未 :「選択肢のひとつにはなるかと思えます」

絵里 :「でも、上履きって:」

ここ :「フアンっていうのは、その人が身に付けてる物ならなんだっていいのよ!」

希 :「ひよつとして:にこっちが?」

ここ :「ぬあんでよ!!だったら凜の方が、よっぽど怪しいでしょ」

凜 …「えっ？凜？…凜はそんなことしないよ！わざわざ上履きなんか盗らなくて
も、かよちんの家に行けばなんだった持ってこれるんだから」

海未 …「それは一理ありますね…」

一同 …「…」

凜 …「…って本気にしないで欲しいにや…」

希 …「案外、真姫ちゃんやったりして！」

真姫 …「どうしてよ！」

にこ …「ああ…なるほど」

真姫 …「ああ…じゃないわよ」

穂乃果…「そっか！…こういうのって『一番怪しくなさそうな人』が犯人だったりするも
んね！」

希 …「ストーリーテラーが実は…って、ミステリーの王道やん」

真姫 …「だったとしても、私はしないわよ…あの娘の悲しむ姿なんて見たくないも

の

絵里　：「そうね…花陽を困らせて喜ぶ人なんていないものね…」

海未　：「逆はないでしょうか…」

穂乃果　：「逆つていうと？」

にこ　　：「嫌がらせ…つてこと？」

海未　　：「はい…誰かに恨まれているとか…」

穂乃果　：「誰かって誰さ？」

海未　　：「それがわかれば苦労はしません！」

穂乃果　：「たははは…それはそうだね…」

絵里　　：「だけど、あの娘が誰かの恨みを買うなんてこと…想像がつかないんだけど…」

希　　　：「ウチもや…」

穂乃果　：「どこかで…おにぎりを巡る争いがあつたと…か？」

にこ …「ありえるわね！」

真姫 …「ないでしょ！」

穂乃果 …「いや、あるよね？」

海末 …「可能性はゼロではありません。性格的に、そういうことは起こりえるとは思いますが…」

穂乃果 …「ほらー！」

希 …「食べ物への恨みは恐いつて言うしねえ」

穂乃果 …「そうだよ！穂乃果なんか、にこちゃんに盗られたポテトのこと、未だに忘れてなんだからー！」

にこ …「アンタねえ！いつまでそんなことを言ってるのよ…」

真姫 …「…はあ…まあ、いいわ…少なくとも私たちがじゃないってことがわかれば…」

絵里 …「そうね…何もわからない状態で、あれこれ詮索してもしかたないし…」

希 …「えりちの言う通りやね。しばらく様子を見てみよう」

真姫 …「わかったわ…みんな、ごめん、練習前につまらないこと言っちゃって…」

海末 …「いえ、そんなことはありません。みんな大切な仲間ですから。小さなことを見過ごして大事になるよりは、よっぽどいいですよ」

にこ …「少し、あの娘のこと、気にして見るようにするわ。アタシたちに隠してる事

もあるかもしれないし」

凜 …「隠し事…そんな風には見えなかったけど…」

希 …「世の中には近すぎて見えない…ってこともあるんよ」

凜 …「!!」

海未 …「大丈夫ですよ、凜。花陽なら何かあつたら、真つ先にあなたに相談しますよ」
穂乃果…「今日はことりちゃんと一緒に出掛けてるから、あとでどんな様子だったか訊いてみるね」

凜 …「う…うん…」

絵里 …「さあ、それじゃ練習を始めるわよ！まずはストレッチから…」

真姫 …（誰なの…一体…）

く
つ
つ
く
く

アフタースクール

：

ことり：「今日は付き合ってくれてありがとう」

花陽：「いえいえ…なんのお役にも立てず…」

ことり：「ううん、かよちゃんのお陰で『次は冬っぽい衣装にしよう!』って決心できたよ」

花陽：「本当ですか?良かったですよ!」

ことり：「お礼に…ケーキでも食べて帰る?この間行つたお店だけど、新作が出たんだって」

花陽：「あつ!いいですね…つて…思いましたが…今日はやめておきます…」

ことり：「ダイエツト?」

花陽：「えっ!?…あつ…ま、まあ…はい、そうなんですう!…ちよつと…また体重が…」

ことり：「そうかな？全然わからないけど…」

花陽：「ダメです！花陽はプニプニのポヨ〜ンなんです…」

ことり：「プニプニのポヨ〜ン？」

花陽：「ことりちゃんはわからなくていいです！」

ことり：「？」

花陽：「ごめんなさいです。折角のお誘いを…」

ことり：「う〜ん…そう言うなら…」

花陽：「すみません…」

ことり：「うん、気にしなくていいよ。海未ちゃんが怒るところ、見たくないもんね…」

花陽：「あははは…」

ことり：「そういえば…昼間のかよちゃん、少し変だったよ」

花陽 …「そ、そうでしたか？」

ことり …「うん。ことりのこと、急に『先輩』なんて呼んだりして…『承知しました』とか…」

花陽 …「ああ…あれは…ぱなぱなしかじか…つてことがあつて…」

ことり …「そうなんだあ」

花陽 …「確かに知らない人からすれば、びつくりするかな…つて。特に絵里ちゃんなんて…今では当たり前のように呼んでますけど、花陽も最初は抵抗がありましたから。他の人たちからすれば『あの生徒会長を!』つてなりますよね？」

ことり …「そっかあ」

花陽 …「あつ…じゃあ、今日はこれで失礼します」

ことり …「うん、また明日ね」

花陽 …「はい、では…」

ことり …「ばいばい」

♪♪♪

ことり：「あつ！電話だあ……もしもくし？……穂乃果ちゃん？……えっ？かよちゃん？うん……今別れたところだよ！……様子？……うくん……特別変わったところはなかつたけど……何かあつたの？……えっ？かよちゃんの上履きが？……そういえばお昼にあつた時、スリッパだったような……あ、うん、わかつた。それじゃあ、また明日ね！ばいばい……」

ことり：「……上履き……ダイエット……なにか関係があるのかな？……」

……

海未：「どうでしたか？」

穂乃果：「特に変わったところはないみたい。いつもの花陽ちゃんだったって」

海未：「そうですか……では、一安心というところでしょうか」

穂乃果：「ねえ……そんな大袈裟な話じゃないんじゃないかな？本人もあんまり気にしていないみたいだし」

海未：「だと良いのですが……」

穂乃果：「海未ちゃんは心配しすぎなんだよ」

海末 :「あなたが能天気過ぎるのです…」

穂乃果 :「どうしてさ！余計な心配するのはやめよう！って言ってるだけじゃん」

海末 :「余計な心配とはなんですか…いえ、やめましょう。またいつもの不毛な争いになりますので」

穂乃果 :「…うん、そうだね…」

海末 :「ですが、今回は穂乃果の言う通りかもしれません」

穂乃果 :「うん？」

海末 :「今は、あれこれ言っても仕方ないということです」

穂乃果 :「海末ちゃん、熱でもある？」

海末 :「何故でしょう？」

穂乃果 :「今日の海末ちゃん、めっちゃくちや素直というかなんというか…」

海末 :「失礼ですね。私はいつも素直ですよ！」

:

絵里 :「希のカードで、花陽の上履きの行方、わからないの？」

希 :「残念ながら過去のこととはわからないよ…」

にこ …「役立たずね」

希 …「そやね…でも…」

にこ …「でも？」

希 …「この件、簡単には終わらんかも」

絵里 …「えっ!？」

にこ …「えっ!？」

希 …「ウチのカードがそう告げとるんよ!!」

にこ …「それが言いたいだけでしょ？」

希 …「ふふふ…」

絵里 …「練習のときも言ったけど、私たちがあれこれ詮索しても始まらないし、しばらく様子を見てみましょう」

希 …「そうやねえ…ウチらが下手に探偵ごっこみたいなこととしても、きつと話がや
やくしくなるだけやろうし」

にこ …「ああ、穂乃果とか凜とか…なんでもないことを早とちりして、引つ掻きまわ
しそうだもんね」

希 …「そこに、にこつちが入ってないやん」

絵里 …「確かに…」

にこ …「アンタねえ！」

希 …「ふふふ…」

絵里 …「あは」

にこ …「はあ…まあいいわ…このメンツじゃ勝ち目ないから…無駄な抵抗はやめて
あげるわ」

絵里 …「さすが、にこね！」

希 …「賢明！賢明！」

にこ …「嬉しくないんだけど…」

希 …「嬉しくない…か…確かにそうやね…」

にこ …「？」

絵里 …「希？」

希 …「ん？ウチ、今、何か言うた？」

絵里 …「ええ…」

にこ …「何か、すごく不安になるような言葉を発したわ」

希 …「それは…気のせいやないかな？」

にこ …「でも…」

希 …「デモもストも受け付けません！」

にこ …「また古臭いことを…」

希 …「にやははは…」

絵里 …「…」

くつづく

あつた!

：

凜 …「さあ! 今日も部活、頑張るぞ! オー!!」

真姫 …「だから、その前に勉強を頑張るなさいよ!」

凜 …「ん? デジャヴユ? それとも、これがタイムリープってヤツかにや?...」

真姫 …「何、馬鹿なこと言ってるのよ。毎日毎日、同じセリフを繰り返してるのは凜じゃない」

凜 …「…つてことは、真姫ちゃんのツツコミにバリエーションがない…つてことなんだね」

真姫 …「あなたねえ…いいわ…もう二度と勉強教えてあげないから」

凜 …「にやー!! これもいつもの台詞にや〜」

花陽 …「あはは…」

真姫 …「あら…ことりじゃない？」

ことり …「あつ！おはようございます」

凜 …「おつはようによ〜」

花陽 …「おはようございます」

真姫 …「何してるの？1年生の靴箱の前で…」

ことり …「うん…昨日、穂乃果ちゃんからね、かよちゃんの上履きが無くなったって聞いたから…」

花陽 …「あつ…」

ことり …「冷たいなあ…一緒にお出掛けしたのに、一言も話してくれないんだもん」

真姫 …「余計な心配掛けたくなかった…ってことでしょ？」

花陽 …「…うん…」

真姫 …「それで? ことりがここに来たからって、何か解決するの?」

花陽 …「ま、真姫ちゃん…」

ことり …「そういうワケじゃないけど…」

凜 …「にやあゝゝ…!?」

花陽 …「びゃあ!」

真姫 …「凜!」

ことり …「凜ちゃん!」

凜 …「…か、かよちんの上履き…凜のところに入ってたにや…」

花陽 …「えっ?」

ことり …「凜ちゃんのところ…」

真姫 …「上履きが?」

凜 …「…なんでにや?…」

真姫 ……」

ことり ……」

凜 ……」り、凜じゃないからね！真姫ちゃん、ことりちゃん！凜じゃないよ！凜、そんなことしないから!!」

花陽 ……」大丈夫だよ、凜ちゃん！わかってるから…よかったよ、花陽の上履きを凜ちゃんが預かっててくれて」

凜 ……」違うよ！そんなじゃないよ！絶対凜じゃないから…」

真姫 ……」そうね。昨日も今日も、凜は私たちと一緒に登下校してるんだもの。常識的に考えれば…私たちの隙を見て、自分の靴箱に花陽の上履きを入れる…なんてリスクが高すぎるわ」

凜 ……」そうにや！そうにや！」

真姫 …「もつとも…夜のうちに…とか、朝早く来て…とかなら別だけど」

花陽 …「真姫ちゃん!いくら真姫ちゃんでも言っていることと、悪いことがあるよ!
!」

真姫 …「あくまでも仮定の話よ。昨日も言ったでしょ?こういうことはあらゆる可能性を列挙して、ひとつづつ消していく必要があるって」

花陽 …「そうだけど…」

真姫 …「そういう意味では…この状況下だと…ことりが一番怪しい…ってことにな
るわね」

ことり …「ちゅん?」

花陽 …「…ことりちゃんが?…」

真姫 …「穂乃果や海未と一緒にじゃなくて…今、ひとりでここにいる…って、これ以上

なく怪しいでしょ?」

凜 :「先に来て…凜の靴箱に入れた?」

ことり :「…そうなっちゃう?…」

花陽 :「ことりちゃん…」

ことり :「でも、それなら…隠したときはどうだったのかな?」

真姫 :「!!」

ことり :「戻したときの理屈はそれで通じるかもだけど…隠したときは?…夜に来て…とか、朝早く来てとか…なら、学校中の全員に可能はあろうと思うんだけど」

真姫 :「…確かに…それはそうね…」

凜 :「警察に届けたほうがいいかによ?」

真姫 :「バカねえ!なんて言うの?『花陽の上履きが無くなったんですけど、戻って

きました。誰がやったか調べてください』…つて?受け付けてくれるわけないでしょ」

凜 …「そつかあ…ダメか…」

花陽 …「えつと…誰がやったとかは、もう良いんじゃないかな?こうやって無事戻ってきたわけだし…あんまり事が大きくなっても、よくないと思うし…」

ことり …「お母さんには一応、報告しておくね?何も知らない…つていうのもよくないと思うし…」

真姫 …「そうね…」

凜 …「じゃあ、かよちん…上履き…」

花陽 …「ありがとう」

真姫 …「待つて!」

花陽 …「!?!」

真姫 …「念の為に、今日はスリッパにしたほうがいいんじゃない?何も無いと思うけ

ど：それは持って帰って、一度洗ったほうが…何が付いてるかわからないし…」

花陽 …「あつ…」

真姫 …「不安にさせるつもりはないんだけど…」

花陽 …「そうだね…うん…ありがとう。そうするね！」

モブA …「おはよう！」

花陽 …「あつ…」

モブB …「おはよう…つて南先輩？」

ことり …「あ、あなたたちは昨日の…」

モブA …「あつ、おはようございます！」

モブB …「お、おはようございます…みなさん、お集まりで…どうしたんですか？」

凜 …「かよちんの上履きが見つかったにや」

モブA :「へえ!よかったじゃない」

モブB :「ねえ!…で、どこにあつたの?」

凜 :「それが、なんと、り…」

真姫 :「花陽の靴箱の中から見つかったわ」

一同 :「!?!」

真姫 :「やっぱり、仕舞うときに、片方落つことしちやったんじゃない?…それに気付いた誰かが、元に戻しておいてくれた…つてどこかしら。まったく花陽はドジなんだから…」

花陽 :「あ…あは、そうだね…」

モブA :「なんだ、そうだつの?」

モブB :「それなら一件落着…ということかしら」

花陽 「う、うん…お騒がせしました」

：

凜 「真姫ちゃん、どうして嘘付いたにや？」

真姫 「言ったでしょ。今は事を荒立てたくない…って。凜のところから見つかつたなんていったら、面倒なことになるじゃない」

凜 「そっか…」

真姫 「花陽も！」

花陽 「？」

真姫 「余計なことを言っちゃダメよ」

花陽 「うん…わかった…ありがたう…」

くつづく

何事もなくて…

：

穂乃果：「よかったね！上履き見つかった」

にこ：「まあったくう、人騒がせなんだから！」

希：「ホンマやね！ウチの心配は杞憂に終わったわあ」

ことり：「お待たせえ」

海未：「遅いですよ、ことり」

絵里：「ことりが遅れてくるなんて珍しいわね」

穂乃果：「何かあった？」

ことり：「うん、花陽ちゃんの件をお母さんに報告してきただけだよ」

海未：「それでなんと？」

ことり：「様子を見てみましょう…って」

にこ：「まあ、そう言うわね。こんなことで警察沙汰になって、ラブライブに影響が

でも困るし」

花陽 ……」

希 ……」にこつち！」

にこ ……」ぬあくによろ……」本当のことでしょう？」

絵里 ……」多少、乱暴な言い方だけど、確かにその通りだわ」

花陽 ……」ごめんなさい」

凜 ……」かよちゃんが謝ることじゃないにや」

絵里 ……」そうね……」でもこれで、練習に集中できるわね」

花陽 ……」はい！」

海未 ……」

穂乃果 ……」海未ちゃん？」

海未 …「はい!? …いえ、なんでもありません! さあ、気合入れていきましよう!」

凜 …「いつも以上に気合を入れたら死んじやうにやあ」

一同 …「あはは…」

真姫 …「…」

希 …「真姫ちゃん…今は練習に集中やで」

海未 …「はい、気味が悪いのはわかりますが…今は集中してください」

真姫 …「わかつてるわよ…」

…

穂乃果 …「じゃあ、海未ちゃん、真姫ちゃん、私たちは帰るね」

絵里 …「日が落ちるのも早くなってきたし、あまり遅くならないように」

にこ …「あとはよろしく」

花陽 …「気を付けて帰ってね!」

凜 …「じゃあ、また明日。かよちん、ラーメン食べてから帰ろう!」

ことり …「ばいばい」

希 …「ほな、お先」

海未 …「はい、では皆さんも気をつけて…」

真姫 …「また明日…」

海未 …「みんな帰りましたね…」

真姫 …「…そうね…」

海未 …「…」

真姫 …「…」

海未 …「…」

真姫 …「…」

海未 …「…作曲があるから残っていく…というのは嘘なんですネ？」

真姫 …「そういう海未こそ、作詞があるなんて嘘でしょ？」

海未 ……やはり、あの件ですか？」

真姫 ……それしか無いでしょ？」

海未 ……はい。今回の事に關しては、真姫と話すのが一番かと思ひまして」

真姫 ……私も同じ事を考えたわ」

海未 ……希も何か感づいているようですが…」

真姫 ……多分ね…あの人、鋭いから…」

海未 ……彼女にはあとで話を聴いてみましょう。今はまだ、事を荒立てる段階ではないと思ひますので」

真姫 ……それで…海未はどう思うの？」

海未 ……端的に申しますと…凜の靴箱に戻されていた…というところに、犯人の悪意を感じます。仮に…花陽の上履きを悪戯…隠したのか盗んだのかは、現時点でわかりませんが…返すのであれば、元に戻すのが普通です。ですが…」

真姫 ……あえて凜の靴箱に入れたのは…」

海未 ……意図的と言わざるを得ないです」

真姫 ……何の為に？」

海未 ……真っ先に考えられるのは…やっぱり凜に疑いを持たせることでしうか

「？」

真姫　：「そうね。現物がそこから発見されたんだから、そうなるわね」

海未　：「はい」

真姫　：「でも凜が犯人に仕立てたのなら、あまりに稚拙だと思わない？あんなにこれ見よがしに入れておいたら、逆に凜が犯人ではありません！って言っているようなもの
だわ」

海未　：「確かに真姫の言う通りです。ですが……」

真姫　：「？」

海未　：「凜が犯人だった場合はどうでしょう？」

真姫　：「!？」

海未　：「犯人が第一発見者を装うことはよくあることです。凜が犯人であれば、現物を発見した本人は、真っ先にその容疑から外れます。自分が犯人なのに、自らその証拠を見せる理由はありませんからね？」

真姫 …「あなた、凜を疑ってるの？」

海未 …「いえ、可能性のひとつを述べただけです。ただ、それを消し去るだけの根拠は今のところありません」

真姫 …「…」

海未 …「花陽の自作自演も考えられます」

真姫 …「海未!!」

海未 …「疑いたくない気持ちはわかりますが、ここはひとつ冷静になって、私の話を聞いてください」

真姫 …「動機は？」

海未 …「わかりません。ですが登下校時以外に学校へ来ることが可能であれば、犯行は可能かと」

真姫 …「そんなことを言ったら、生徒全員に可能性があるじゃない」

海未 …「その通りです。ですから、私も真姫も…昨日から今朝までのアリバイが証明

されない限り…容疑者のひとりだと言えます…」

真姫 ……そうなるわね…」

海末 ……「ここで問題を整理してみましよう。まずひとつ目です…花陽の自作自演でなければ、なぜ彼女がターゲットとなったのか」

真姫 ……それがわかれば苦労しないわよ」

海末 ……「ふたつ目…なぜ凜の靴箱に戻したか」

真姫 ……それはさっき話したわ。今の段階ではどちらとも言えない」

海末 ……「はい。では凜の犯行でなかった場合ですが…なぜ他の人の靴箱にしなかったのでしょうか？」

真姫 ……「他の人？」

海末 ……「μ, s以外の誰かのところですか」

真姫 ……「…」

海末 ……「ここに犯人の意図があると思うのです。別に他の生徒の靴箱に入れておいても、問題ないはずですよ。いえ、むしろ、そちらの方がよっぽど自然ですよ」

真姫 ……：「そうかもね…だとすると…どうして凜のところか？」

海未 ……：「花陽と凜の関係性を知ってる者の犯行…ということでしょうか？」

真姫 ……：「!？」

海未 ……：「花陽を貶めようとしたのか、あるいは凜を貶めようとしたのか…もしくはその両方なのか…」

真姫 ……：「でも2人の関係性なんて、学校中に知れ渡ってるでしょ？」

海未 ……：「いえ、真姫の学年は1クラスしかありませんから、否が応でも2人の仲は見せ付けられているでしょうが…2年生、3年生となるとそこまでは詳しくないかと思えますよ」

真姫 ……：「…そう…それじゃあ、犯人は1年生の中に？」

海未 ……：「もつとも、そういう意味では、sのメンバーがよっぽど詳しいと思いますか…」

真姫 ……：「…」

海未 ……」

真姫 ……「あなたは私を疑っているの？」

海未 ……「ふたりの仲を割こうとするなら、動機はありますね」

真姫 ……「はあ？…馬鹿馬鹿しい…」

海未 ……「ふふふ…私もそう思います」

真姫 ……「いい判断だわ」

海未 ……「すみません…今日の段階では、まだわからないことが多すぎました。やはり今後の展開を見守る必要があります」

真姫 ……「できれば、このまま何も起こらないことを期待するけど…」

海未 ……「はい…」

〜
〜
〜
〜
〜

新たななる上履き

…

凜 ……さあ！今日も部活、頑張るぞ！オー！！……つて……このセリフ、昨日の朝のコピペかによ？」

真姫 ……知らないわよ……」

花陽 ……「びゃあ!?!」

凜 ……「かよちゃん!?!」

真姫 ……「今度は何?」

花陽 ……「花陽の靴箱に……上履きが入ってます……」

凜 …「？」

真姫 …「それのどこが変なの？」

花陽 …「花陽は昨日、真姫ちゃんに言われたとおり、上履きをおうちに持って帰りました。夜のうちに洗って…まだ干してあります」

真姫 …「あっ…」

凜 …「…つてことは…誰のにや？…」

花陽 …「…片方は…かかとに『ERI』…と書いてあります…」

真姫 …「片方は？…つて…えっ、左右別々ななの？」

花陽 …「もう片方は…『東條』…と…」

凜 …「それって…」

真姫 …「絵里と希の？」

花陽 …「はわわわ…どうして絵里ちゃんと希ちゃんの上履きが、花陽のところにも!? どうして、ねえ、どうしてなの？」

凜 …「かよちゃん…」

花陽 …「真姫ちゃん、どうして私のところに、ふたりの上履きが入ってるの!？」

真姫 …「花陽! 少し落ち着きなさい!」

花陽 …「うう…ぐすつ…どうして…」

真姫 …「ふたりはもう学校に来てるのかしら? 凜、ちよつと電話してもらっていい? 来てれば片方無くて困ってるだろうし、来てなくても先に知らせなくちゃいけないし…」

凜 …「う、うん！わかったにや！」

真姫 …「私は少しここを離れるわ。花陽を落ち着かせてくる」

凜 …「お願いするにや！」

…

真姫 …「…どう？…少し落ち着いた？…」

花陽 …「…うん…もう大丈夫…さつきはあまりに予想外のことが起きて、混乱しちゃったただだから…」

真姫 …「そう…よかったわ…」

希 …「おっ！ここにおったん？」

真姫 …「希！」

希 …「えりちもおるよ」

絵里 …「おまけみたいに言わないでよ」

花陽 …「あ、あの…この度は…」

希 …「ストップ！」

花陽 …「!?」

希 …「それ以上言うたらアカンよ！花陽ちゃんはなくんも悪くないんやから」

絵里 …「その通りだわ。私たちに謝ったりするのは筋違いよ」

花陽 …「すみません…」

希 …「大丈夫やって。ウチらはまだ登校前だったから、被害の『ひの字』も出てへんよ」

絵里 …「そう、希が途中まで来て『枕を忘れた』って戻つちやうから」

希 …「ん？それはことりちゃんやって。ウチが置いてきちゃったのは…えりちへの愛やで」

絵里 …「まあ…」

真姫 …「何、くだらないこと言ってるのよ!!絵里もそんなことで、顔を赤らめないでよ」

花陽 …「ぶふっ!」

希 …「くだらないとか、そんなこととか、失礼やなあ…ウチのえりちへの愛は…」

真姫 …「どうでもいいから!」

絵里 …「と、とにかく希が忘れ物の私も付き合って、家まで戻ったから、学校に着くのがいつもより遅くなったの」

希 …「そういうことやね」

絵里 …「そうしたら凜から電話があって…」

希 …「幸い、もう片方は、ちゃんとウチらのところに入ってたよ」

花陽 …「そうですか…よかったです…って、そういうえば凜ちゃんは?」

絵里 …「ことりのところに行ってる」

花陽 …「ことりちゃんのところには?」

希 …「一応な…ことりちゃんのお母さんには、伝えておいた方がいいやろうから

…」

花陽 …「そうですよねえ…」

真姫 …「それにしても…不幸中の幸いだったわね」

絵里 …「？」

真姫 …「あなたたちが、いつも通りに学校に来て…片方無くなってる…つてなったら、ちよつとした騒ぎに発展してた…でしよ？」

希 …「そやねえ…少なくとも、そこらじゆうを探し回るやろね」

真姫 …「それがひとりならず、ふたりも無くなってるのよ。いくら絵里と希であつても、冷静ではいられないんじゃないかしら」

絵里 …「…」

真姫 …「一番の心配は、そんな様子を私たち以外の生徒に見られること。そして最悪の結果が…花陽の靴箱からそれが見つかった…と知られること」

絵里 …「その通りね」

真姫 …「だから、ふたりが登校する前で、それを未然に防げた…ということが不幸中の幸いだと思つたわけ」

絵里 :「ハラショー!」

希 :「スピリチュアルやね」

花陽 :「あはは…」

希 :「ウチ、自分でいうのもなんやけど、ラッキーガールやん!危機回避能力が高
いんやろね」

真姫 :「…そうかもしれないわね…。今回だけはそういうことにしておくわ…」

希 :「それにしても…この生徒会コンピにちよつかい出そうなんて、いい根性して
るわあ。えりちが怒ったらどれだけ恐いか、あとで目に物言わせてあげようぞ」

絵里 :「ちよつと、どうして私を引き合いに出すの?」

希 :「えりちのバックにはKGBが…」

絵里 :「いません!!朝から、なにくだらなことを言ってるのよ!ほら、急がないと
朝礼が始まるわよ」

希 :「ほくい!」

絵里 :「花陽、とりあえず今は落ち着きなさい。今後どうするかは、またあとで考え
るとして…」

真姫 :「私たち以外の人には、他言無用よ」

花陽 :「は、はい!わかりました」

絵里　：「いい返事だわ…さあ、急ぐわよ！このままだと本当に遅刻扱いになるわ」

希　　：「生徒会長として、遅刻はできんよね？」

絵里　：「あなたも副会長でしょ…：というか、元々、希が忘れ物なんてしななければ…」

希　　：「仕方ないやん！お金なかったら、お昼食べられへんのやもん」

真姫　：「希の忘れ物ってお財布だったのね」

花陽　：「うん、そうみたいだね」

くつづく

謎は深まるばかり

：

穂乃果：「さあ！練習だあ！」

絵里：「相変わらず、元気ね」

希：「そりゃあ、穂乃果ちゃんから元氣を取ったら、何にも残らんもんね？」

穂乃果：「そうだね！……って希ちゃん!!」

にこ：「でも、アンタが元氣でいてくれなきゃ困るのよ。なんとたつて、sのリーダーなんだから」

穂乃果：「でしょ？でしょ？にこちゃん、わかつてるう！」

海未：「調子に乗りすぎるのが、玉に瑕（きず）ですが……と……それより花陽は？」

凜：「アルパカさんのお世話をしてから来るって言ってたにや」

海未：「そうですか。いくら係りの仕事とはいえ、花陽は本当に熱心に世話をしていて感心ですね。生徒会の仕事さえ人に押し付けようとする穂乃果とは大違いです」

穂乃果：「またあ…：そうやってすぐ穂乃果を引合いに出すんだから」

絵里 ……」

希 ……「ん？えりち、どうしたん？」

絵里 ……「ううん…：別に…：どうしたら、あのアルパカと仲良くなれるのかしら…：つて」

凜 ……「凜、知ってるよ。絵里ちゃん、アルパカさんに嫌われてるもんね！」

絵里 ……「き、嫌われてる？…：違うわ…：私が苦手なだけなの！」

海未 ……「そういうえば…：小屋に行く時、絵里はいつも少し離れたところにいますね」

絵里 ……「だって…：私が近づくと…：怒るのよ…：」

凜 ……「絵里ちゃんがビクビクするから、向こうも警戒してるじゃないかな？」

絵里 ……「みんなは恐くないの？」

穂乃果 ……「ううん…：別に恐くはないよね？大人しいし」

絵里 ……「でも、あんなに大きいのよ…：襲われたらひとたまりもないじゃない」

一同 …「えっ?」

絵里 …「な、なに?」

にこ …「へえ…暗闇、幽霊、アルパカ…アンタ、意外と臆病なのね」

希 …「ウチは、そんなえりちが好きなんやけどな」

にこ …「あつそ…」

穂乃果 …「まあ、誰にだつて怖いものはあるよ」

希 …「穂乃果ちゃんは…海未ちゃんやろ?」

穂乃果 …「そうそう、世界で一番怖い…つて希ちゃん!!余計なことを言わさないでよ」

希 …「にししし…」

凜 …「そういう希ちゃんは、何か怖いものつてあるのにや?」

希 …「ウチ?ウチはそうやなあ…焼肉かな」

凜 …「焼肉?希ちゃんが?」

希 …「あとは…やつぱりおうどんさんかな」

にこ …「はあ?おうどんさん?」

希 …「それと…穂乃果ちゃんちのお饅頭やね?」

穂乃果：「うちのお饅頭？」

希：「最後に暖かいお茶はもつと怖い」

海未：「はあ…饅頭恐いですか…真面目に聴いて損をしました…」

一同：「!？」

希：「海未ちゃん以外、誰も知らんのか…」

海未：「そのようですね…」

絵里：「説明してもらえるかしら？」

海未：「落語ですよ」

希：「え、その昔、長屋に数名の若者が集まりました…」

海未：「今から一席ぶつつもりですか？」

希：「続きは『おぜぜ』を頂いてから…」

にこ：「お金取るんかい!!」

穂乃果：「ケチ！」

凜：「意地悪にや」

希：「うっしっしっ…」

海未：「そういうえば…ことりもアルパカのところでしょうか？穂乃果、何か聴いてますか？」

穂乃果：「あれ？海未ちゃんが聴いてるかと思つてただけど…」

真姫：「理事長のところでも行つたんじゃない？」

穂乃果：「!!」

海未：「…そうかも知れませんね…」

にこ：「今朝のこと？この学校にもくだらないことをするヤツがいるのね…なにが楽しいのかしら」

凜：「凜、思つたんだけど…A—RISEの嫌がらせつてことは考えられないかな

「？」

「ここに……!!」

穂乃果：「A—RISE……」

海未：「……ですか？」

凜　　：「今、この時期、*ム* *s*に嫌がらせをして得をする人って考えたら、A—RISEしかないにや!きつと、この学校にA—RISEの手先がいるにや!!」

「ここに……凜にしてはよく考えた……って言いたいけど……ひとつ大きな間違いがあるわ」

凜　　：「……?」

「ここに……A—RISEは絶対、そんな卑怯なことはしないから!!」

凜　　：「びくっ!」

にこ …「いくら凜でも、今後A—RISEの侮辱をしたら、ただじゃおかないわよ！」

凜 …「…」

希 …「まあまあ、にこつち…そんなに恐いこと言ったらいかんよ」

にこ …「わかつてるわよ…」

海未 …「客観的に見て、凜の推理も可能性としてはゼロではないかと思えます。ですが…もし犯行が発覚した場合、彼女たちも無傷ではられません。そういうリスクを考えれば、極めて無謀な行為といえます。もちろん、予断は許しません…」

希 …「ウチなあ…えりちの苦手な幽霊の話で、思い出したことがあるんやけど…」

にこ …「幽霊？」

絵里 …「な、なに？突然…」

穂乃果 …「え、これって幽霊の仕業だったの!？」

く
つ
つ
く
く

季節外れの怪談話

絵里 …「ゆ、幽霊の仕業？夏でも無いのに、おかしいこと言わないでよ…」

凜 …「音ノ木坂に、そんな怪談話なんてあったかな？」

海未 …「非化学的ですね」

真姫 …「馬鹿馬鹿しい」

希 …「待った！待った！誰もそんなん、言っていないやん。早とちりしたらいかんよ
…」

絵里 …「幽霊の話じゃないのね？」

穂乃果 …「あ、ごめん」

凜 …「そうだよね…」

希 …「え〜…それは100年位前のドイツで起きたことやった…」

にこ …「突然始まったわね…」

絵里 …「それも、落語なの？」

海未 …「違うと思いますが…」

希 …「雪山の登山で起きたことなんやけど…」

一同 …「ばっ！」

海未 …「なっ!?なぜ一斉に私を見るのですか!？」

凜 …「登山と聴いたら…」

穂乃果 …「海未ちゃん」

絵里 …「条件反射っていうのかしら？」

にこ …「自業自得ね」

海未 …「自業自得ってなんですか！」

真姫 …「それで…登山がどうしたの？」

希 …「男の人2人のパーティーが、途中、吹雪いて…遭難してしまっただらしいんよ」

海未 …「そうなんですか…」

一同 …「ん？」

希 …「海未ちゃん、なかなか、やるやん！」

海未 …「!!…いい、いえ…決してそのようなつもりでは…」

希 …「ふふふ」

海未 …「は、話を続けてください…」

希 …「はい、はい…そんでな…緊急避難的に岩陰でビバークしたんやけど…」

穂乃果 …「ビバーク？」

海末 …「簡単に言えば、テントも張れず一時避難することです」

穂乃果 …「ああ…」

希 …「ところが…運悪く…ひとりが死んでしまった…」

絵里 …「…」

希 …「幸い、吹雪はやがて収まって…生き残ったもうひとりとは、亡くなった男性の遺体をシユラフに入れて、引きづりながら登山を続け…なんとか中腹にある山小屋に辿り着いたんよ」

絵里 …「くっ…」

希 …「山小屋で一息ついたAさんは…亡くなったBさんを雪中に埋め、ピッケルを突き刺し、墓標を建てた。ひとりでの頂上アタックは難しいと、下山することを決めた

Aさん。この山小屋で一晩、過ごすこととした」

海末　：「はい、登山は『やめる勇気もともと大事』と言いますから」

希　　：「次の日：朝、目覚めると：再び外は吹雪いていた。これはちよつと出られへんなあ：と思っていたところ、彼はある異変に気が付いたんよ」

穂乃果：「なにかあったの？」

希　　：「それがなあ：昨日、埋めたはずの遺体が：山小屋の前におつたんよ!!」

絵里　：「ひい!!」

希　　：「正確に言えば、入口の前で倒れてたんやけど」

真姫　：「ちよつと絵里！抱きついてこないで：」

絵里　：「希：その話：今ここで話す必要あるのかしら」

海末　：「あのくよろしいでしょうか？遺体を雪の中に埋めたのでしたら、夜のうちに強風で表面の雪が飛ばされて、ついでにそれも動いただけ：ということではないですか

？」

希 「さすが海未ちゃんやね。Aさんも一瞬そうかと思っただらしいんやけど…遺体はシユラフに入れたまま、雪の中に埋めたんよ」

海未 「!!」

穂乃果 「だとすると…遺体がそこから這い出てきたことになるよね？」

にこ 「断定はできないわ。その…フアスナーっていうの？…の締め方が余ったとか…条件が揃えば、そんなのどうだって理由がつくわ」

希 「にこっちの言う通りやね。Aさんも疑問に思いつつ、そういうことがあるかもしれない…ともう一度、彼を雪中に埋葬したんやって…今度は風で飛ばされないよう、重石（おもし）を付けてな」

絵里 「…」

希 「吹雪は止まず、Aさんはもう一晩、様子を見ることとした。その明るる日…」

絵里 …「きゃあ！」

希 …「いや、まだ何も言っていないんやけど…」

絵里 …「でも…いたんでしょ？そこに遺体が…」

希 …「正解！」

絵里 …「ほ、ほらあ…」

海未 …「確かにホラーですね」

一同 …「…」

海未 …「えっ？絵里は今、そういう意味で言ったのではないのですか？」

希 …「これからが面白いところなのに…えりちと海未ちゃんに全部持ってかれたわあ」

絵里 …「面白いとか、面白くないとか…どうでもいいわ」

希 …「つれないなあ…」

海未 …「私も狙って放ったギャグではありませんが…」

穂乃果 …「それで、それで？」

希 …「実は次の日も、その次の日も、AさんはBさんを雪中に埋めたんやけどな…翌朝になると必ず遺体が山小屋の前におって…」

穂乃果 …「うわあ！」

にこ …「それはさすがに恐いわね！」

希 …「ついにはAさんは気が触れてしもうて…自ら命を絶ってしまったそうな…」
凜 …「ど、どうして、それがわかったにや」

希 …「Aさんが書いた日誌やね。そこに全て記されておったんよ。あとから来たパーティーがそれを見つけた…ってワケやね」

絵里 …「それでこの話は終わり？」

希 …「おしまい」

絵里 …「そ、そう…思ったより大したことは無かったわね」

一同 …「…」

絵里　：「どうして、みんな怪訝そうな顔をしているの？」

くつづく

そんなことあるの？

海未　：「希らしいオカルトチックな話ですね。それが実話だとしても、そのAさんの思い込みといえますか：極限状態における幻覚のようなものだったのではないでしょうか？実際は起こっていないことを、さもあつたかのように感じてしまうという：」

希　　：「そういうことも、ありえるやろうね：でも：この事件に関しては、ある仮説があつてな：」

海未　：「仮説：：ですか？」

希　　：「遺体を掘り起こしてたのは、Aさんやつたんやないか：：つていう」

一同　：「!?」

にこ …「自分で埋めて、自分で掘り起こしてるの？」

穂乃果 …「だつたら気付くよね？」

凜 …「うん」

真姫 …「…ひよつとして…夢遊病？…」

希 …「さすが真姫ちゃん！お医者さんの娘やね！」

絵里 …「夢遊病？」

真姫 …「正確には『睡眠時遊行症』って言うの。無意識の状態で起きだし、歩いたり何かをした後に再び就眠するけど…その間の出来事を記憶していない状態を指すわ。その時間は、30秒から30分までの長さになり得る…」

穂乃果 …「ひよえ〜」

凜 …「真姫ちゃん、ウィキペディアみたいにや」

真姫　：「べ、別に…大したことじゃないわよ。医者を目指すものなら、知ってて当然のことだから」

にこ　：「つまり…そのAっていう人は、本人の意識が無いまま、遺体を掘り起こしていて…朝、起きて自分がしたとも知らず、ビックリしてた…ってわけ？」

真姫　：「興奮状態のまま眠りに就いたり、精神的なストレスが夢遊病の原因とされているから…吹雪の雪山、パートナーが死亡…という状況で発生したというなら、ないこともないかも…」

穂乃果　：「あれ？じゃあ、このあいだの合宿の時、穂乃果が岩の端っことで寝てたのも、夢遊病状態で歩いていったのかな？」

海未　　：「あなたにストレスがあるようには思えません…」

穂乃果　：「いやいや、それなりにあるんだよ…海未ちゃんに怒られたりとか、海未ちゃんに叱られたりとか、海未ちゃんに…」

海未　　：「もういいです!!それなら私の方がよっぽどストレスが溜まっていますよ!」

穂乃果：「…ごめん…」

真姫：「…で…どうしてそんな話をしだしたのよ？」

希：「ん？真姫ちゃん、ウチに言うてるん？」

真姫：「他に誰がいるのよ？」

希：「そやね…。えつと…えりちを恐がる姿が可愛くて…」

絵里：「希!!」

希：「…な…んてな…」

海未：「…ひよつとして…上履きの話ですか？」

真姫：「上履き？…えつ？まさか…」

希：「そう…あくまでも可能性のひとつとしてやけど…花陽ちゃんが、自覚も記憶もないまま起こしたことやないやろか…なんて思ったたりしてな」

にこ　：「前フリが長いわ！」

凜　　：「かよちんが、眠ったまま家からここまで歩いて来たってことかによ？」

穂乃果　：「それは無理だよ」

希　　：「確かに、眠った状態で：つていうには無理があるやろうね。：でも、そういう無意識の行動つて、普段でもたまにあるやろ？」

穂乃果　：「うん！あるある！テレビ見ながらお菓子食べてるとき、知らないうちに全部なくなつてることとかあるもんね！『あれ？いつの間に食べた？』みたいな」

海未　　：「その例えが適切かどうかはわかりませんが：」

希　　：「まあ、そういうこともありえるのかなあ：つていう、うちの妄言やね。さつき誰かが言うてたけど：こんなことをして誰が得するんやろう：つて考えても、思いつかないやもん」

海未　　：「はい：」

ことり　：「あれ？まだみんな練習始めてなかったの？」

花陽 …「本当だ。私たち来るの待っていてくれたのかな？」

穂乃果 …「おお、ことりちゃん！」

凜 …「かよちゃん！」

ことり …「ごめんね、遅くなっちゃって…そこで、かよちゃんと一緒にになったんだあ」

海未 …「どこに行ってたのですか？」

花陽 …「あれ？伝わってなかったかな？私はアルパカさんの…」

海未 …「ええ、花陽のことは聴いてますよ。ですが、ことりは…」

ことり …「あれ？穂乃果ちゃんに言ってなかったっけ？…ちよつと用があつて…」

穂乃果 …「ええ！そうだったっけ？ごめん全く覚えてないや」

海未 …「まったく、あなたって人は…」

穂乃果：「ひええ〜…こ、これも無意識な行動ってやつだよな？知らないうちに聴いていた…って言う…」

真姫：「それはただの健忘症じゃない？」

凜：「アルツにや、アルツ」

真姫：「よかつたら、いい病院紹介するわよ」

穂乃果：「お、お願いしようかな…勉強したところも、すぐ忘れちゃうし…」

海未：「それとこれとは話が別です!!」

穂乃果：「やつぱり…」

一同：「あははは…」

海未：「…では、全員揃ったので練習を始めますよ」

一同：「は〜い!!」

くつづく

体調不良

：

絵里　：「あれから1週間が過ぎたけど、そのあと特に何も無いわね」

真姫　：「相手が思ったより、私たちが大騒ぎしなかったから、悪戯を仕掛けても無駄だと思っただんじゃない？」

にこ　：「暖簾に腕押し？」

凜　　：「糠に釘？」

穂乃果　：「えつと…鬼に金ぼ…」

海未　　：「いえ、それは違います！」

穂乃果　：「早っ！」

ことり：「あはっ」

希：「KGBが動いたんや…」

絵里：「ないから！」

希：「早っ！」

ことり：「くすっ」

海未：「ところで…花陽は今日もアルパカの世話ですか？」

凜：「うん」

海未：「こここのところ、毎日ですね…責任感を持って熱心に仕事をするのは感心ですが…日に日に練習への参加が遅くなっていますね…」

ここ：「あの娘のことだから、サボッてる…ってことはないと思うけど…」

真姫：「アルパカの調子があまり良くないみたいで『心配だ』とは言ってたわ…」

穂乃果：「夏バテかかな？」

凜：「アルパカが？」

海未 …もうすぐ冬を迎えようというのにですか？

穂乃果 …だよね…じゃあ…ダイエット？

にこ …アホか…

絵里 …真姫は何かわかる？

真姫 …アルパカは専門外

絵里 …そうなのね

凜 …あ、そうだ！絵里ちゃん、ちよつと、かちんの様子を見てきてくれないか

にや？

絵里 …私が？

希 …ふふふ…凜ちゃんも意地悪やなあ…

ことり …私が見てくるね！

真姫 …「ことりが？」

ことり …「ちゆん？おかしい？」

真姫 ……なんでもない…」

穂乃果 ……確かに、この中でアルパカに一番馴れてるのは、ことりちゃんだもんね！」

絵里 ……そ、そうね！異論なし！私も適任だと思うわ」

凜 ……絵里ちゃん、行きたくないから必死にや」

絵里 ……な、なんのことかしら？」

海未 ……では、ことり……お願いしてよろしいでしょうか」

ことり ……はくい！じゃあ、ちよつと行ってきまゝす」

真姫 ………」

希 ……どうしたん？合宿が終わってから、花陽ちゃんのことりちゃんが急接近して
るのが気になる？」

真姫 ……「ヴェ〜…なにそれ、意味わかんない…」

希 ……「むふっ」

…

ことり：「あれ？あそこにいるのは…確か…かよちゃんと同じクラスの…」

モブ A ……で…だから…」

モブ B ……だし…でしょ…」

花陽 ……でも…」

ことり：「かくよちゃん！」

モブ A ……!？」

モブ B ……!？」

花陽 ……こと…南先輩！」

モブ A ……こ、こんにちわ！」

モブ B ……こんにちわ…」

ことり：「こんにちわ〜！2人もアルパカさんが好きなの？」

モブ A :「えっ?」

モブ B :「はい…あ、あんまり近づくと、怒りますよ!」

モブ A :「はい、歯を剥き出しにしてガー…って」

ことり :「アルパカさんが? ふふ…大丈夫だよ! ね?」

花陽 :「へっ? あ、はい…」

ことり :「?」

モブ A :「あ、あのく南先輩は良くここに来るんですか?」

ことり :「うん! モフモフで気持ちいいから」

モブ A :「そ、そうですね…」

モブ B :「は、はい、モフモフですよね!」

花陽 :「…」

ことり：「あつ…アルパカさん、具合悪いの？」

花陽：「えっ？あ、はい…食欲がないみたいで…」

ことり：「そうなんだあ…お医者さんに診てもらった方がいいのかなあ…」

花陽：「…かも知れません…」

ことり：「お母さ…理事長に伝えておくね」

花陽：「はい、お願いします」

ことり：「心配なのはわかるけど…かよちゃんの出来ることも限界があるから」

花陽：「…そうですね…」

ことり：「じゃあ、今日はここでお別れして、練習行こう？みんなも待ってるよ！」

花陽：「…」

ことり：「かよちゃん？」

花陽：「は、はい！練習、行きます！」

ことり：「かよちゃんも具合悪いの？」

花陽：「ふえ？わ、私は大丈夫ですよ！ご飯もちちゃんと食べてますし！」

ことり：「うん！なら良かった！……ところで、おふたりはどうしてここに？」

モブA：「えっ？あ……少し小泉さん元気無さそうだったから」

モブB：「どうしたの？って聴いたら、アルパカが具合良くない……って……」

モブA：「だから少しでも、小泉さんのお手伝いが出来ないかな……って……ね？」

花陽：「う、うん……」

モブB：「とはいえ、何も出来ないんですけど……」

ことり：「ありがとう、かよちゃんのこと、心配してくれてるんだね？」

モブA：「も、もちろんです！」

モブ B …「友達ですから！…ね？」

花陽 …「う、うん…」

ことり …「？」

モブ A …「じゃ、じゃあ、私たちもこれで…」

モブ B …「小泉さん、また明日ね」

花陽 …「う、うん…また明日」

モブ A …「バイバイ…南先輩、さようなら」

モブ B …「さようなら」

ことり …「さようなら」

花陽 ……」

ことり ……」

花陽 ……」

ことり ……」

花陽 ……」

ことり ……」

花陽 ……」

ことり ……「かよちゃん…」

花陽 ……「はい?…」

ことり ……「何かあった?…」

花陽 ……「いえ…」

ことり ……「隠し事はダメだからね?…」

花陽 …「!!…はい！ありがとうございます！花陽は大丈夫です！」

ことり …「うん！約束だからね！」

くつづく

成長してる

…

海未 …「ワン、ツー、スリー、フォー…あつ！花陽、危ないです！」

花陽 …「ぴゃあ！」

凜 …「にやつ!？」

にこ …「痛っ！ちよつと、気を付けなさいよう」

花陽 …「ごめんなさい…」

凜 …「凜は大丈夫にや」

にこ …やる気あるの？これで今日ぶつかるのは何回目よ！」

花陽 …「本当にごめんなさい！」

にこ …「怪我するなら、アンタひとりでしなさいよね！アタシたちを巻き込まないで！」

凜 …「そんな言い方ひどいにや！」

希 …「まあまあ……」

海未 …「体調…悪いのですか？」

花陽 …「!?…だ、大丈夫です！なんともないです！」

絵里 …「そう、ならいいけど…ただ私の目から見ても、今日の花陽は少し集中力を欠いているように思えるわ……」

海未 …「…確かに今は、最終予選突破という大きな目標がありますし、ここで頑張らないと…という気持ちわかりますが…穂乃果の二の舞だけは、踏んで欲しくないのです」

穂乃果：「まくた、海未ちゃんは、そうやって穂乃果を引合いに出すう…」

海未：「そういうつもりではありませんが…」

穂乃果：「まあ、確かに海未ちゃんの言う通りなんだけどさ…。自分で言うのもなんだけど…『良かれ』と思つて頑張つても、ひとに迷惑掛けちゃうこともあるんだよね…」

海未：「はい…厳しいことを言いますが…最終予選のステージは、誰ひとり欠けて欲しくはありません。ですから、休む時はしっかりと休んで頂かないと…」

花陽：「…そうですね…じゃあ、お言葉に甘えて…今日は帰ります…」

一同：「!!」

花陽：「多分…エネルギー不足です…」

凜：「あんなに食べてるのに!?!」

ことり：「だったら、お菓子持つてるよ!食べる?」

花陽：「ありがとうございます、南先輩…でも、今日は遠慮しておきます…明日か

らは、もつといっぱいおにぎりを持ってきますね！」

ことり：「かよちゃん……」

花陽：「では、失礼します……」

一同：「えっ？……」

ことり：「本当におうちに帰っちゃた……」

一同：「……」

一同：「……」

一同：「……」

にこ：「……どうしたの？なに、みんな黙ってるのよ！練習を続けるわよ！」

凜 「にこちゃんは冷たいにや」

真姫 「あなたの一番弟子でしょ？心配じゃないの？」

にこ 「心配に決まってるでしょ！！！！」

凜 「にこちゃん……」

真姫 「にこちゃん……」

にこ 「お腹が空いた？それは嘘じゃないかも知れないけど『じゃあ帰ります』なんて……今までアイツがあんなこと言ったことある？アイドルに懸ける情熱なら誰にも負けないハズの花陽が……腑抜けた顔して帰って行ったのよ！心配しないワケないじゃない！」

凜 「……ごめん……」

真姫 「……そうよね……」

にこ …でも…だからと言って…簡単には手を差し伸べられない」

希 …「にこっち…」

にこ …「花陽はああ見えて、芯の強い娘よ。何かあっても自分で乗り越える力を持つてる。アタシはそう信じてるから…」

絵里 …「さすが、にこね」

穂乃果 …「だけどさ…実際、何かあつたら困るよね？」

希 …「もちろん、それはそうやけど…そうならないように陰から支えてあげるのも大事…つてことなんやないかな」

海未 …「希が…私たちを導いてくれたように…ですか？」

希 …「はて…なんのことやら…」

海未 …「忘れたというなら、それ以上は申しませんが…」

穂乃果 …「ところで、さつき花陽ちゃん、おかしなこと言ってなかった？」

絵里 …「おかしなこと？」

穂乃果：「ことりちゃんのこと『南先輩』って呼んでなかった？」

絵里：「そういえば……」

凜：「言つてたにや……」

ことり：「うーん……そのことなんだけど……実は……ちゅんちゅんしかじか……で……」

海未：「つまり、話をまとめると……最初の騒動があつた頃から、体型を過度に気にしている様子が見られる……ということですか」

絵里：「そして……クラスメイトから私たちへの呼び方を指摘されて、妙に畏（かしこ）まっている……と」

にこ：「馬鹿じゃないの!?!どっちも今更気にするんじゃないでしょ!」

海未：「体型維持は気にして欲しいですが……」

凜：「むしろ、かよちゃんより希ちゃんの方が太っ……」

希：「ほう、凜ちゃん……ウチに喧嘩売ってるん?あとでワシワシMAXのお仕置きやね!」

凜 …「本当のことを言っただけにや〜」
希 …「ウチは元々この体型やん！別にダイエットが必要なほど、太ったりはしてへんよ…あ、胸は未だ成長中やけどな」

凜 …「そんなことは訊いてないにや！」

にこ …「訊いてないわね！」

海未 …「はい、訊いてないですね！」

希 …「あつ！もしかして、花陽ちゃんも同じ悩みを抱えてるんかな」

絵里 …「胸はダイエットできないものね」

凜 …「そうなの？」

にこ …「知らないわよ！」

海未 …「はい、知りません…」

ことり …「…」

海未 …「どうしましたか？」

凜 …「ことりちゃんも胸の大きさに悩んでるにや？」

海未 …「その気持ちわかりますよ、ことり」

ことり …「えっ？違うけど…」

穂乃果 …「ぶっ！あつさり否定されてる」

凜 …「にや〜！感じ悪いにや！」

海未 …「…ことり、裏切りましたね？」

ことり …「ちゅん？」

希 …「本題から逸れてるやん？」

にこ …「誰のせい？」

希 …「にこっち？」

にこ …「ぬわんでよ！」

真姫 …「はあ…で…何か気になることでもあるわけ？」

ことり …「う〜ん…そういえば、さつきもあの2人がいたな…って思ってた」

穂乃果 …「あの2人って…えっと、今、話のあった、ことりちゃんファンの…」
海未 …「花陽のクラスメイトですか？」

ことり …「うん」

凜 …「あく〜！あの2人、最近、かよちゃんに付きまどつてるにや」

…「ストーリーカー？」

真姫 …「付きまどつてる…は語弊があるけど…随分と仲良さ気にしてるのは、その通りかしら。最近はお昼も一緒に食べたりにしてるし、ことある事に花陽の傍にいるのは確かだね」

希 …「…で…凜ちゃんと真姫ちゃんは、その2人に焼きもちを妬いてる…と」

真姫 …「ヴェく…ど、どうしてどうなるよ」

凜 …「り、凜はかよちに新たな友達が出来て、嬉しく思ってるにや…」

にこ …「2人とも、わかりやすい反応するわね…」

穂乃果…「ふうん…でも、ことりちゃんファンなら、なんで花陽ちゃんにくつついてるんだろう?」

絵里 …「それもそうだけど…その2人は今回のことと関係あるのかしら」

海未 …「そうですね…ことりの話が正しければ、彼女たちの花陽に対する接近と今回の事件は、時期的に重なっています…」

希 …「動機はなんやろう?…ってことやね」

海未 …「はい…」

にこ …「むしろ、花陽に急接近のクラスメイトに嫉妬した凜と真姫が…激しい嫉妬から、あの娘に嫌がらせをしてる…っていう方が正解だったりして」

凜 …「怒るよ！」

真姫 …「いくらにこちゃんでも、さすがにそれは看過できない発言だわ」

希 …「まあまあ…なんにせよ、1回、その2人に話を訊いてみる必要があるそうやね…何か知ってるかも知れんし…」

海未 …「はい」

真姫 …「だったら私が…」

希 …「いや、ここは『当事者』やない人がいいんやないかな？ウチとえりちは被害に遭ってるし…ことりちゃんも2人がファンやと言うなら除外やね…」

にこ …「なら、アタシの出番…」

希 …「にこつちと海未ちゃんは、相手を怖がらすだけやから…」

にこ …「ぬわんでよ！」

希 …「ここは穂乃果ちゃんが適任やね！」

穂乃果 …「わ、私!?!…わかった!…やってみるよ！」

絵里 …「任せたわよ」

穂乃果：「OK！みんな泥舟に乗ったつもりでいてね！」

にこ　：「沈むわ！」

海未　：「それを言うなら大舟です！」

穂乃果：「たはは…そうだった…」

くつづく

どっちもどっち

：

穂乃果：「おはよう！」

凜：「おお！穂乃果ちゃん！」

花陽：「お、おはようございます…き、昨日はすみませんでした…」

穂乃果：「いいの、いいの、気にしなくても！本当は今日、お休みするんじゃないかな
…なんて思ってたんだけど、ちゃんと来たんだね！偉い、偉い」

花陽：「…はい…」

穂乃果：「うん！ところで花陽ちゃんのクラスにさあ、ことりちゃんの熱烈なファンが
いるって聞いたんだけど」

花陽：「!!」

穂乃果：「どの娘がそう？」

真姫：「今日はまだ来てないみたい…」

穂乃果：「そっか」

花陽：「そ、それで…どうして穂乃果ちゃんが？」

穂乃果：「なんで穂乃果のファンじゃないのかなあ…つて」

花陽：「ふえっ？」

穂乃果：「そんな変わらないと思うんだけどなあ…穂乃果とことりちゃんて。だからそれを確かめてみよう」と

真姫：「嘘でしょ？そんなことを訊きに、わざわざ？」

凜：「どうかしてるにや」

花陽：「あはは…」

真姫：「あら、噂をすれば影…よ」

穂乃果：「この娘たち？」

真姫 ……くっ

穂乃果：「おっはよく!!」

モブA ……!？」

モブB ……!？」

穂乃果：「μ'sのリーダーこと、高坂穂乃果です！」

モブA ……うわっ！お、おはようございます！」

モブB ……おはようございます！」

モブA ……ど、どうされたんですか？」

モブB ……1年生の教室なんか……」

穂乃果：「うん、ちよつと真姫ちゃんたちに用があつてね！」

モブ A :「あつ…ですよねえ！」

モブ B :「愚問でした…」

穂乃果 :「ねえねえ、あなたたち、ことりちゃんのファンなんだって？」

モブ A :「は、はい！」

モブ B :「な、なぜ、それを…」

穂乃果 :「ことりちゃんから聞いたんだ。昨日も会った…って」

モブ A :「あ、はい…アルパカ小屋で…」

モブ B :「お会いしました」

穂乃果 :「ふうん」

モブ A :「？」

モブ B :「？」

穂乃果：「いや…穂乃果とことりちゃんって…そんなに違うかな？」

モブ A …「えっ？」

モブ B …「先輩と…ですか？」

穂乃果：「私もそういう熱狂的なファンが欲しいなあ…って思ってたさ」

モブ A …「はあ…」

モブ B …「まあ…」

穂乃果：「身長だって、スタイルだって、そう変わらないはずなのに、この差はなに？
なにが違うの」

モブ A …「えつと…」

モブ B …「その…」

真姫 …「そういうことをムリヤリ言わせるのってパワハラじゃない？」

凜 …「そうにや！そうにや！」

花陽 …「う、うん…」

穂乃果 …「そうかなあ？」

モブA …「高坂先輩には高坂先輩の良さがあるっていうか…」

モブB …「はい…元気で明るいとところとか、それはそれで素敵だと思います」

穂乃果 …「うんうん！だよねえ！」

モブA …「ただ、たまたま私たちは南先輩の方がタイプなだけで」

モブB …「はい…見た目はもちろんですけど、声も話し方も雰囲気も…全てが好きなんです」

穂乃果 …「うわあ…結構、はつきり言うねえ…」

モブA …「えっ？あつ…す…すみません…」

モブB …「べ、別に高坂先輩が嫌だ！と言ってるわけじゃ…」

穂乃果 …「な、慰めの言葉なら要らないよ…」

真姫 …「かなりシヨックを受けてるわね」

凜 …「哀れにや…」

穂乃果 …「おっと…チャイムが鳴った！早く教室に戻らないと海未ちゃんに怒られちゃう！じゃあ、みんな、またね！」

凜 …「バイバイ」

花陽 …「うん、またあとで」

真姫 …「そうね、またあとで」

凜 …「ノックアウト寸前だったけど、ゴングに救われたにや…」

モブA …「えっと…なんだったの？」

モブB …「嵐が…吹いたみたい…」

凜 ……「いつものことにや」

真姫 ……「日常ね」

花陽 ……「う、うん…」

：

海未 ……「それで…その2人について何かわかったのですか？」

穂乃果 ……「何か？つて…何？」

海未 ……「ですから花陽とのことですよ！」

穂乃果 ……「あっ!？」

海未 ……「えっ!?!…まさかと思いますが…何も訊いていないのですか!？」

穂乃果 ……「あはは…」

海未 ……「まったく、あなたつて人は…」

穂乃果 ……「いや、海未ちゃん！冷静に考えて…だよ…仮に穂乃果がその任務を遂行しようとしたとしても、花陽ちゃんがいる前じゃ、訊くに訊けないじゃん！『あなたたちは花陽ちゃんに何かしましたか？』なんて」

海未 …「それはそうですが…」

穂乃果 …「だから、今はそれをする為の事前準備っていうか…種蒔きっていうか…ねえ、ことりちゃん…ってあれ？…ことりちゃんは？…」

海未 …「それが一緒に教室まで来たのですが、そのあとすぐに『用がある』と出て行ってしまっ…」

穂乃果 …「えっ？」

海未 …「ことりのことですから、ホームルーム前には戻ってくると思います…」

穂乃果 …「へえ…」

…

希 …「理事長の娘さんが、授業サボったりしたらあかんのんちゃう？」

ことり …「!!…あつ…そういう生徒会副会長さんも…おサボりはいけませんねえ」

希 …「ウチはお腹痛くて、保健室に行ったことになってるんよ」

ことり：「そうなんだあ…じゃあ、私もお母さんのところに行つてた…つてことにしようかなあ」

希 …「職権乱用や」

ことり：「うふっ」

希 …「まあ、それじゃあ、今の状況はお互い様やつていうことで…」

ことり：「うん」

希 …「それで…こんなところで何してるん？アルパカのお世話なら、花陽ちゃんの担当やろ」

ことり：「ちよつと気になることがあつて…。そういう希ちゃんは？」

希 …「!!…偶然にも…ことりちゃんと一緒やねん」

ことり：「へえ…」

希 …「…で、ことりちゃんの気になることつて…」

ことり：「うーん…それは…まだ秘密…」

希 …「ん？」

ことり：「ごめん！まだそれは言えないの…」

希 …「今回の件…まだ全容が掴めてへんけど…ことりちゃんも容疑者のひとりなんよ」

ことり：「ことりが？」

希 …「まあそれを言ったら、授業をサボってここにいるウチも、充分怪しい人なんやけどねえ」

ことり：「あはは…」

希 …「μ、sの中に犯人がいる…なんて思いたくはないんやけど…まだ確信が持てないんよ」

ことり：「確信？」

希：「そやから、ウチもここに来た理由は、明かせない……」

ことり：「……」

希：「お互い様やろ？」

ことり：「はい」

希：「うむ、よきに計らえ」

ことり：「あはっ……じゃあ、ことりは先に戻りますね」

希：「もう用は済んだん？」

ことり：「うん！昨日は暗くてよくわからなかったけど……」

希：「……？」

ことり：「こつちの話ですす！あ、みんなにはここに来たこと内緒にしておいてくださいね！」

希 …「そうやなあ…それを話したらウチもここにいたことバレちゃうなあ」
ことり…にゅっ

希 …「悪い娘やね」

ことり…「えへっ…でわ、でわ…またあとで…」

希 …「ほな…」

希 …「…」

希 …「…」

希 …「!!」

希 …「小屋の奥に落ちてるのは…」

希 …「…おかゆ?…いや…違う…アレやんか!!…あかん、もろ見てしもうた…
うえつぶ…もらいゲーしそうや…」

~~~~~

# 怪しいふたり

：

にこ　：「あんたたちだけ？」

穂乃果　：「みたいだね…」

にこ　　：「ほかの連中は？」

凜　　　：「かよちゃんは、アルパカさんのところに行ってるよ」

にこ　　：「まったくアイツは、アルパカと<sup>々</sup>sとどっちが大事なのよ」

穂乃果　：「海未ちゃんも、弓道部に顔を出すって…なんか、来週大会があるらしいんだ。みんなには迷惑掛けたくない…って黙ってたみたいだけど」

凜　　　：「そうなんだ！それじゃあ、応援に行かないと！」

にこ　　：「それが迷惑だ！って言ってるんじゃないの？弓道ってよく知らないけど、精神の集中が大事なんでしょう？アンタたちみたいにいるさいのがギャーギャー騒いでた

ら、それどころじゃない……ってことじゃない?」

凜 「その言い方は酷いじゃ!」

穂乃果 「だよね! 穂乃果たちだってTKOくらいわかるよ」

にこ 「それを言うならTPOよ!」

凜 「どういう意味じゃ?」

にこ 「えつ? えつと……タイム……プリーズ……オーケー?」

穂乃果 「おお……」

凜 「やるじゃ」

絵里 「タイム……プリーズ……オケーション……時と所と場面じゃない?」

穂乃果 「おお、絵里ちゃん!」

凜 「やるじゃ!」

にこ 「何? 盗み聴き?」

絵里 「今、来たところよ。入ろうと思つたら、にこのマヌケな説明が聴こえてきたか

ら…って…物の見事に…アナタたちしか居ないのね」

にこ …「物の見事に…って」

絵里 …「他意はないわ」

にこ …「ありありじゃない」

穂乃果 …「海未ちゃんは弓道部、花陽ちゃんはアルパカ…までは判明したよ」

凜 …「真姫ちゃんは、希ちゃんと呼ばれたって言ってたけど…」

絵里 …「それは私も聴いたわ。ちよつと真姫に相談したいことがある…って」

にこ …「ふくん…」

絵里 …「ことりは？」

穂乃果 …「やつぱり、用がある…って。内容までは知らないけど」

絵里 …「…そう…」

にこ …「ラブライブの決勝が控えている…って言うのに、みんな、なに考えてるのか  
しら」

絵里 …「…そうね…」

…

真姫 …「アルパカ小屋？前にも言ったけど、私は獣医じゃないから、診察なんて出来ないわよ」

希 …「そうやね」

真姫 …「じゃあ…」

希 …「真姫ちゃんにどうしても見てほしいものがあつてな…」

真姫 …「なに？」

希 …「ゲー…なんやけど…」

真姫 …「ゲー？…っ…音階のソのこと？」

希 …「それはG（ゲー）やろ？」

真姫 …「合ってるじゃない」

希 …「いや、そやからそのゲーやなくて…」

真姫 …「マジックでも覚えたの？」

希 …「なんでアルパカ小屋で芸を披露しなきゃいけないん？」

真姫 …「じゃあ…その…男の人同士の…」

希 …「ウチの学校は女子高やから、レズはおつても、ゲイはおらんちやう？」

真姫 …「…」

希 「そこは引くとこちやうやん」

真姫 「はあ？じゃあ、なんなの？意味わかんない」

希 「ウエツ…つてなる方の…」

真姫 「ああ…嘔吐のことね…ゲロならゲロつて言えばいいじゃない」

希 「いや〜ん真姫ちゃん、アイドルがゲロだなんて…」

真姫 「…」

希 「ウチにも羞恥心つてものがあるんやで」

真姫 「…それで…それがどうしたの？」

希 「…これなんやけど…」

真姫 「…えっ！いきなり見せないでよ！」

希 「言うたやん、ゲーを見て欲しい…つて」

真姫 …「そうだけど…!!…この吐瀉物（としゃぶつ）って…」

希 …「なあ、真姫ちゃん…アルパカってご飯食べるんやろか…」

真姫 …「どうかしら？ 私は聴いたことないけど…」

希 …「そうやろ…」

真姫 …「海苔も食べないと思うし、鮭も食べないと思うわ」

希 …「さすが真姫ちゃん、お医者さんの卵だけあって、冷静な観察力やね」

真姫 …「出来れば私だっけ見たくないけど…」

希 …「…ウチもや…暫くお鍋のあとのおじやは食べられへん…」

真姫 …「そういうこと言うのにやめてよ」

希 …「でも、真姫ちゃん、お医者さんになったら、手術の後でも、焼き肉食べたり

するんやろ？」

真姫 …「知らないわよ…って、こんなものを見せる為に、ここに呼んだの？」

希 …「ここにそれがある理由…真姫ちゃんならどう考えるんかな…って…」

真姫 …「!!」



希 ……そういうことやね…」

…

海末 …「ふう…久しぶりに矢を放ちましたが…μ sの練習とは違った疲れがありますね…少し、外に出て気分転換をしましょう…」

海末 …「!?…おや、あれは花陽と…ことりじゃないですか…何をしてるのでしょうか…」  
こんなところで…」

海末 …「花陽は…泣いているのでしょうか…邪魔するつもりはありませんが…一連の事件と関係があるかも知れません…声を掛けてみましょう」

海末 …「花陽、ことり、どうしたのですか？」

花陽 …!!」

ことり：「海未ちゃん！」

海未 …「部活はどうしたのですか？」

ことり：「海未ちゃんこそ」

海未 …「私は…見ての通り、弓道部の練習に参加してました。みんなには黙ってたんですが、大会が来週あるもので…」

ことり：「えっ？」

海未 …「時期が時期ですし、*μ*、*s*を疎かにするつもりはないのですが…かと言って、こちらでも退部したわけではありませんので…」

ことり…「そうなんだ…。だったら、ちゃんとやってくれば…みんなまで応援に行かないきゃ」

花陽 …「うん」

海未 …「いえ…それには及びません。気持ちがありますが…『フレ、フレ、フレ、フレ』という競技ではありませんから」

ことり：「ふふっ…じゃあ、静かに観てるね」

海未：「もし来ていただけるのであれば、そうして欲しいですね。…で、あなたたちは…」

ことり：「えつと…」

花陽：「花陽が呼び出したんです」

ことり：「えっ?」

海未：「えっ?」

花陽：「ことりちゃんに付き合ってください…って告白しました」

ことり：「えっ?」

海未：「えっ?」

花陽：「弓道場の裏で告白したら、上手くいくって聞いたんです…」

海未 …「そうなんですか？」

花陽 …「恋の矢が刺さる…って」

海未 …「初耳ですが…」

花陽 …「ラブアローシュート♡です」

海未 …「えっ!？」

花陽 …「なくんて…どうもその噂は、嘘だったみたいですよ…ことりちゃん、さっきのことは忘れてください!」

ことり …「かよちゃん…」

花陽 …「では…私は部活に行きます!」

海未 …「花陽!」

ことり …「かよちゃん!」

海未 …「行ってしまいましたね…」

ことり …「うん…」

海未 …「花陽は…さつき泣いていました…ことりは…断つたのですか…」

ことり …「…」

海未 …「私が言うのも何ですが、二人はとてもお似合いのカップルだと思います。確かに凜や真姫のことを考えると、胸が痛いですが…」

ことり …「違うの!」

海未 …「!?!」

ことり …「違うの、海未ちゃん!」

海末　：「違う？何がですか？…あつ…断ったわけではないのですね？」

ことり　：「そうじゃないの…」

海末　　：「はて…」

ことり　：「お願い！今、見たことはみんなに黙つて欲しいの…」

海末　　：「は、はい…私は人の恋路を邪魔するほど、野暮ではありませんよ」

ことり　：「そういうことじゃないんだけど…」

海末　　：「はあ…」

ことり　：「とにかく、かちゃんのことりがここに来たことは、みんなには内緒にして。お願い♡」

海末　　：「!!…も、もちろんです。ことりの頼みですから、それは約束しますよ」

ことり　：「ありがとう！海末ちゃん、大好き！」

海末　　：「だ、抱きつかないでください！わ、私はまだ、練習がありますので…一旦、戻りますよ！」

「ことり：「はーい！頑張っ  
てね！」

ことり：「私も練習に行かないと……」

くつづく

W ↓ 草生えた：的な：

：

にこ 「それにしてもアイツら遅いわね」

穂乃果 「海未ちゃんは別として、他の人たちは何をしてるんだろう：」

絵里 「私たちだけでも、先に練習してましよう」

凜 「うん」

真姫 「私たちもすぐ行くわ」

希 「遅くなってもうた」

穂乃果 「おお、真姫ちゃん、希ちゃん！」

にこ 「相談は終わったの？」

希 「相談？」



にこ …「真姫ちゃんとコソコソなにか話してたんじゃないの?」

希 …「コソコソって…ん?にこつち、妬いてるん?」

にこ …「はあ?」

希 …「安心しい…えりちに告白するには、どうしたらいいんやろ?…つて訊いてただけやから」

絵里 …「まあ!」

真姫 …「それ、真に受ける?」

にこ …「アホくさ…」

花陽 …「遅くなりました!」

凜 …「かよちゃんも来たにや!」

にこ …「遅い!」

花陽 …「すみません…」

にこ …「…アルパカの世話も大切かも知れないけど、少しはこつちのことも気を使いなさいよ」

花陽 …「う、うん…」

希 …「ん？花陽ちゃんはアルパカ小屋に行つてたん？」

花陽 …「へっ？う、うん…」

希 …「…？…」

真姫 …「…？…」

花陽 …「？」

ことり …「ごめくん、遅くなっちゃった！」

穂乃果 …「そして、ことりちゃんがゴメンで登場！」

にこ …「どこかで聴いたことあるフレーズね…」

凜 …「ことりちゃんは何してたんにゃ？」

ことり …「ことり？ことりは…えっと…海未ちゃんの激励？あ、海未ちゃん、来週、弓

道の大会があるって…」

真姫 : 「そうね…忘れてたけど、そう言えば海未って、弓道部だったのね」

希 : 「来週大会なんや!」

穂乃果 : 「みんなには気を遣わせるから黙ってて…って言われたんだけどね」

希 : 「そんな水くさいやん!これは応援に行かないと…やね」

ことり : 「うん!でも、来るなら静かにして下さい…って言ってたよ」

希 : 「うくん…ウチらには一番苦なことやね」

絵里 : 「ウチら…って、私を含めないでよ」

真姫 : 「右に同じ」

希 : 「つれないなあ…ウチらは『一心同体、少女隊』やん!」

ここ : 「ぷっ!また随分昔のネタ、ひっぱり出してきたわねえ」

穂乃果 : 「なにそれ?」

花陽 : 「80年代のアイドルグループが出ていたCMのキャッチコピーです」

凜 : 「希ちゃんは博学だにや」

希 : 「勉強には、なぐんの役にも立たんけど」

真姫 : 「いるわね、そういう人…」

凜 …凜、思うんだ！希ちゃんは絶対、歳を誤魔化してる！つて。本当は50歳くらいなんだよ」

希 …「だとしたら…ウチ、メツチャ若いやん！美魔女やね、美魔女！」  
にこ …「はあ？」

希 …「ハッ!!」

一同 …「!？」

希 …「それでこないだのハロウィーンの衣装、ウチは魔女やったん？」

ことり …「ちゆん？」

真姫 …「関係ないんじゃない？」

花陽 …「あはは…」

にこ …「まったく…真顔で何を言い出すかと思えば…アンタたちと喋っていると調子狂うわ」

絵里 :「アンタたち…って、私を含めないでよ」

真姫 :「右に同じ」

にこ :「だあ！かあ！らあ！そういうのいいから！遅刻組はさっさと着替えて、上に来なさいよ！私たちは先に行くわよ！」

穂乃果 :「いつてらっしや〜い」

凜 :「バイバイ」

にこ :「じゃあ…って、アンタたちも一緒に行くのよ！」

一同 :「あははは…」

：

穂乃果 :「うう…風が冷たいねえ…」

にこ :「なんだかんだで、もう11月も半ばだからねえ」

凜 :「炬燵が欲しいにや」

穂乃果 :「おっ！いいねえ！」

にこ :「なにバカこと言ってるのよ！そこはストーブでしょ」

絵里 :「どっちもどっちじゃない…」

凜 …「絵里ちゃんは寒くないにや？」

絵里 …「そこまでは…」

穂乃果 …「さすがロシア人！」

絵里 …「クオーター！4分の1しかロシアの血は混じってないわよ」

にこ …「育つてきた環境の違いじゃない？」

絵里 …「確かに、それはあるかも…なんて話をしてても、身体は暖ったまらないわ！早くランニングから始めましょう」

凜 …「ラジャーにや！って…あれ？」

絵里 …「どうしたの？」

凜 …「下を見て！チョークでなにか書いてあるにや！」

絵里 …「えっ？」

穂乃果 …「チョークで…」

にこ …「なにか書いてある？」

…

真姫 ……で、あなたたちが上がってきたときには、すでにこれを書いてあった…」  
穂乃果 ……「そうなんだよ！ナスカの地上絵か！…っていうくらい、こんなにおつきく！」  
真姫 ……「それは見ればわかるけど…」

希 ……『※デブはタヒね!!』…』

凜 ……「どういう意味かにや？」

ことり ……「単なる落書きじゃないのかな？」

穂乃果 ……「ならいいんだけどさ…でも気になるじゃん！上履き事件とかあったばっかりだし…」

にこ ……「…」

花陽 ……「…」

絵里 ……「誰が書いたのかしら」

真姫　：「この出入り口は、施錠されてるワケじゃないし：誰でも入れるから…」

希　　：「お昼をここで食べる人もおるしね」

凜　　：「でも、sがここで練習してることとは、みんな知ってるよね？ 教えて、こんなこと書いて行くかにや？ しかも、こんなに大きく」

にこ　：「アタシたちへの脅迫と見て間違いないわね」

一同　：「脅迫!?!」

にこ　：「『タヒね』はネット用語で『死ね』っていう意味よ」

一同　：「!!」

にこ　：「カタカナの『ネ』と漢字の『申』って書いて『ネ申』で神つてしたりするのと同じ」

穂乃果　：「ああ、なるほど：そう言われてみれば『死』って見えなくもないね」

凜　　：「じゃあ：『デブは死ね!!』って書いてあるってこと？」



にこ …「単なるイタズラ書きで残すような言葉じゃないわ」

絵里 …「穏やかじゃないわね」

凜 …「凜たちがここで練習していることを知ってて、書いていったの?」

穂乃果 …「だとすると…このデブって…」

凜 …「希ちゃん?」

希 …「ウチなん?」

凜 …「他にいないにや!」

希 …「あとでワシワシMAXスペシャルの刑やからね!」

凜 …「にや〜!!」

絵里 …「希…あなた、なにかした?」

希 …「はて…なんやろ?…恨まれるとしたら…えりちに手え出したことくらいやろか…」

穂乃果 …「手え出したの?」

凜 …「それは重罪だにゃ」

にこ …「責任問題だわ」

絵里 …「ちよつと、希!変なこと言わないでよ」

希 …「むふっ」

絵里 …「笑ってる場合じゃないわよ」

真姫 …「その前に、これが本当に私たちへの脅迫かどうか…断定するには早すぎると思うんだけど」

希 …「そうやね。このままやと、ウチがデブって認めてしまうことになりそうやも」

んね」

凜 …「いや、そこは否定できないにや！」

希 …「凜ちゃん…ワシワシされ過ぎて、元々ペツタンコな胸が、扶（えぐ）れて無くなっても知らんよ！」

凜 …「にや〜！希ちゃんなんかタヒんじやえ〜！」

一番 …「あははは…」

花陽 …「…」

〜つづく〜

## こどりのおやつ

がちや…

一同 …びくっ！

モブA …「あゝ…失礼します」

穂乃果 …「びっくりしたあ!!…あら？あなたは今朝の…」

モブB …「あっ…はい…」

海未 …「その方たちは？」

穂乃果：「例のことりちゃんファンだよ…」

海未：「!？」

真姫：「…今、練習中なんだけど…何か用？」

花陽：「ま、真姫ちゃん！」

モブA：「あつ、ごめん…邪魔するつもりはないんだけどさ…えつと…これ差し入れ…」

穂乃果：「差し入れ?…うわあ、えつ?チーズケーキ?」

ことり：「ちゅん?」

モブA：「たいした物じゃないですけど…少しでも皆さんの力になれば…つて思  
いまして…ね?」

モブB：「うん。私たちも、sの一員になれたらいいんですけど、それは無理そう  
なので…こんなことしかできませんが…」

穂乃果：「全然、全然!…こういうことは大歓迎だよ!」

絵里　：「お断りするわ！」

一同　：「えっ！」

穂乃果　：「絵里ちゃん？」

絵里　：「あなたたちの気持ちはとっても嬉しく思うわ。まずは素直に…ありがとう…と言うべきね。でも、学校の存続が決まった今、私たちが、sを続けている理由は『ライブライブに出場したい！』という至極、個人的な理由。だから一般生徒に『施（ほどこ）し』を受けてまで応援してもらおう…というのは、何か違う気がするの。だから…その…気持ちだけは頂くわ」

希　　：「久々に賢い方のえりちやね」

穂乃果　：「え、せっかく、持つてきてもらったんだから、頂くのは頂こうよ！ナマ物だし…持つて返れ！…っていうのは、逆に失礼だよ！」

絵里　　：「それはわかっているわ。2人の気持ちは本当にありがたいと思ってる。だけど、これを良しとして受け入れてしまうと、次から次へと差し入れやらプレゼントを頂

くようになつて、やがて歯止めが掛からなくなるわ…なんてことをいうのは…ちよつと自惚れすぎかしら?」

にこ :「まあ、アタシはμ s の実績を考えれば、なんかしら感謝の気持ちを形にして欲しい…とは思つてるけどねえ」

絵里 :「にこ…」

凜 :「絵里ちゃんは真面目すぎるにや」

絵里 :「でもね、凜…私たちはアイドルである前に学生なの。少し目立つ存在ではあるかも知れないけど、むやみやたらな物品の授受は避けるべきだと思うわ」

モブA :「…」

モブB :「…」

希 :「さすが、えりち…元生徒会長らしい意見やね」

絵里 :「私、間違つたこと言つてるかしら?」

海未 :「いえ…絵里の言う通りだと思ひますが…」

希 :「そやけど…穂乃果ちゃんの言うことも理解できるんよ。折角の好意を無碍に断るのも、どうなんやろか?」

絵里 …「希…」

希 …「今回はありがたく頂いておけば？今後については…まあ校内でアナウンスとかして、周知徹底すればいいんじゃない？」

穂乃果 …「は〜い、じゃあ、それは現生徒会の私たちが引き受けま〜す」

海未 …「また勝手に…」

ことり …「ふふふ…」

絵里 …「まったく…仕方ないわね…」

穂乃果 …「…というわけで…そのチーズケーキ、ご馳走になります！」

モブA …「あ、はい…どうぞ…」

穂乃果 …「…つて…そういうえば、何故チーズケーキ？」

ことり …「うわあ！…もしかしてこれ…あのお店で出たばかりの新作!？」

モブA …「やっぱり、わかりますか？」



ことり：「うん！この間、かよちゃんと食べて帰ろうと思ったんだけど…行き損なっちゃったから…ね？」

花陽　：「あつ…」

モブB　：「だったら調度よかったです！南先輩はチーズケーキ大好きだって聞いたので…」

ことり：「ちゅん？」

モブB　：「えっ？あつ…小泉さんに教えてもらいました。他にもマカロンとかクッキーとか、自分で作るほどのお菓子好きだって…」

穂乃果：「おお！なるほど、そういうことか！」

凜　　：「どうしたにゃ？」

穂乃果：「えつと…つまり…」

真姫：「穂乃果、その話はまたあとでしましょう」

穂乃果：「えつ？あ…うん…」

凛：「？」

穂乃果：「じゃあ、頂くね…」

凛：「あれ…1、2、3…全部で8つしかないよ？ひとつ足りないにや？」

穂乃果：「あ、本当だ…μ sは9人いるって知らなかった？」

モブB：「い、いえ…もちろんそんなこと無いです。ちゃんと知ってます」

モブA：「実は…残りのひとつは…これなんです！」

一同：「お、おにぎり？」

凛：「あつ、凛、これ、知ってるよ！今、コンビニで大ヒットしてる『地獄のおにぎり』だね？かよちゃんの大好物にや」

穂乃果：「地獄のおにぎり？」

凜　　：「ひとつのおにぎりの中に具が3種類入ってて…確か…陸上強豪校の寮母さんが最初の作ったんじゃないかな？」

穂乃果：「へえ…」

凜　　：「とにかく美味しくて、ついつい食べすぎちゃうんだって…」

穂乃果：「それで後からダイエットに苦しむことになる…と。それは確かに『地獄』だね」

海未　：「なぜ私の顔を見ていうのですか？」

穂乃果：「いや…別に…」

モブA　：「小泉さんは無類のお米好きだと知っていますので…チーズケーキよりはこっちのほうがいいかと…」

モブB：「はい」

花陽　：「う、うん…ありがとう」

海未　：「あまり、嬉しそうじゃありませんね？」

花陽　：「そ、そんなことないよ！私だけひとり、気を使つてもらつて悪いなあ…つて」

穂乃果　：「なあんだ…強制ダイエットのことを思い出して、憂鬱になつてるのかと思つたよ」

海未　　：「ですから、なぜ私の顔を見て言うのですか？」

凜　　　：「かよちゃんがおにぎりなら、次の差し入れは、カップラーメンがいいにや！」

穂乃果　：「えっ？そんなリクエストありなの？じゃあ穂乃果は菓子パンがいいかな？」

希　　　：「ウチは焼肉やね」

真姫　　：「それ、差し入れて言わないわよ」

穂乃果　：「絵里ちゃんは？」

絵里　　：「私はチョコレー…だから、今後、差し入れは頂かないつて言つてるでしょ!!」

一同　　：「あはは…」

モブA　　：「では…私たちはこれで失礼します…」

モブB　　：「どうも、お騒がせしました…」

穂乃果：「うん、わざわざありがとう」

海未：「あとで、ごちそうになります」

モブ A：「はい…では…つて…あれ？」

モブ B：「どうしたの？」

モブ A：「下に何か書いてない？」

一同：「!!」

モブ B：「あつ…本当だ…」

モブ A：「…デブは…死…ね…」

モブ B：「えっ？」

モブ A：「えっ？」

穂乃果：「ああ…これね…誰が書いていったんだろう？ 私たちが来たときには、すでに

あつたんだ」

にこ　：「まったく、くだらないことをするヤツがいるのよねえ」

凜　　：「本当だよ。希ちゃんに喧嘩売るなんて、どうかしてるにや！」

モブA　：「えっ？」

モブB　：「東條先輩に喧嘩？」

希　　：「そやから凜ちゃん、ウチはちよつとばかり胸が大きいだけやから…勝手にデブ扱いせんといて！」

モブA　：「ちよつとばかり…」

モブB　：「…ですか？」

希　　：「言えんやろ？本人たちを目の前にして『カップにして7つも違うやん』…な  
んて」

凜　　：「聴こえてるにや」

にこ ……B、C、D…H? Hなの?」

海未 ……「エッチ…ですね…破廉恥です!!」

モブA ……「そ、それはそれとして…こんなこと書いてあつたら…」

モブB ……「いい気はしないですよね」

絵里 ……「でも、固有名詞が書いてあるわけじゃないし、そもそも私たちあてに書かれたものかどうか分からないから…気にしないようにしているわ」

海未 ……「はい、今は大事な時期ですし…練習に集中しなければ…なので」

モブA ……「そうですね! 改めてですけど…最終予選、頑張ってください!」

モブB ……「はい、応援してます!」

絵里 ……「ありがとう! 当日は、お友達をいっぱい誘って観に来てね!」

穂乃果 ……「ああ! それぞれ、それが大事! ファーストライブみたいに幕が開いたら、誰もいかなかった…なんてことはゴメンだもんね!」

モブA ……「はい!」

モブ B 「みんなで観にいきます！」

絵里 「ありがとう。じゃあ、楽しみに待っててね」

くつづく



# 伝える…伝わる

：

海末 …「さつき練習中に、穂乃果が言い掛けたことですが…」

穂乃果 …「なんだっけ？」

海末 …「差し入れをしてくれた1年生のことですよ」

穂乃果 …「ああ…」

海末 …「なんとなく、花陽とことりには聴かせたくなかったものですから…」

穂乃果 …「えっ？…うん？…そうなの？」

海末 …「なんとなく…です」

穂乃果 …「…」

海末 …「誤解しないでください、別に仲間外れにするとか、そういうことではありません

せんから」

穂乃果 …「そうは思っていないけど…」

海末 …「あの時穂乃果は…あのふたりが、ことりの情報を聴き出す為に、花陽を利用して…と言いたかったのではないでしょうか？」

穂乃果…「利用している…って言い方は、どうかと思うよ！…そうじゃなくて、ことりちゃんのことが好きで、でも直接は色々聴けないから、花陽ちゃんに教えてもらってるんじゃないかな…って…あれ？同じ意味かな」

海末 …「いえ、すみません…私の言葉が過ぎました。言い方ひとつで、ニユアンスが変わりますね…。はい、彼女たちが、純粹にことりファンであることは、間違いないと思います。それは否定しません」

穂乃果…「穂乃果にも、あんな熱心なファンがいてくれたらなあ…毎日、差し入れ食べ放題なのに」

海末 …「ふふふ…まったく、あなたって人は…」

穂乃果…「へへへ…でも、それがどうかした？なんでことりちゃんたちに聴かれちゃいけないの？」

海末 …「…このところの2人の様子…なんとなくおかしいと思いませんか？」

穂乃果…「へっ？ま、まあ…でも花陽ちゃんはあんなことがあったし…」

海未 …「では、ことりは？」

穂乃果 …「ん？」

海未 …「単独行動が増えていると思いませんか？今日も私たちとは一緒に帰らずに、部室に残っているようですし…」

穂乃果 …「あつ、いや…でも…衣装のこととか、理事長に報告に行ったりもあつたし…  
ねえ？」

海未 …「はい…それはそうですが…」

穂乃果 …「えっ？まさか、ことりちゃんも今回の事件に関わってる…っていうの？」

海未 …「…それは…」

穂乃果：「…」

海未：「よくわかりません」

穂乃果：「ズコッ！」

海未：「ですが…1年生のあの2人…花陽…ことり…今は点と点でしかありませんが…いずれ線となるかもしれません…」

穂乃果：「…」

海未：「もちろん、取り越し苦労に終われば、それはそれでよいのですが」

穂乃果：「希ちゃんは？」

海未：「希…ですか？」

穂乃果：「さっきの…屋上の落書き…」

海未：「えっ？あ、あれは…希を指したものでしょうか？」

穂乃果：「やっぱり、違うよねえ…」

海未 :「ひよつとしたら…穂乃果のことかもしれないよ」

穂乃果 :「むっ!？」

海未 :「あなたは私が目を離すと、すぐにサボりますから」

穂乃果 :「だとしたら、あれを書いたのは…海未ちゃんってことになるよね?」

海未 :「そうかも知れませんか?」

穂乃果 :「残念ながら、あれからはちゃんと適正体重をキープしてますよ…だ!」

海未 :「はい、頑張ってくださいいね。太ったら…『死が待っている』ようですから…」  
穂乃果 :「ゴクツ…う、うん…そうだね…頑張るよ…」

:

絵里 :「それで…希はあの落書きの犯人に心当たりはないの?」

希 :「ん? えりちまでウチをデブ扱いするん?」

絵里 :「そ、そういうわけじゃないけれど…」

希 …「うくん…ウチが自覚ないだけなのやろか…にこっちはどう思う？」  
にこ …「…知るか…」

希 …「…と、まあ…にこっちみたいに、ウチの、この『超絶ダイナマイトボディ』  
に嫉妬されることはあるかも…やけど…」

にこ …「…アホか…」

絵里 …「じゃあ、あれは誰がなんの為に？」

希 …「単なる悪戯…って言っても納得しない感じやね」

絵里 …「そうね…」

にこ …「…」

絵里 …「にこ？」

にこ …「…アンタの言う通り、嫉妬かもね…」

希 …「!!」

絵里 …「!？」

にこ …「ただ、希ひとりに対して…って言うよりは、μ s に対する…って言う方が正しいかも知れないけど…」

絵里 …「えっ?」

にこ …「『出る杭は打たれる』ってことよ」

希 …「必ずしも、ウチらがこの学校で望まれた存在やない…ってことやね」

にこ …「まあ…特にアタシなんか、ずっと日陰の立場だったから、急に『スターぶつてるんじゃないわよ』って思ってるヤツが多いかも」

希 …「それを言ったらウチらもそうやね」

絵里 …「私たちが…にこに無関心だったから?」

にこ …「『今さら、日和ってるんじゃないわよ!』ってね…」

絵里 …「…そう…そうかも知れないわね…」

希 …「にこつちもそう思ってるん？」

にこ …「さあね…」

絵里 …「…」

にこ …「でも…言わせておけばいいのよ、そんなのは…」

絵里 …「にこ…」

にこ …「アタシたちは、やりたいことをやる！もう、廃校がどうのとか関係なくなつたんだし、ラブライブでA—RISEに勝つて、本大会に出場する！本大会で優勝する！…誰にも邪魔させないんだから！…だから…その為にはアンタたちの力が必要なのもう、過去に何があつたかなんて、どうだつていい！今のアタシには、アンタたちが必要なのよ!!」



絵里 ……に…に…」

希 ……「嬉しいなあ！にこつちから、そんな言葉が聴けるなんて！なあ、録音するか  
ら、もう一回言つて」

にこ ……「言うか！」

希 ……「むふっ」

絵里 ……「ふふっ」

にこ ……「な、なによ…えつと…違うわよ、アタシが言いたかったことは、そういうこ  
とじゃなくて…例えば…嫌いな相手がいるなら『ブス』『デブ』『チビ』『ハゲ』くらいの  
悪口は言うわよ。実際そうじゃなくてもね…」

希 ……「にこつちもそうやって、ネットに書き込んでたん？」

にこ ……「そう、相手を貶めるにはね…って何を言わせるのよ！」

絵里 ……」

にこ ……何よ…その目は…ふん！やってたわよ!!…μ’sに入るまではね…。だから、もし落書きの犯人が、そういう動機だとしたら…気持ちはわからなくは無いわ」

絵里 ……に…」

にこ ……でも…今は…反省してるし、自分が如何に卑怯なことをしてたかって、後悔してる…」

絵里 ……うん…」

希 ……「そんなら、そんな犯罪者の心理に詳しいにこつちの見解は？」

にこ ……「ぬわんでそうなるのよ!!」

希 ……「にひひ…」

にこ ……「誰が犯人だなんて、わからないわよ…ただ、気になることはある…」

希 …「ん？」

にこ …「一般人は…『タヒね』なんて文字は使わない…」

希 …「ほほう…」

絵里 …「どういうこと？」

にこ …「ネット用語よ…完全に…」

絵里 …「えっ？」

にこ …「何かの拍子に知ったかも知れないし、そういう言葉を調べて使った可能性もあるけど…普通は使わないでしょ？『タヒね』なんて言葉」

絵里 …「ええ…」

希 …「もつと大事なことは…自分が知ってても、相手に伝わらなかつたら意味ない…つてことやね」

にこ …「そう。例えばアンタが『タヒね』って脅かされても、意味がわからなかったら恐がることはないでしょ？」

絵里 …「そ、そうね…」

にこ …「つまりアレを書いた『犯人』は『対象者』が『タヒね』って言葉を知ってる前提で書いたっていうことよ」

絵里 …「にこは…知っていた…」

にこ …「そうなるわね…」

絵里 …「じゃあ…あれはにこが書いた言葉なの？」

にこ …「言ったでしょ！アタシはアンタたちの力が必要なのよ！こんな大事な時にそんなくだらないことするハズないじゃない！」

絵里 …「…よね…じゃあ…にこに向けての言葉？」

にこ …「だとしたら、アタシも舐められたものね」

希 …「でも、にこっち…そうとも言ってられへんかも…」

にこ …「!!…さすが希ね…」

絵里 …「えっ？」

希 …「もうひとり…μ sの中でネットに精通している人物が…」

絵里 …「!!…まさか!?!…」

にこ …「アイツが書いたのなら…」

希 …「ターゲットは…にこっちってことになる…」  
にこ …「…そうみたいね…」

絵里 …「そんな…嘘でしょ…」

く  
つ  
つ  
く  
く

# 南無三!?

：

絵里 …「はわあわあ…」

希 …「あくび？」

絵里 …「あつ…ごめんなさい…ちよつと寝不足で…」

希 …「？」

絵里 …「気にしないように…とは思ってるんだけど…どうしても『あのこと』が…」

希 …「ひよつとしてウチのこと、心配してくれてるん？」

絵里 …「当たり前でしょ！しないわけないじゃない」

希 …「それはそれは、ありがとさん♡」

絵里 …「何、喜んでるのよ…命が狙われてるかもしれない…って言うのに」

希 …「えりちがウチのことを気遣ってくれてるんやから、嬉しくないわけ…ないや

ん？」

絵里 …「べ、別に…希だから心配ってわけじゃなくて…」

希 …「そやけど…ちよつと複雑やな…」

絵里 …「？」

希 …「だって、それって…ウチのことをデブ扱いしてる…ってことやろ？えりちに  
そう思われてるなんて、逆に傷付くわあ…」

絵里 …「だ、だから…そういう意味じゃなくて…」

希 …「いひひ…冗談やって…ん？…」

絵里 …「どうかした？」

希 …「ウチの靴箱に…こんなものが…」

絵里 …「メモ書き？」



希 ……『死ぬのはアナタじゃない』…やって…」

絵里 ……」

希 ……」

絵里 ……これって…あの落書きのことを言ってるのよね？」

希 ……「みたいやね…」

絵里 ……「よかったわ。狙われてるのは希じゃないのね！」

希 ……「言ったやん！ウチはデブやないって」

絵里 ……「うん」

希 ……「まあ、そうすると…誰のことを言ってるんやろ？…って話なんやけど」

絵里 ……「そ、そうね…」

希 ……「この紙、えりちのここには入ってへん？」

絵里 ……「わ、私のところ？…入ってないみたいけど…」

希 ……」

絵里　：「えっ？何？私も対象なの？」

希　　：「うーん…：そうやないんやけど…：ほら、昨日にこつちが言つてたやん。相手を罵る為なら実際の容姿がそうでなくても『デブ』とか『ブス』とか『ハゲ』とか使うかも…：つて」

絵里　：「…うん…」

希　　：「だとしたら…：どうしてこのメモがウチのところに入つて、えりちのここには入つてないんやろ？」

絵里　：「えっ？…」

希　　：「このメモに書いてあることを信じるなら、ウチはターゲットやないということとやけど…：えりちも違うなら、同じものが入つてて然るべき…：やろ？」

絵里　：「た、確かにそうね…：えっ？じゃあ、やっぱり私もそのターゲットに含まれてるつてこと？」

希　　：「うーん…：他の娘たちにも訊いてみないと、なんとも言えへんのやけど…」

絵里　：「…」

希 …「ただ…ひとつわかったことが…」

絵里 …「わかったこと？」

希 …「ウチのところに入ってるってことは、あの落書きはやっぱりミュ…」

…「ひやあああゝ!!」

絵里 …「!？」

希 …「!？」

絵里 …「今の声…」

希 …「花陽ちゃんや！」

絵里 …「どこから？」

希 …「アルパカ小屋？」

絵里 …「行くわよ！」

希 …「もちのろんや！」

…

がやがやがや…

絵里 …「この人だから…やっぱりアルパカ小屋？」

希 …「…やね…」

絵里 …「あつ…あそこで倒れているのは…花陽？」

希 ……みんな、ちよつと道を開けてもらえる? ……ごめんなあ…生徒会長のお通りや  
で!」

絵里 ……「ちよつと、こんな時にやめなさいよ…あつ…真姫! 凜!」

凜 ……「う、うう…絵里ちゃん…か、かよちゃんが…死んじやつたよお…うう…」

希 ……「えっ!」

絵里 ……「ウソでしょ!」

真姫 ……「凜! 勝手に殺さないでよ!! 少し気を失っただけだから」

凜 ……「本当に?」

真姫 ……「呼吸もしてるし、心臓も動いてる…見ればわかるでしょ!」

凜 ……「うう…でも…かよちゃん…バタッて…」

希 …「何があつたん？」

真姫 …「アルパカよ」

絵里 …「アルパカ？…はっ!!…えっ？死んじやつたの？」

希 …「南無阿弥陀仏…」

真姫 …「待って！アルパカも死んでないわよ！」

希 …「そうなん？」

絵里 …「どういうこと？」

真姫 …「花陽が…アルパカの元気がないから…つて、教室に行く前にここに寄つたら、2頭とも倒れてて…そつちも呼吸はしてるみたいだから、まだ、最悪の事態にはなつてないと思うけど…」

希 ……「それで花陽ちゃんがショックを受けて…」

絵里 ……「気絶した？」

真姫 ……「まあ、そんなところね…」

絵里 ……「そう……なにか事件に巻き込まれたわけじゃないのね？」

真姫 ……「…だといいいけど…」

絵里 ……「真姫？」

希 ……「その話は後やで！まずは花陽ちゃんを保健室に運ぶのが先やから」

絵里 ……「そ、そうね……凜、手伝ってくれる？」

凜 ……「う、うん……あう……凜が……負ぶっていくにや…」

絵里 ……「大丈夫？」

凜 ……「かよちゃんはデブじゃないもん！」

絵里 …「そういう意味で言ったわけじゃ…わかった、じゃあお願いするわ。私も一緒に  
ついていくから」

凜 …「凜に任せるにや!!…よいしょと…」

真姫 …「しばらくベッドに寝かせておけば、やがて目を覚ますと思うから…」

凜 …「うん」

真姫 …「ちゃんと傍にいてあげなさいよ。その役割は『あなた』じゃないとできない  
んだから」

凜 …「わ、わかってるにや!」

絵里 …「じゃあ、希…またあとで」

希 …「ほいな!」

穂乃果 …「希ちゃん! 真姫ちゃん!」

ことり …「今のは…かよ…ちゃん?」

海未 …「一体、何があつたのですか?」

希 …「真姫ちゃんの話によると…」



：

穂乃果：「こういうのはなんて言えばいいのかな？不幸中の幸い？」

海未：「いえ違うと思います…が…適切な言葉は思い当たりませんね」

ことり：「獣医さんの診断だと…アルパカさんは、ストレスからくる食欲不振で衰弱したんだらう…って言って言ってたけど…」

海未：「事件性はない…ということですね…」

穂乃果：「元気になるように注射もしてもらったし、これからしばらく様子を見てくれるんでしょ？ひとまず良かったよ」

ことり：「良くないよ!!」

穂乃果：「ことりちゃん…」

海未：「ことり…」

ことり：「全然良くないよ……ことりがもつと早くかよちゃんの相談に乗ってあげて……  
1日でも早く、獣医さんに診てもらってれば……こんなことにはならなかったのに……」

海末　：「それは……」

穂乃果：「ことりちゃんの責任じゃないよ！」

海末　：「はい……」

ことり：「そんなことないよ！いくら飼育係だからって、その面倒をかよちゃん1人に  
任せた学校の責任だよ。学校の責任ってことは……お母さんの責任だもん！お母さんの  
責任ってことは……ことりの……」

海末　：「ことり！落ち着いてください！気持ちわかります。それを言ったら私た  
ちだって……アルパカの調子が悪いことは聴いていましたし……花陽が一生懸命面倒を見  
ていたことを軽視していた部分がありますので、そういう意味では同罪です」

穂乃果：「*ts* sとアルパカと、どっちが大事？なんて言っちゃったしね……」

海末　：「はい……私たちも、こうなる前に手を差し伸べることできませんでしたから  
……」

ことり：「…」

穂乃果：「花陽ちゃん、大丈夫かな…」

海未：「…しばらくは…」

ことり：「…」

穂乃果：「…」

海未：「いえ、なんでもありません…。大丈夫ですよ！花陽には、真姫も凜もいますから」

穂乃果：「う、うん…そうだよね…」

ガラツ…

にこ：「その中にアタシが入ってないじゃない！」

海未：「にこ！」

穂乃果：「にこちゃん！」

にこ　：「立ち聞きしてたわけじゃないわよ！珍しく、ことりの大きな声が聴こえたから、ちよつと入りづらかっただけで…」

ことり　：「…」

穂乃果　：「あ、そうだった。花陽ちゃんには、にこちゃんもいたんだった」

にこ　　：「『も』って、何よ！『も』って…ふん！アンタたちの頭の中はどうなってるのよ！失礼にも程があるわ」

海未　　：「すみません…」

にこ　　：「それより…今日はこのまま練習を中止するなんて言わないわよね？」

穂乃果　：「へっ？」

にこ　　：「当たり前でしょ？こんなことくらいで、オタオタしてるんじゃないわよ！」

ことり：「こんなことって…」

にこ　：「いい？アンタたちが留学するのしないので、s崩壊しかけた時『この場所』を守ったのは花陽なのよ！」

穂乃果：「!!」

ことり：「!!」

にこ　：「今度はアンタたちが、花陽の帰ってくる場所を守ってあげる番じゃないの？」

穂乃果：「…」

ことり：「…」

凜　　：「そうにや、そうにや！かよちゃんと凜で守ったんだにや！」

真姫　：「私もね…」

にこ　：「あつ！…アンタたち…」

海未　：「凜、もう傍にいてあげなくていいのですか？」

凜　　：「うん、もちろんずっと一緒にいたかったけど…絵里ちゃんと希ちゃんが、凜も少し休んだほうがいい…って」

穂乃果：「それで…花陽ちゃんの様子は？」

凜　　：「あれから間もなくして目を覚まして…しばらくはずっと泣いてたけど…今は、かなり落ち着いたかな…」

海未　：「まだ、保健室に？」

真姫　：「ううん…さつき、その2人が花陽と一緒にタクシーに乗って、家まで送って行ったわ。『これは上級生の仕事』とか言ってる…」

海未　：「そうですか…」

にこ　：「やっぱり、今日は解散！」

一同 …「えっ?」

にこ …「さつきあは言っただけ…さすがのアタシも、この雰囲気ですら練習できるだけのメンタルは持ち合わせていないから…」

一同 …「…」

にこ …「なに?おかしなこと言った?」

一同が…ぶんぶん

にこ …「まあ、アルパカもなんとか無事だったみたいだし、花陽も明日にはシヨックから立ち直るでしょ!アイツを気持ちよく迎えてあげる為に、アンタたちも気持ちを切り替えなさい!」

凜 …「ほえ…ここにちゃん、部長みたいにや」

にこ …「みたいじゃなくて、部長なの！」

一同 …「あははは…」

くつづく



## スクールアイドルの器

：

モブ A 　：「おはよう『か・よ・ちゃん』」

花陽 　：「ぴゃあ!!」

凜 　　：「？」

真姫 　：「？」

モブ A 　：「あら、学校に来て、クラスメイトに挨拶した…ただそれだけのことなのに  
…何でそんなに驚くのかな？」

モブ B 　：「私たちだって、それなりに心配してたんだから」

モブ A 　：「それとも、私たちに…『襲われる』…でも思った？」

凜 ……「!!」

真姫 ……「!!」

花陽 ……「ううん…」

モブA ……「ふふふ…だよね!」

真姫 ……「あなたたち、なに言ってるの?」

モブA ……「別に深い意味はないわよ。ただ、一昨日、差し入れに行つた時に、屋上で見た『落書き』…私たちもアレが気になって…だから、ちよつとした冗談っていうか…」

真姫 ……「まったく笑えないわ」

凜 ……「真姫ちゃんの言う通りにや」

モブ A :「少しでも元気出してもらおうと思って言ったんだけど…気に障ったのなら、ごめんね!謝るわ」

モブ B :「…っていうか、『小泉さんが倒れた』って聞いたときは、逆にそつちを疑ったよね?『誰かに襲われたの?』って」

モブ A :「『えっ?なんで!』って、かなり、焦ったよね?」

真姫 :「…」

モブ B :「それで、どう?元気になった?」

花陽 :「う、うん!もう大丈夫だよ」

モブ A :「良かったあ!!さすがスクールアイドル!メンタル強いわあ」

真姫 :「?」

凛 :「?」

モブA :「自分が面倒見てたアルパカが、あんなことになっても、1日で立ち直って出て来れるんだから、大したものよね」

モブB :「しばらく休校するかと思ってた」

モブA :「前に『小泉さんがスクールアイドル出来るなら、私たちも出来るかも』みたいなことを言ったけど、やっぱり無理だわ」

モブB :「それは人前に出て歌ったり、踊ったりするんだもん、並の精神力じゃ、出来ないでしょ」

真姫 :「否定はしないけど…」

凛 :「なんか言い方に悪意があるにや」

モブA :「勘違いしないで、誉めてるんだから」

モブB :「そうそう」

真姫 :「ふくん…とてもそうは見えないけど…」

モブA :「それより…」

花陽 …「？」

モブ A …「今回の騒動、あなたの『自作自演』って噂が広まってるけど？」

花陽 …「!!」

凛 …「にあ？何言ってるの!？」

真姫 …「誰がそんなこと言ってるのよ!!」

モブ A …「誰って…ねえ？」

モブ B …「う、うん…そこかしこ…から？」

凛 …「かよちゃんがそんなことするワケないにや！」

真姫 …「…アンタたち…私たちに喧嘩売ってるの？」

モブ A …「待って！待って！そんなつもりはないから！…わかってるわよ…私たち

だって：小泉さんが、どれだけ一生懸命アルパカの世話をしてきたか知ってるし」

モブB　：「そうそう：私たちは知ってるよ、もちろん：だから、たぶん一部の心ない人が言ってるんだと思うけど：」

モブA　：「基本的に、常にアルパカに接触してたのは小泉さんしかいなかったわけだし：そういう意味では疑われても仕方ないというか：」

モブB　：「火の無いところに煙は立たず：みたいなの？」

真姫　：「だいたい、花陽がそんなこととして、何のメリットがあるっていうのよ!？」

モブA　：「そ、それは私たちに言われても：ねえ？」

モブB　：「う、うん：私たちもビックリしたんだから：どうしてこのタイミングで？つて」

真姫　：「このタイミング？」

モブB　：「あつ！：えつと：ほ、ほら：4 sも今は大事な最終予選に向けて、練習に集中しなきゃいけない時期でしょ？そんな時に：つていう意味で：」

モブ A …「そうそう、そんな時に…ね。想像しないでしょ？アルパカが倒れるなんて…」

モブ B …「あ、でも…お医者さんに診てもらったんだよね？」

花陽 …「…うん…ストレスから来る食欲不振の影響だろう…って」

モブ A …「へえ…逆にアルパカは、ああ見えて繊細な生き物なのね…」

花陽 …「うん」

モブ A …「でもストレスって何？」

花陽 …「それは…」

モブ A …「あなたが原因だったりして」

花陽 …「!？」

真姫 …「アンタたち…死にたいの？」

凜 …「1回、殺されてみるにや？」

花陽 …「凜ちゃん!!真姫ちゃん!!そんなこと言っちゃダメだよ!」

真姫 …「花陽…」

凜 …「かよちゃん…」

モブA …「ま…まあまあ、二人とも、最後まで聴いてよ…こここのところ小泉さん、少し元気がなかったから、そういう雰囲気アルパカも感じたのかな…って話よ」

モブB …「う、うん…アルパカが元気がなくて、小泉さんがそうだったのか…小泉さんが元気なくて、アルパカがそうだったのか…どっちが先かはわからないけど…ストレスが原因っていうなら、そういうこともあり得るかな?…って」

花陽 …「…そうかも…」



凜 …「かよちゃん…」

真姫 …「花陽…」

モブA …「まあ、不幸中の幸い…っていうか、なんていうか…事件性はないみたいだ

し…自作自演説に対しては、私たちがきっちり否定してあげるから」

モブB …「小泉さんは元気出して、頑張ることね！」

花陽 …「…うん、ありがとう…」

凜 …「…」

真姫 …「…」

…

海未 ……私と真姫は練習終わりに……作詞作曲の打合わせがある……という理由で残っていくと言つても違和感はないと思いますすが……」

真姫 ……「あなたも残つていく……つて言つた途端、みんな怪訝な顔をしてたわ」

希 ……「そんなあ……ウチもたまには仲に混ぜてほしいねん！二人かどんな様子でイチヤイチヤしてるか見たいやん？」

海未 ……「なつ……イ、イチヤイチヤとは何ですか！私と真姫はそういう関係では……」

希 ……「そうなん？残念やなあ……ウチはまた、イチヤイチヤのあと、ダキダキして、ブチュー…つて」

海未 ……「は、破廉恥です！」

真姫 ……「くだらないこと言つてないで、素直に例の事つて言えばいいでしょ！……あなとも……そんなことくらいですぐに、カッカしないの！子供じやないんだから……」

海未 ……「す、すみません……つい……」

真姫 ……「まあ、それはそれとして……わざわざ残つてまで話をするつてことは、それなりに何かあるんでしょう？まあ、電話やLINEで話すつていうのも色々面倒だから、この方が手つ取り早いけど」

希 ……「さすが真姫ちゃんね……」

真姫 ……「おだてても何にも出ないわよ」

希 ……出して欲しいわあ……事件を解くヒントくらいは……  
真姫 ……「えっ?」

希 ……「…これなんやけど…」

海未 ……「メモ…ですか?」

真姫 ……「『死ぬのはアナタじゃない』…」

海未 ……「これは一体?」

希 ……「昨日の朝、ウチの靴箱に入ってたんよ」

海未 ……「!?」

真姫 ……「!?」

希 ……「その反応を見ると…海未ちゃんと真姫ちゃんのところには、入ってなかったよ  
うやね」

海未 …「はい、私のところには…」

真姫 …「私のところにも無かったわ」

希 …「本当は昨日、確認しようと思ったんやけど…あんなことがあって、ドタバタしてたから…他に誰かこんなメモが入ってた…って話、聴いてないん？」

真姫 …「さあ…」

海未 …「少なくとも、穂乃果とことりからは聴いてませんが…」

希 …「…」

真姫 …「どういうこと？ちゃんと説明してくれない？」

希 …「これ、屋上にあつた『落書き』に対する『報告』やと、思うんよ」

海未 …「はい、それはなんとなく想像は付きますが…」

真姫 …「そうね」

海未 …「だとすると、なぜ、希だけに？…となりますね」

真姫 …「今のところ…はね。私たちが、知らないだけかも知れないし…」

希 …「ウチが自作したものかも知れんし…やろ？」

真姫 ……

海未 ……

希 ……「そやね…お互い疑心暗鬼になってるのはわかるんよ。だから、ウチの話を用して…とは言うてない。ウチも二人をまだ、どこかで疑ってる部分があるし…」

真姫 ……

海未 ……

希 ……「そやから、ここでこんな話をするのはリスクがあるかもやけど…もし二人のウチ、どちらかが犯人やったら、逆にプレッシャーを掛けることができるやないかな？なんて…ふふふ…一瞬の心理戦やね」

真姫 ……「無駄な戦いね…私が犯人であるはずないもの」

海未 ……「もちろん、私もです」

希 …「まあ、そう信じてるから、話すんやけど…」

真姫 …「で？そのメモから何かわかったことがあるの？」

希 …「ターゲットは…ウチやない！」

海未 …「はい？」

真姫 …「なに、それ意味わかんない…」

希 …「いや、わかるやろ」

海未 …「ええわかりますが…というか…まんまですよね？」

希 …「…やね…」

真姫 …「言いたいことは…たつたそれだけ？」

希 …「そんなわけないやん」

真姫 …「だったらもったいぶらずに早く言いなさいよ」

希 …「犯人は…あの時…あそこにいたんよ…」

海未 …「なっ…」

真姫 …「ウソでしょ!?!」

希 …「ウソやあらへんよ…なぜなら…」

くつづく

## 三人寄らば…

希 ……と、その前に…あの落書きが誰に向けたものか…って話なんやけど…」

海未 ……「十中八九、私たち…つまり、sのメンバーに向けられたものかと」

真姫 ……」

希 ……「…どうして、そう思うん？」

海未 ……「この屋上は、朝、解錠されてから、私たちが帰ったあと施錠されるまで、基本的に出入りは自由です。現に私たちもお昼を食べに行ったりしますし」

真姫 ……「そういう意味では、誰でもあれを書き込むことが出来るってことね」

海未 ……「はい。ただし、書き込んだ時間は、放課後…ホームルームが終わってから、



私たちが練習の為に上がってくるまでの間でしよう」

真姫 …「どうして?」

海未 …「仮に昼休みに書いたとしたら、その姿を誰か見られるリスクがありますし…  
かといって、授業を抜け出して…というのも現実的ではありません」

真姫 …「それは確かにそうね」

海未 …「では、なぜ、そうする必要があったのでしょうか?…それは、あのメッセージ  
が私たちに向けてのものだからです」

真姫 …「だから、どうして断言出来るのよ」

海未 …「はい。まず…メッセージと言うのは、相手に伝わらなくては意味がありません。  
ん。あれが『本当に何の意味もない落書き』だとしたら『まったく検討違いな話』になっ  
てしましますが…少なくとも、そうでないならば、誰かに伝えたいからこそ、あそこに  
書いたのだと思います」

真姫 …「その相手が…私たち?」

希 …「…の誰か…ということやろなあ」

海未 …「先ほども申しましたが、ここの屋上は誰であろうと出入り自由ですので、条  
件によつては私たちより先に、あの落書きを見つける人もいない…とは言えません。し  
かし、どうでしょう?それを見たからといって、気にする人がいるでしょうか?」

真姫　：「何か書いてある…とは思つても、気には留めないかも。一読しただけじゃ、意味がわからないから、気持ち悪さは残るけど」

海末　：「はい。では、次に…私たち以外に、毎日、屋上に行く…という人はどれくらいいるでしょうか？」

真姫　：「…お昼を食べに行く人はかなりいると思うけど、毎日必ずつてワケじゃないわね」

海末　：「もし、あの落書きに意味があるのであれば、いつ来るかわからない相手に、メッセージを残したことになります。しかも、チョークで書かれたものですので、それほど長くはもちません、すぐに消えてしまいます。つまり、それだとメッセージの意味を持たないのです」

真姫　：「なんらかの手段で呼び出して、見せる…つてことは、考えられない？」

海末　：「なるほど。それは、あるかもしれませんがね。ひとつの可能性として残しておきましょう…希、いかがでしょうか？私の推理は…」

希　：「言うことなし！やね…ウチもそう思つてるんよ」

真姫　：「私も薄々そうじゃないかと思つてたけど…どこかで否定したい気持ちがあつて」

海末　：「それは私も同じですよ」

希 ……さて…次はウチの出番やね！ターゲットがμ S…の根拠、その2！…や」  
海未 ……「お願いします」

希 ……「それがこのメモなんやけど」

真姫 ……「それが根拠なの？」

希 ……「よく思い出してほしいんよ、あの時の会話を…。ウチ、凜ちゃんにデブ弄りされたやん？」

海未 ……「されてましたね」

真姫 ……「してたわね」

希 ……「何度も言うけど、胸が大きいだけやのに」

海未 ……「何度も言わなくていいですよ」

真姫 ……「そうね、余計な一言ね」

希 …「でも、このメモは『デブはウチやない』と書いてあるんよ」

海未 …「そうは書いていませんよ」

真姫 …「『死ぬのはアナタじゃない』とは書いてあるけど、太っていることに対する否定は、どこにもないわね」

希 …「意識すれば、そういう意味やろ？」

海未 …「…」

真姫 …「…」

希 …「いやいや、黙らんといて…」

海未 …「話を続けて下さい」

希 …「冷たいんやから…」

真姫 …「私たち、暇じゃないもの…」

希 …ほい、ほい…まあ、今、言った通りなんやけど…凜ちゃんがウチをデブ弄りした会話を知ってるのって…」

海未 …「!!」

真姫 …「!!」

希 …「なあ…ウチらしかおらんやろ?…百歩も二百歩も譲って…犯人がウチのことをデブやと思つてたとしても…このメモの意味が本当なら、『それでも死ぬのはウチやない』…そう言うてるんよ。つまり、それは…あの時、あそこにいた人物やないとわからない…つて事やないかな?」

海未 …「た、確かに…」

真姫 …「待つて!…何かの拍子に、ターゲットが s メンバーだと思われてることを知つた犯人は、それを否定する為に書いたものだとは考えられない?」

海未 …「つまり…希ひとり対象外ではなく、メンバー全員がそうだ、と知らしめるため…ということですか?」

真姫 …「そう」

希　：「それなら、ウチにのみ、このメモが入れられていたことについて、説明がつかないんですよ。この文章が『アナタたちではない』なら、そうかも知れんのやけど」

海未　：「そうですね。全員にそれが入っているなら、話は別ですが」

希　　：「今、確認できる範囲で、それはないやん」

真姫　：「今の段階ではね。入ったことを隠している人もいるかも知れないし」

海未　：「何のためにでしょうか…」

真姫　：「それは…」

希　　：「真姫ちゃん…あの落書きが誰に向けたものか…って話に戻るんやけど…そもそも、あのメッセージがμ sに向けたものやったら、でも『死ぬのはアンタたちやないで!』って、おかしいやろ?」

真姫　：「μ sに向けたメッセージだけど、標的はμ sじゃない…そうね、それはないわね…」

海未 …「つまり…狙われている人は…希を除く…9分の8…ということですか…」

希 …「このメモを信じるなら」

真姫 …「それ、希が自分で書いたものだとしたら？」

希 …「ふふ…自分で『死ぬのはアナタやない』って書いてるのに、自ら死ぬのは道理が通らないやろ」

海未 …「はい…なので…希は標的から除外して構まないかと思います。…ですが…」

希 …「？」

海未 …「犯人の可能性が少しだけ高まりました」

真姫 …「そうね…確実に死なない人が1名確定したってことだもの…」

希 …「そやなあ…ウチかも知れんなあ…」

真姫 …「…」

海未 …「…」

真姫 …「ねえ…今までの話を纏めると、狙われているのは私たちの…希を除く誰か

…ってことはわかったわ…認めたくなけど…。でも、どうしても腑に落ちないことがあるの。自分で言うのもなんだけど…私たちって、あそこに書かれたような体形の人なんていないでしょ？じゃあ、誰が狙われてるの…って話じゃない？」

希 …「にこっち曰く…相手を罵るのに『チビ』『デブ』『ブス』『ハゲ』くらいの単語は普通に使うんやって…『お前のかあさん、でべそ』くらい幼稚な言葉やけどな。そやから…もしかしたら、あの『デブ』にはそこまでの意味がないかもしれんよ。単なる憎悪の対象物に向けた煽り文句…」

海未 …「なるほど…だとすれば、その言葉だけで誰かを絞り込むことはできませんね」

真姫 …「…」

希 …「…と、ここまでが落書き事件に関する考察や。犯人が実行に移すかどうかは不明やけど、あの言葉はμ'sに向けて書かれもの…そして、それを書いた人物はあの中にいた…盗聴でもされてない限り、ウチがデブ扱いされたことを知ってる人はいな



いから」

海未 …「盗聴…ですか？」

希 …「なんでアタックしないといかんの！…？登頂やなくて盗聴やって!!」

海未 …「そんなこと言ってますが」

希 …「条件反射で言うてしもうた…」

海未 …「はあ…」

希 …「では、ウチは？」

真姫 …「…？…？」

海未 …「…？…？」

希 …「東條やん！」

真姫 …「…」

海未 …「…」

希 …「いや、そんな目で見んといて…」

真姫 …「それで？」

希 …「？」

真姫 …「希は今回のことと、これまでの一連の事件と、関連性があると思ってるわけ？」

希 …「…ウチはあると思ってる…けど…まだ結びつかんのよ…点と点が…」

真姫 …「海未は？」

海未 …「私も同じです…特に…上履きの件以来、花陽の様子がおかしいのが気になります…アルパカのごとは事件とは言えないようですが…」

希 …「それなんやけどな…」

海未 …「はい」

希 …「…花陽ちゃん…ウチらに嘘ついたんよ…」

海未 …「!!…花陽が…嘘…ですか…」

真姫 …「そう、私にまで…ね」

海未 …「真姫…」

真姫 …「あの娘の性格だから、絶対に何か理由があるはずだけど…」

海未 …「理由もなく嘘をつく人などいませんよ」

真姫 …「それはそうだけど…」

海未 …「そうですか…花陽が…」

希 …「海未ちゃん？何か思い当たることがあるん？」

海未 …「…ええ…いえ…まあ…その…まずは先にそちらの話を聴きましょうか。私

の話は事件と関係ない可能性が高いですし…」

希 …「そうなん？それじゃ…実はな…」

くつづくく

想像できません!

希

：「花陽ちゃんが練習を早退した日……ってあったやん?」

海未

：「はい、確か……お腹が空きすぎて、力が出ない……と言っていた日のことですよ

ね?」

希

：「ウチ、ふと気になって、翌朝アルパカ小屋に行ったんよ」

海未

：「アルパカ小屋にですか?」

希

：「虫の知らせ……って言うんかな? まあ、ずっとアルパカの具合が悪いって言う

てたし、もしかしたら、そこに何らかのヒントがあるかもって」

海未

：「はあ……」

希

：「そうしたらなあ……そこにあったんよ……」

海未

：「なにがでしよう?」

希  
：「ゲーが……」

海未  
：「アルパカが『お手』でもしたのですか？」

希  
：「それは芸やろ？ 芸……やなくて、ゲーや」

海未  
：「では、音階のソですか？」

希  
：「それはゲーやなくてG（ゲー）や」

海未  
：「合ってますが」

希  
：「合ってるけど、ソって落ちるものやないやろ」

海未  
：「意味がわかりません」

希 …「真姫ちゃんの真似はいらんよ」

真姫 …「余計なことは言わなくていいから」

希 …「ゲエ…や…ゲエ…」

海未 …「…殿方同士が愛し合う?…ってアルパカ小屋でなんて破廉恥な!!」

希 …「それはゲイや!…って、なんで真姫ちゃんと同じリアクションするん?」

真姫 …「だから、今、私のことは関係ないでしょ!」

海未 …「ですから、なんのことでしょう?」

真姫 …「吐瀉物があったのよ」

海未 …「としゃぶつ?」

真姫 …「嘔吐よ、嘔吐」

海末 …「オート？自動ドアか何かですが？」

真姫 …「はあ…あなたも意外に鈍いのね。吐いたあとよ」

海末 …「ああ、そちらの!!…で、でしたら、まわりくどい言い方をしないで、初めからそう言つてください」

希 …「こう見えて、ウチにも乙女の恥じらい…つてあるんよ。だつて…ゲロつて言えんやん、ゲロとは…つて…うつぶ…あかん、口にただけでも吐きそうやわ…」

海末 …「…失礼しました…言わなくてもいいです…そ、それで…それがどうしたのですか？」

希 …「放課後、真姫ちゃんに来てもらつて、分析した結果…それは、おにぎりを吐いたあとだとわかつたんよ」

海末 …「おにぎり?…アルパカはおにぎりを食べるのでしょうか？」



真姫 :「食べないと思うわ」

海未 :「では、そのおにぎりは…花陽がアルパカに無理やり食べさせた…と?」

希 :「おう? ふふふ…そ、その発想はなかったわあ」

海未 :「へっ…違うのですか」

真姫 :「普通は花陽が吐いたもの…って考えない?」

海未 :「あつ…そ、そうですね…少し難しく考えすぎました…花陽がそのようなことをするはず不是吗からね…お恥ずかしい…」

希 :「いや、そういう自由な発想が、意外と事件解決につながるかもしれないよ?」

海未 :「ならよいのですが」

真姫 :「ここでは花陽が吐いたことを前提に話を進めるわ」

海未 :「はい」

希 :「食べた物をリバースしてしまったのなら…お腹が空いて力も出ない…って  
いうのも筋が通るやろ?」

海未 :「そうですね…ですが…あの時は…何か食べる?」と訊いていたのを  
断っていたかと。花陽のことですから、そこまでお腹が空いていれば、ありがたく頂い  
ていたのではないでしょうか」

真姫 :「それを受け入れられる胃の状態じゃなかった…てことでしょ?」

海末 …「!!…まさか…花陽に限ってそんな…は、破廉恥です!!」

希 …「ん?」

真姫 …「はあ?」

海末 …「そ、それで…今、何か月目なのでしょうか?相手は誰なのですか?いえいえ、そもそも安定期に入るまでは、ダンスなどではいけないのでは?」

希 …「ちよ、ちよい待ちい!海未ちゃん、何、勘違いしてんねん」

真姫 …「はあ…あなたはもう少しまともだと思つてたけど…ちよつとは付き合う友達、考えた方がいいんじゃない?」

海末 …「えっ?…妊娠すると食べ物好みが変わるとか…酸っぱいものが欲しくなるとか…ご飯の炊ける匂いで吐き気を催す…とか聞いたことがあるのですが…」

真姫 …「それはそうだけど…その前提が間違つてるのよ」

海未 ……といますと…」

真姫 ……「花陽は妊娠なんてしてないわよ!!ただ単に『胃の調子が良くないときに、食欲はわかない』って言っただけ」

海未 ……!!」

希 ……「いや、こっちがびっくりやわ。どれだけ今日の海未ちゃん、ピントがズレてんねん」

海未 ……「そうですかあ……よかったです、安心しました……まさか花陽に限って……と思っただものですから…」

真姫 ……「私はアナタのことが不安になったけど…」

希 ……「そやけど、花陽ちゃん、妊娠してそんななったら、どうなってしまうんやろ?」

海未 : 「文字通り『死活問題』ですな」

希 : 「『お米を食べるなんてありえないですう』…なんてなあ」

海未 : 「ふふふ…そんなことになったら転変地位が起きますね」

真姫 : 「ほらほら、話をそらさないで…」

海未 : 「あつ…すみません！…えつと…それで…嘘というのは…それを隠していた…ということでしょうか？」

希 : 「うくん、それもそうなんやけど…真姫ちゃんにゲーを検証してもらった後、ウチら、遅れて部室に行ったんよ」

真姫 : 「それからしばらくして、花陽が来たんだけど…」

希 : 「『どこ行ってたん？』って聴いたら『アルパカ小屋にいた』…って」

真姫 : 「でも、そこにはいなかった」

希 : 「ウチらがずつといたんやから、花陽ちゃんがくれば、当然わかるハズやん。何か別の用があつて遅れたのは、間違いないと思うんやけど…嘘についてまでしなきゃいけない用ってなんやったんやろ？」

海未 …「ひよつとしてその日は…私が弓道部に顔を出していた日のことでしょうか？」

希 …「…えつと…確かそうやわ…ことりちゃんが『海未ちゃんの試合が近いから応援に行ってた』って遅れて来たんやなかったっけ…」

海未 …「!!」

希 …「海未ちゃん?」

海未 …「そうですか…」

真姫 …「どうかした?」

海未 …「その日、その時刻、ことりと花陽は弓道場の裏にいました」

希 …「!?!」

真姫 …「!?」

海末 …「私がひと休みしようとして表に出たとき、二人に姿を見つけたのです。花陽は泣いていたようですが…何を話していたかはわかりません。見て見ぬふりもできたのですが…やはり気になってしまい、近づいて声を掛けました」

真姫 …「それで花陽はなんて？」

海末 …「申し訳ありません…今、ここで話すのは…」

真姫 …「つまり…そういうこと？」

海末 …「どうなのでしょう…私もそれを疑っているのですが…い、いえ…本当にわからないのです。ことりも教えてくれませんでしたので…人の恋路をなんとか…ではありませんが、もしそういうことでしたら、私が口を挟むことではありませんし…」

真姫 …「そうね…」

希 …「海未ちゃんの心当たりって、その事?」

海未 …「はい…それが今回のことにつながるかどうかは、定かではありませんが…」

希 …「ウチなあ…あの時花陽ちゃんが来たら、そのゲーの件を聞いただそうと思っ  
てんやけど…結局、現れなかったんよ。…ウチらがいることに感づいて、小屋に行くの  
を『回避した』のかと思ってたんやけど…ことりちゃんと会ってたつて言うんなら…」

海未 …「偶然そうだったのかもかもしれませんね」

真姫 …「…」

希 …「真姫ちゃん?」

真姫 …「…ミュンヒハウゼン症候群…」

希 …「!!」

海未 …「えっ?今、なんと」

希 …「ミュンヒハウゼン症候群…平たく言うと『かまってちゃん病』やね」

海未 …「かまってちゃん病…ですか？」

真姫 …「平たく言いすぎだから」

希 …「聞いたことない？周りの気を引くために、仮病を使ったり、自傷行為を繰り返したりする…一種の精神疾患やね」

海未 …「あつ…」

真姫 …「さすが希、無駄に知識が広いわね」

希 …「言うたやん、勉強にはなんの役にも立たんけど…って」

真姫 …「もし花陽が…ことの気を引くためにしてかした事だしたら…」

希 …「上履き隠したんも…具合が悪くなったんも…あんな落書きしたんも…すべてはことりちゃんに振り向いてもらいたいがため？」

海未 …「なんとなく辻褄は合いますね…」



希 …「そして告白して…フラれた？」

海未 …「…」

真姫 …「…」

希 …「…だとしたら、かなり厄介な話やね…」

海未 …「…はい…」

真姫 …「…」

くつづく

## みんな優しいね

…

凜 …「さあ、お昼にや！かよちん、一緒に食べよう」

花陽 …「うん！」

真姫 …「私もいいかしら？」

花陽 …「うん…つて…あれ？」

凜 …「どうしたにや？」

花陽 …「…」

真姫 …「花陽？」

花陽 …「ふえっ?…あ、うん…やっぱり今日は…食べるのはやめておくね…だから、二人で食べて…」

凜 …「にゃ?」

真姫 …「何かあった?」

花陽 …「ううん、別に…」

凜 …「ダイエット?」

花陽 …「そ、そんなところかな?」

真姫 …「ありえないから!あなた、ここのとこ色々あって、太るところか寧ろ痩せてきてるわよ…それなのにダイエットなんて」

凜 …「うん、凜はいっぱい食べるかよちんが好きにやあ!ご飯を食べないかよちんなんて、スキップする真姫ちゃんくらい、らしくないにゃ」

真姫 …「なにそれ?意味わかんない」

凜 …「にやは」

真姫 …「とにかく食べないなんて、私が許さないわよ…つて、もしかして…あの落書きの言葉を気にしてるの？」

凜 …「あつ！」

花陽 …「ち、違うよ！そんなんじゃないよ！」

真姫 …「…だったらいいけど…いい？花陽の魅力はね、その適度な『やわらかさ』にあるんだから！私はガリガリに痩せた花陽なんて、見たくないからね」

凜 …「真姫ちゃんの言う通りにや」

花陽 …「う、うん…二人とも…ありがとう」

凜 …「よし！じゃあ食べよう！」

花陽 …「…」

真姫 …「なに？まだ何かあるわけ？」

花陽 …「…うん…実は…忘れちゃったみたいなんだ…」

凛 …「えっ?」

真姫 …「お弁当?」

花陽 …「う、うん…ちゃんと入れたはずなんだけど…見当たらなくて…」

凛 …「ちゃんと探したにや?」

花陽 …「うん」

真姫 …「机の中とか」

凛 …「ポケットの中とか」

花陽 …「うん」

真姫 …「珍しいはね。凛が自ら宿題やるくらい珍しいわね」

凛 …「にや?…」

真姫 …「ふふふ…さっきのお返しよ」

凜 …「にやあ…」

花陽 …「あは…」

真姫 …「冗談は置いておいて…それなら素直にそう言えばいいじゃない!」

花陽 …「う…ん…なんか恥ずかしくって…」

真姫 …「なんの為に、私や凜がいるのよ、分けてあげるわよ、お弁当くらい。それで練習に力が入らないなんて言われても困るから…あ、ちよつと待ってて…今、みんな呼ぶから」

花陽 …「へっ? 呼ぶって?」

真姫 …「…これで…よし…と。μ sのメンバーにLINEを送つといたから」

花陽 …「えっ、いいよう…花陽がドジってみんなにバレちゃう」

真姫 …「それは今に始まったことじゃないでしょ！」

花陽 …「はう…」

真姫 …「…えつと…パスタでいいかしら？ ご飯じゃなくて申し訳ないけど…」

花陽 …「全然、全然…気持ちだけで充分だよ…」

凜 …「凜は…チキンラーメンなら持つてるよ！」

真姫 …「どうやって食べるのよ…お湯もないのに」

凜 …「にや？ 真姫ちゃん知らないにや？ これ、そのまま食べられるんだよ!! 凜の非常食にや」

真姫 …「そ、そうなの？」

花陽 …「ありがとう、凜ちゃん」

にこ …「ちよつと花陽！なにやってるのよ！」

花陽 …「に、にこちゃん!？」

真姫 …「早いわね…」

にこ …「当たり前でしょ！一番弟子が困ってるっていうのに、助けないわけいかないでしょ!!」

花陽 …「あう…にこちゃん…」

にこ …「まったくアンタはマヌケなんだから…はい、にこ自慢のの特製唐揚げ!!」

花陽 …「い、いいの?…」

にこ …「まあ本当言うと、作りすぎちゃったから、みんなに配って周ろうと思ってたんだけど…そういうことなら、それ全部あげるわ」



花陽 …「あ、ありがとう…」

希 …「唐揚げだけやとバランス悪いやろ？ウチのカルビもどう？」  
絵里 …「つて、それもお肉じゃない」

花陽 …「希ちゃん！絵里ちゃん！」

希 …「つていうえりちは、なに上げるん？」

絵里 …「ごめんなさい、私は…これしかなくて…」

凜 …「あつ、チョコレートにや！つて絵里ちゃんのお昼ご飯はチョコレートにや？」

絵里 …「食後のデザート!!いいでしょ、別になに食べたつて…」

花陽 …「そんな、悪いよ…」

絵里　：「あつ……全然気にしなくていいわよ。かなりハイカロリーだから、毎日はお薦め出来ないけど、お腹は満たされるんじゃないかしら？」

凜　　：「絵里ちゃんは、冬山の登山家みたいにや」

希　　：「そんなこと言ったら海未ちゃんが来……」

海未　：「私がどうかしましたか？」

凜　　：「出たんにや！」

希　　：「ほらね！」

海未　：「呼ばれたから来たのですが！」

ことり：「かよちゃん、お弁当忘れちゃったんだって？」

穂乃果：「よかつたら、これ食べていいよ！焼きそばパン！」

花陽　：「えっ？あ…でもそうしたら穂乃果ちゃんの分が…」

海未　：「大丈夫ですよ！穂乃果は家からパンを持ってきたのを忘れてて、また購買で買ってきてしまったみたいですから」

真姫　：「天性のバカね…」

穂乃果　：「あはは…両方食べようと思ったら、海未ちゃんに怒られちゃって」

海未　　：「当たり前です」

ことり　：「ことりは休憩の時にみんなで食べようと思ったた、マカロン持ってきたよ  
！」

海未　　：「…パスタにラーメンに焼きそばパン…唐揚げに焼き肉…チョコレートにマカロン…随分と偏ってしまいましたね」

花陽　　：「そんな、贅沢です」

穂乃果　：「つていう海未ちゃんは？」

海未　　：「私ですか？私は筑前煮を…」

一同　：「渋っ」

海未　：「なにか問題でも？ですが、とりあえずバランスは悪いですが、これだけあれば、放課後まではもちますよね？」

花陽　：「あ、ありがとう…本当にみんな、ありがとう」

モブA　：「わあ…いいなあ、小泉さん…先輩方に囲まれて、めっちゃ人気者だね」

花陽　：「!!」

絵里　：「あら、あなたたち…先日はごちそうさまでした」

穂乃果　：「すごく美味しかったよ！またお願い…」

海未　：「穂乃果！」

穂乃果　：「…じゃなかった…うん、ごちそうさまでした」

真姫 …「具合はよくなったの？」

海未 …「具合？」

真姫 …「さつき体育の授業中、貧血だつて保健室に行ったから」

モブA …「う、うん…もう大丈夫…一瞬、ふらつとしただけで…それより、小泉さん、お弁当忘れちゃつたの？珍しいね」

花陽 …「…ちゃんと入れたと思つただけど…」

モブA …「疲れが溜まつてるんじゃない？」

花陽 …「…うん…」

モブB …「よかつたら、これ食べる？」

花陽 …「えっ？あっ…おにぎり?…」

モブA …「小泉さんに、美味しいおにぎりの作り方を教わったから頑張つて、作つてみたんだ」

モブB …「上手にできたら食べてもらおうと思つて持つてきたんだけど…やっぱりのレベルには届かなくて」

モブA …「これじゃ、恥ずかしくて出せないよね…つて言つてたところなんだ」

モブB …「だから…味を気にしなくていいなら…ね?」

モブA …「うん、お腹の足しにはなると思うけど…」

花陽 …「…あ、ありがとう…」

モブA …「その代わりに…南先輩が作ったマカロン…ひとつもらつてもいい?」

ことり …「!」

花陽 …「へっ?あっ…」

モブB：「ちよつと…それは厚かましいよ」

ことり：「どうぞ！ いっぱい作ってきたから、好きなだけどうぞ！ じゃあ、これは私から、この間のチーズケーキのお返し…ってことで」

モブA：「わあ！ いいんですか？ ありがとうございます！」

モブB：「ありがとうございます！」

モブA：「では、さっそく…」

モブB：「頂きます…」

モブA：「！！」

モブB：「！！」

モブA：「南先輩ってお菓子作りの達人なんですね」

モブB：「プロの味です！ お店出せますよ」

ことり：「そんなことないよう…」

モブA：「いやあ、やつぱ持つべきものは友達だね？」

モブB：「本当！小泉さんと仲良くなれたおかげで、こんないいことであるなんて」

花陽：「…う、うん…」

希：「…」

海未：「…」

真姫：「…」

にこ：「じゃあ、私たちは戻るわよ！」

花陽：「あ、はい！」

絵里：「早く食べないと時間なくなるわよ」

ことり：「ばいばい！」

穂乃果：「じゃあね！またあとで！」



花陽　：「うん、みんな本当にありがとう」

くつづく

## 謎は解けた!?

…

教師 「それでは、また明日…ああ、星空はあとで職員室に来るように」

凜 「にや?凜が?」

花陽 「凜ちゃん、なにかした?」

凜 「身に覚えがないにや」

真姫 「なくはないでしょ?どう考えても成績のことじゃない?宿題忘れたとか、テストの点が悪かったとか…日常茶飯事でしょ?」

凜 …「にやあ…かよちん、真姫ちゃん付き合つて」

真姫 …「いやよ！呼ばれたのはアナタなんだから、自分ひとりで行つてきなさい！」

花陽 …「ごめんね…付き合つてあげたいのはやまやまんだけど…ちよつと用があつて…」

凜 …「用？…あ、うん、いいよ…それなら仕方ないにや…そうしたら待たせるのも悪いし、部活、先に行つてて」

真姫 …「わかつたわ…じゃあ、私たちは部室に行つてるから…」

凜 …「うん！」

花陽 …「…」

真姫 …「さあ、花陽、行きましよ」

花陽 …「あのね、真姫ちゃん…私、今日は用があるから部活お休みさせてもらうね」

真姫 …「えっ?」

花陽 …「急でごめん。今日のお昼、あの二人に助けてもらったから、どうしても『お礼』がしたくて」

真姫 …「あの二人…って…あの二人?」

花陽 …「うん。たいしたことはできないんだけど…」

真姫 …「そう…少しお裾分けしてもらったくらいで、大袈裟な気もするけど…花陽がそう言うなら…」

花陽 …「うん、ありがとう」

真姫 …「…」

花陽 …「…ごめんね、お待たせしちゃって」

モブA …「話は終わった?」

花陽 「うん」

モブB 「じゃあ、行こうか」

花陽 「じゃあね、真姫ちゃん。みんなに宜しく伝えておいてね」

真姫 「…わかったわ…」

：

凜 「かよちん、いる〜?」

希 「部室に来て早々、第一声がそれなんや…本当に凜ちゃんは花陽ちゃんのこと  
が好きなんやねえ」

凜 「えへへ…」

真姫 「それがね、凜…花陽なら『今日は休む』って言ってたわよ」

凜 「え〜!?!聴いてないにや〜」

真姫 「私も凜が職員室に向かったあと聴かされたんだけど…『あの二人』にお礼が

したいから……って」

凜 ……「あの二人？ ああ、お昼の件で？」

真姫 ……「そうみたい」

希 ……「花陽ちゃんは律儀やなあ」

海未 ……「はい」

穂乃果 ……「お米は花陽ちゃんにとって生命線だもんね！ きつと命の恩人くらいに思ってるんだよ」

にこ ……「命の恩人？ ……大袈裟ねえ」

真姫 ……「それで……凜はどうして呼び出されたの？」

凜 ……「あつ……それが……『学校の裏庭におにぎり散乱してただけど、星空、お前、何か知らないか？』って」

一同 ……「!？」

絵理 ……「おにぎりが散乱？」

穂乃果 ……「おにぎりが卵産んじやったの？ じゃあ、中身はタラコか……イクラだったのか」

な?」

希 ……ふふふ…穂乃果ちゃん『産卵』やなくて『散乱』やないかな? 飛び散らかる方…」

穂乃果 ……「じよ、冗談だよ、冗談…うん、もちろん知ってたよ! 知ってた!」

海未 ……「一瞬、おにぎりから稚魚が飛び出してくる様子を想像してしまいました…」  
にこ ……「やめなさいよ!…そういうこと言うと、今後食べるのに支障が出るじゃない」

海未 ……「私が悪いのですか? そもそも、穂乃果が…」

穂乃果 ……「わあ、海未ちゃん! ストップ、ストップ!…え、えつと…それで…凜ちゃん  
と、そのおにぎり…と…どうい関係があるの?」

凜 ……「それが…凜に…『これは小泉が撒き散らかしたものじゃないのか?』って…」

希 ……!!」

真姫 ……!!」

海未 ……!!」

凜 ……「ん? どうかしたにや?」

海未 ……「い、いえ…」

穂乃果 ……「そっかあ…先生も『おにぎり』花陽ちゃん』っていうイメージがあるんだね」  
凜 ……「早弁してるところ、見られたりしてるからね」

絵里 ……「だとしたら、どうして直接訊かないのかしら?」

ここ ……「確証がないからでしょ? 疑ったはいいいけど、そうじゃなかったら、色々面倒だから…一番、仲の良さそうな凜にさぐりを入れてみた…ってことじゃない?」

絵里 ……「なるほど…」

真姫 ……「それで、あなたはなんて答えたの?」



凜 …『違うと思います!』 って言ったにや」

絵里 …「そうね。どんな状況であれ、花陽が食べ物を粗末にするなんて、ありえないもの」

にこ …「ましてや、自分で捨てるなんて」

希 …「…そやけど…自作自演やつたら…」

真姫 …「…でも…いくらなんでも…」

海未 …「…そこまでするでしょうか…」

絵里 …「希?」

凜 …「真姫ちゃん?」

穂乃果 …「海未ちゃん?」

にこ …「どうかした?」

希 …「ん?」

真姫　：「えつ…べ、別に…」

海未　：「はい…それで…」

凜　　：「うん！凜ももちろん、そう言ったよ。『かよちゃんは、お米命の人だから、絶対にそんなことするハズない！』って」

にこ　：「当たり前ね」

凜　　：「それに…『今日のはかよちゃん、お弁当忘れて来ちやったから、そんなことできないし』って。そうしたら『まあ、そんなハズはないと思いつつ、他に思い付く者がいなかったから一応訊いてみたんだが…そっか…それじゃ、小泉じゃないな』って…」

穂乃果：「そうだ！今日、花陽ちゃん、お弁当忘れちやったんだもんね！」

凜　　：「穂乃果ちゃんなら、持つてきたのを忘れちゃうことがあるかもしれないけど」

穂乃果：「凜ちゃん？」

絵里　：「そういえば、穂乃果はパンを持つてきたの忘れて、パンを買っちゃった…って言つてたわね」

にこ　：「バカなのよ、バカ。天然とかじゃなくて、何にも考えてないのよ、アンタは」  
穂乃果：「うう…ことりちゃくん、みんなが虐めるよう…」

海未 …(苛める?)

穂乃果 「…つて、あれ? そういえばことりちゃんは?」

海未 …「えっ? あっ…来てないですね…穂乃果は聴いてないのですか?」

穂乃果 …「私? えっ? 聴いてないけど…」

…「アンタ、またいつかみたいに忘れてるだけじゃないの?」

穂乃果 …「そうかな? そう言われると自信ないけど…」

海未 …「まったく、あなたって人は…」

穂乃果 …「いやいや海未ちゃんこそ、聴いてないの?」

海未 …「はい」

穂乃果 …「勘違いってことない?」

海未 …「断じてありません!!」

穂乃果 …「あはは…そうだよね…」

真姫 …(まただわ…また花陽がない時に…)

穂乃果 …「で…どこ行つたんだろう?」

絵里 …「さあ…理事長のところかしら?」

穂乃果 …「今日、花陽ちゃんがお弁当を忘れちゃつたんだよ…つて報告しにいったのかな?」

にこ …「アホか」

凜 …「でも、それなら家に帰つてからでもよくないかにや?」

穂乃果 …「そうだよね」

にこ …「だからそもそも、そんな報告しないでしょ!前提が間違つてるのよ」

真姫 …「!?!?…前提が間違つてる?…」

穂乃果 …「えっ…」

真姫 …(…なによ、それ…だとしたら私たちは、何かとてつもない思い違いをしてるかも知れない…)

凜 …「真姫ちゃん、どうかしたにや?」

真姫 …「…なんでもない…独り言…」

穂乃果 …「あつ…ねえねえ…さつきのおにぎりの話だけどさ…実は…もらつたおにぎりがあんまり美味しくなくて、花陽ちゃんが捨てちゃった…つてことはないかな?」

希 …「!!」

真姫 …「!!」

海未 …「!!」

絵里 …「ないわね!」

凜 …「あるわけないにや!!」

にこ …「絶対ないから」

海未 …「…なんでしよう、この違和感は…先生はなぜ凜に話を訊いたのでしようか」

…)

穂乃果…：「おお？みんな冷たいなあ…速攻で全否定されたよ…でもさ、偶然だとしたら怖いよね？花陽ちゃんがお弁当忘れた時に、おにぎりが庭に散らばってるなんて」

凜…：「本当に不思議にや」

穂乃果…：「何かの怨念だったりして」

絵里…：「やめてよ、そういうこと…言うの…」

希…：「怨念がおんねん…なくんてな…」

一同…：「…」

希…：「まあ、今のはウチが悪かったやね」

にこ…：「はいはい、つまらないコメしてないで、ほら、さっさと着替えて、練習に行  
くわよ」

希 …「!!…コメやつて?…」

にこ …「な、なによ!急に大きな声出して!コメントのことよ…言うでしょ?コメする…つて…アタシ、おかしなこと言った?」

穂乃果 …「ああ、お米とコメントを掛けたんだね?」

凜 …「にこちゃん、寒いにゃあ」

にこ …「寒いって言うな!…たまたま、その話題に言葉が引つ張られただけだから」

希 …「…なんやろ…今、一瞬頭の電球が光った気がするんやけど…コメする…コメ…する…」

絵里 …「希?」

希 …「ごめん、ちよつと黙ってて!!…」

絵里 …「ひえっ?…ええ、ごめんなさい…」

海未 …(…)

真姫 …(…)

希 …(…)

穂乃果 …「…」

にこ …「…」

凜 …「…」

海未 …「あっ!」

真姫 …「あっ!」

希 …「あっ!」

真姫 …「わかったわ!」

希 …「ウチもや!」

海未 …「はい、私もです!」



穂乃果：「なにがさ？」

海未：「今回の事件の…犯人…です」

穂乃果：「今回の…って、おにぎりの？」

海未：「はい。そして恐らく…」

希：「例の落書き事件も同一犯やね」

真姫：「そうね…はあ…どうして気が付かなかったのかしら…まったく我ながら情けないわ…」

凜：「誰にや？」

絵里：「待って…聴くのが怖いんだけど…」

穂乃果：「…でも…そうも言ってもらえないんだよね？」

海未：「はい…」

にこ …「それで誰なのよ!？」

希 …「犯人は…」

くつづく

## 隠されていた記号

：

花陽 ……二人とも…『色々してくれて』ありがとう…お陰様でより一層々々 sメン  
バーへの感謝の念が深まったよ」

モブA ……へえ…小泉さんって『皮肉』が言えたりするんだあ？」

モブB ……まさか『あなる』とは予想外だったけど…喜んで貰えたのなら、結果オーライね」

モブA ……小泉さんは…いい先輩と友達を持つてるのね」

モブB ……正直羨ましいよ」

花陽 ……自分でもそう思う。入学前は考えてもみなかったことだから」

モブ A …「そして…色々運がいい…」

花陽 …「そうだね、否定はしないよ」

モブ B …「…ところで…『私たちが作ったおにぎり』は気に入ってくれたかな？」

花陽 …「みんなから、いっぱいお裾分けしてもらったから…申し訳ないけど…あの  
おにぎりは、まだ、口にしてないんだ」

モブ B …「あら、残念ね」

モブ A …「あなたの為に精一杯作ったんだけど」

モブ B …「まさか…捨てたりしてないよね？」

花陽 …「…」

…

希 …「まず、落書きの件やけど…もう一度あの時の状況を思い出してほしいんよ」

穂乃果 …「あの時の状況？」

絵里 …「私たちが屋上に行ったときには、すでに書いてあったわ」

穂乃果 …「凜ちゃんが最初に見つけたんだよね？」

希 …「なんて書いてあったん？」

凜 …「確か…『デブはタヒね！』だったにや…読めなかったけど…」

希 …「そうなんよ…実はずっとそこが引つ掛かっててなあ…あれを『死ね』だと教えてくれたのは誰やったっけ？」

穂乃果 …「にこ…ちゃん？」

にこ …「!!…そうよ、アタシだけ…」

希 …「そう、にこっちゃんね」

にこ ……」

海未 ……『タヒ』を『死』と読めた…と…ということは…当然『書ける』ということでもあります」

真姫 ……「そして意味もわからず『タヒ』なんて書く人はいない…」

海未 ……「はい」

穂乃果 ……「えっ？じゃあ…まさか…にこちゃんが」

絵里 ……「うそでしょ？」

凜 ……「ひどいじゃあ!!」

にこ ……「ぬわあんでよ!!そりゃあ、読んだのはたまたまアタシだけ…他に知ってたけど口にしなかったヤツがいるかも知れないじゃない!」

真姫 ……「そうね」

にこ …「疑いたくはないけど…花陽だつてかなりヘビーなネットユーザーなんだから、絶対知つてたと思うわ」

海未 …「ええ…恐らく知つていたでしょう」

絵里 …「花陽が…」

穂乃果 …「書いたの？」

凜 …「そんなハズないにや！」

にこ …「もちろん、そう思いたいけど…つまり、それだけのことじゃ、犯人をアタシだつて特定できない…つてことよ」

希 …「そうやね…でも、ウチはにこつちが犯人やなんて、一言も言うてへんよ」

にこ …「はあ？」

海未 …「そして…花陽だとも言っておりません」

穂乃果：「えっ？」

希　：「そやから、あの時のことを、もう一度よく思い出してほしいんよ」

海未　：「にこ以外にあれを『死』と読んだ人はいませんでしたか？」

凜　　：「……誰にや？……」

絵里　：「……誰だったかしら？……」

穂乃果：「……誰だっけ？……」

：

花陽　：「私ね……μ sに入ってから本当に良かったと思ってるんだ……背も低くて、声も小さくて……なんのとりえもなく……ただアイドルが好き……っていうだけだった私が……あの人たちに会って……こんなに幸せで充実した時間を送れるようになった……」

モブA　：「そういうの、なんて言うか知ってる？『身分不相応』って言うのよ」



花陽 :「えへへ……そうだね……。本当に、本当に……花陽にはもつたないくらい、みんな優しくてあつたかくて……だから毎日『私がここにいていいのかな?』って自問自答してるよ」

モブB :「よくわかつてるじゃない」

花陽 :「だけど……ううん……だから……かな?……こんな私を受け入れてくれるみんなの期待に、絶対応えなきゃいけない……って」

モブA :「期待?あなたに?」

モブB :「それ、勘違いじゃない?」

花陽 :「勘違い?……そうかも……だけど……それをいうなら、二人も花陽のことを勘違いしてると思うよ」

モブA :「えっ?」

モブ B :「どういこと?」

花陽 :「花陽は…半年前の花陽じゃないってことかな…」

:

絵里 :「…ねえ…そういえば…あの時じゃなかったかしら?…例のことりファンが差し入れを持ってきてくれたのって」

穂乃果 :「ああ、そうだね!絵里ちゃんが堅いこと言うから、チーズケーキを食べそびれるとこだった時だ」

絵里 :「私はただ、生徒会長として…」

にこ :「今はそんなことどうだっていいでしょ!」

絵里 :「もう…にこに怒られたじゃない…」

穂乃果 :「ごめん」

凜 :「えつと…そのあと帰り際に二人が落書きに気が付いて、そのことでちよつと話した気がする…」

にこ :「デブって誰だ?って話になって…凜が希だつて」

希 ……「ウチはデブやないけどな…」

にこ ……「あっ!!」

一同 ……「!?!」

にこ ……「そういうえば…あの文字になんの疑問も持つことなく『スラツ』と呼んだヤツがいたわね…」

穂乃果 ……「えっ?」

凜 ……「いた?」

絵里 ……「誰なの?」

にこ ……「そう…そういうこと?…アイツらが…」

海未 ……「やつと思い出しましたか」

にこ　：「はあ…もつと早く気が付くべきだったわ…あんなの読めて当たり前だと思つてたし…あつーじゃ…じゃあ…あの記号は…」

希　　：「そういうことやね」

にこ　：「あのバカ！なんで黙ってるのよ！」

真姫　：「そういう娘じゃない…」

絵里　：「記号って何かしら？」

穂乃果：「完全に置いていかれてるんだけど」

凜　　：「凜たちにもわかるように説明してほしいにや」

：

モブA　：「勘違いかあ…そうかもね…ここまであなたがしぶといと思わなかったか

ら…それはそうかもね」

モブ B …でも、仲間に迷惑を掛けたくないなら…これ以上続けるのって逆効果じゃない？」

モブ A …「そうそう、誰がどう考えても『あなたが辞めればすべて丸く収まる』話じゃない」

花陽 …「私は辞めないよ！どんなことがあっても」

モブ A …「強情ね」

モブ B …「それとも…まだ刺激が欲しいの？」

モブ A …「私たちは *μ* *s* が好きだし、これからも頑張ってほしいと思ってるから、できるだけ事を荒立てたくないと思ってるんだけど」

モブ B …「警察沙汰なんてことになったら、私たちにも *μ* *s* にもデメリットしかないね」

モブ A …「でも…あんまり聞き分けがないようなら…多少手荒なこともしちゃうかも…」

花陽 ……ふくん…」

…

にこ ……落書きした犯人は…差し入れを持ってきた二人組よ…」

凜 ……「にや?」

穂乃果 ……「ことりちゃんファンの?」

絵里 ……「なんですって?」

にこ ……「そして…『死ぬ』って書かれたのは…花陽…」

凜 ……「にやあ!!」

絵里 ……「花陽が…」

穂乃果 ……「殺されちゃうの?」

にこ ……「アイツらを落書きした犯人とした根拠は、さつき海未たちが説明した通り

よ。あの二人、なんの疑問もなく『デブは死ね』って読んでたわ」

絵里　：「たまたま知ってた…ってことは？」

希　　：「なくはないやろな…そやけど…」

真姫　：「色々と考えると、逆に彼女たちしか有り得ないのよねえ」

海未　：「タヒね…と読んで、知らないフリもできたのでしようが…どちらかというと私たちの前だったので、思わず口走って、そう言ってしまった可能性があります」

穂乃果：「どういうこと？」

海未　：「あのメッセージは…花陽だけに理解して欲しかったです」

凜　　：「かよちんだけ？」

真姫　：「花陽がネット用語に精通してることを二人が知っていた…っていうことが前提としてあるけど…こここのところずっと付きまತ್ತてたし、それくらいの情報は入手

してるでしょ」

絵里　：「でも…仮に花陽が見ればわかるのだったら…敢えてあの場に来て、そんなこと言う必要あつたのかしら？」

真姫　：「念には念を…つてことじゃない？書いてみたのはいいけれど、私たちがそれに気付かなかつたら、まったく意味がないから」

希　　：「『ここにこんなありますけど、花陽さん…そして、sのみなさん見てくれましたか』ってね」

穂乃果：「なんの為に、そんなことしたんだろう」

海未　：「花陽に圧力を与かけるためですよ」

穂乃果：「圧力？」

海未　：「プレッシャーです。なぜ『死ぬ』と脅されていたかはわかりませんが…精神



的には堪えるのではないでしょうか」

凜　：「なにそれ、意味わかんない」

真姫　：「ちよつと凜！こんな時に私のマネは…」

凜　：「わかんない！意味がわかんない！どうして、それがかよちんに向けられたメッセージなの？どうして、かよちんが死ねって言われなきやいけないの？意味わかんないよ！」

にこ　：「凜…落ち着いて聴きなさい…この記号…アンタたちならどういう時に使う？」

絵里　：「『※（アスタリスク）』？」

穂乃果　：「えつと…注意書きとか…そういう時に使うかな。文章の前に付けて」

にこ　：「そう、普通はそう使うわね」

希 …「あの落書き…正確には『※デブはタヒね!!』って書いてあったんよ」  
穂乃果 …「あつた？」

絵里 …「そう言われてみれば、そんな気がするわね…」

真姫 …「その記号が書いてあつたことさえ、忘れたでしょ？」

海未 …「あの時点でそれに注目していた人はいないと思いますよ…ただひとりを除いては…」

凜 …「ただ…ひとりを除いて？」

希 …「…あの落書きの『※』には違う意味があつたんよ」

凜 …「違う意味…」

海未 …「絵里は先ほど、これをアスタリスクと呼びましたが…もつと一般的な呼び方はありますか…穂乃果は実家の職業柄、わりと目にするかと思うのですが…」

穂乃果：「一般的な呼び方？…えっ？…あっ！『米印（こめじるし）』!?」

海未：「正解です」

にこ：「ネット用語じゃ、ただ単に『コメ』とも言いわ」

穂乃果：「あっ！じゃあ…あの落書きは…」

にこ：「…『コメデブは死ね!』…よ」

くつづく

## 死ぬのは誰だ？

…

モブA：「それで…わざわざ『スクールアイドル辞めない宣言』をする為に、こんなところに呼び出したの？」

モブB：「てつきり『諦めます宣言』なのかと思ったけど」

花陽：「残念ながら、その期待には応えられないよ…μ sのみんなに『花陽は不要だ』って言われたら考えるけど…」

モブA：「自覚がないって怖いねえ。先輩方は優しいから口にしないだけで、本当は辞めてほしいと思うてるんだよ？」

モブB：「そうそう…私たちはそれを代弁してあげてるわけ」

花陽 ……余計なお世話…だよ…」

モブA …「はあ？」

モブB …「なんか言った？」

花陽 …「ふふふ…余計なお世話だよ…って言ったんだよ？聴こえなかった？」

モブB …「えっ…」

モブA …「随分強気じゃない」

花陽 …「言ったよね？今の花陽は半年前の花陽じゃないって！あなたたちがどんな嫌がらせしよう…私は負けないから」

モブA …「偉そうに」

花陽 …「μ，sは私が見つけた自分の居場所…。みんなと一緒に歌って踊って、おしゃべりしてご飯食べて…この大切な時間をあなたたちの嫉妬で奪われたくない！だ

から…私はどんな嫌がらせをされても耐えるって心に決めたんだ」

モブA：「嫌がらせ？冗談じゃないわ」

モブB：「そうだよ…人聞きの悪い…」

モブA：「まさか、おにぎりが無くなったことも、私たちのせいにしてるわけ？」

モブB：「いやだなあ…自分で忘れたのを人のせいにするなんて…」

モブA：「ふふふ…まあ、疑うのは勝手だけど…それなら証拠を見せてみな…ってね」  
モブB：「でも、こっちもたかだかおにぎりのひとつやふたつのことで因縁付けられても、困るんだよね」

花陽：「…たかだか…おにぎり？」

モブA：「な、なによ…」

花陽：「…わかったよ…」

…

絵里 …「コメデブ…つて…つまり…それが花陽のことなの？」

希 …「花陽ちゃんをデブと呼ぶのは、いささか忍びないんやけど…お米を食べすぎてダイエットさせられた実績があるし…他に当てはまるメンバーもおらんから…」

凜 …「うう…許せないにや…許せないにや!!」

真姫 …「凜、落ち着いて」

凜 …「落ち着いてなんていられないよ!!かよちゃんが殺されちゃうかもしれないんだよ!!」

真姫 …「わかってるわよ!私だって頭にきてるのは一緒よ!今の今まで、そのことに気が付かなくなったことにもね!」

凜 ……真姫ちゃん…」

希 ……これはあくまで推測やけどな…あの時差し入れ、みんなはチーズケーキやったけど…花陽ちゃんだけ、おにぎりやったる？あれ、そういうことやったんないやろか…」

絵里 ……「そういうことって？」

希 ……「ウチらには『花陽ちゃんのことを想って、おにぎりを用意した』…と見せかけておいて…実は…『わかってるやろな？このコメデブっていうのは、お前のことやから』っていう…」

絵里 ……「脅しの道具？…」

穂乃果…「じゃあ、花陽ちゃんは最初から最後まで知ってたってこと？だとしたら、どうして黙った単だろ？」

希 ……「そこはこれから確認しなきゃ…やけど…」



真姫 …『ひとに迷惑を掛けたくない』…って、たぶん…ただそれだけじゃない？…」

穂乃果 …「真姫ちゃん…」

真姫 …「花陽って、そういう娘でしょ？」

穂乃果 …「わかってるけどさ…」

凛 …「打ち明けてほしかったにや！」

真姫 …「凛…」

凛 …「凛、かよちんのことならなんでも知ってると思ってたし…困ってるなら相談してほしかったのに…親友失格だにや」

にこ …「そう思ってるのは、アンタだけじゃないわよ。アタシだって、なにか悩んでるのを知ってて手を差し伸べなかったんだから…こんなことだとわかってれば、もつとやりようがあったのに」

凜 ……にこちゃん…」

絵里 ……「そうね…でも、今それを言っても始まらないわ。ここまでのことは花陽が考え抜いて出した結論だと思うの。だから、今はその気持ちを汲みましよう」

穂乃果 ……「そうだね！」

凜 ……「で、でも…かよちん、このままじゃ殺されちゃうかもしれないでしょ…なんとかしないと」

にこ ……「!!…ねえ…アイツ、今日『二人にお礼しないと』…って言ったんでしょ?…その意味って」

海未 ……「!!…ま、まさか!? 『お礼』ってそういう意味ですか!?!」

希 ……「…うそやん…花陽ちゃん…」

海未 ……「大変です!!花陽を止めないと!」

絵里 ……「どういうこと?」

希 ……『お礼参り』……虐げられていた側が『報復行為』をする……隠語やね……」

穂乃果 ……『卒業式に不良が先生を襲う』……っていうアレだよな」

絵里 ……『!!』……」

にこ ……「真姫ちゃん！花陽はどこ行ったのよ!?!」

真姫 ……わ、わからないわ……『じゃあ、行こう』……って言ってたから、教室からは出て行っただとは思うけど……」

希 ……「凜ちゃん、電話!」

凜 ……「今、掛けてるけど……電源……入ってないにや」

にこ ……「あのバカ!!」

海未 ……「とりあえず、校内を手分けして探しましょう!」

絵里　：「学校内にいるかしら？」

海未　：「わかりません。ですが、やみくもに外を探しに行っても意味がありませんので」

希　　：「そやったら、靴があるか確認すればいいやない？」

海未　：「そうですね。では、まずはそちらに向かいましょう」

：

モブA　：「それで……」

モブB　：「なにがわかったの？」

花陽　：「あなたたちを……許すことができない……つてことかな」

モブA　：「許すことができない？」

花陽　：「私は何をされても耐えるよ……どんな有名なアイドルだって『アンチ』は必ずしるし。ちよっとバッシングされただけでつぶれるようなら、芸能界なんて生き残れ

ないんだらうから」

モブB：「へえ…言うわね」

花陽　：「でも…でも…お米への冒涇だけは…絶対に許さないからあ!!」

モブA：「はあ？」

モブB：「そこ？」

モブA：「絶対に許さない…って、どうかされちゃうのかしら？ 私たち」

モブB：「だけど…そんなことしたら…あなたはおろか、*ム* *s*にも学校にも迷惑か  
るんじゃない？」

花陽　：「…だから、なに？」

モブA：「えっ!？」

モブB : 「へっ!？」

花陽 : 「今の花陽は怒りに打ち震えてるよ! たぶん…花陽の人生史上、一番怒ってる…だから…謝るなら今のうちだよ?」

モブA : 「バ、バカじゃないの? たかが、おにぎりくらいで」

モブB : 「キレるところがおかしいでしょ」

花陽 : 「…死ぬのは私じゃなくて…」

モブA : 「!？」

モブB : 「!？」

花陽 …「あなたたちかもしれないね？」

モブA …「えっ…」

モブB …「な…」

…

凜 …「かよちんの靴…ないにや…」

海未 …「…ということとは…少なくとも校舎内にはいない…ということですね」

穂乃果 …「どうする？」

希 …「花陽ちゃんは、まだ校内におる！」

一同 …「えっ？」

希 …「ウチのカードがそう告げてるんよ」

にこ …「当てになるの？」

希 …「任せときよ！」

にこ …「いいわ、信じわよ…溺れるものは藁をも掴む…ってこういうことを言うのね」

穂乃果 …「おお！難しい言葉を知ってるねえ！」

にこ …「常識よ！」

絵里 …「そんなこと言ってる暇はないわよ」

海未 …「携帯電話が繋がらないなら、外に行っても、砂漠で宝石を探すようなものです」

真姫 …「そうね、まずは校内を探したほうがいいわね」

海未 …「はい！…とはいえ、全員バラバラになってもあれなので…私は穂乃果と周ります」



穂乃果：「うん！」

真姫：「凜、一緒に行くわよ」

凜：「了解にや！」

希：「じゃあ、ウチはえりちと、にこっちの3人で…」

絵里：「ええ、行きましょう」

にこ：「アタシたちが行くまで早まったマネをするんじゃないわよ!!」

：

ことり：「かくよちゃん！」

花陽：「!!」

ことり：「なにしてるのかな、こんなところで」

モブA：「南先輩!」

モブB：「どうしてここに!」

ことり：「ふふふ…どうしてだろうね?…」

花陽：「…ことりちゃん…」

ことり：「なあに?」

花陽：「申し訳ないですけど…ここは席を外してください。μ sのメンバーを巻き込むつもりはないですから」

ことり：「…巻き込む?…その二人を…どうするつもりなのかなあ?…」

モブA：「み…南先輩、聴いてください!小泉さんが…」

モブB：「私たちを『殺す』って…」

ことり：「…殺す？…へえ…かよちゃんが？…ふふふ、おもしろい冗談だね？…」

：

希：「何か『事を起こす』なら…人目に付かないところやろうと思ったけど…」

絵里：「アルパカ小屋にはいないみたいね」

にこ：「逆にもっとも疑われる場所じゃない？」

希：「それもそうやね」

：

海未：「この間、花陽はことりとここで会ってました」

穂乃果：「弓道場で？」

海未：「内容はわかりませんが…はい…」

穂乃果：「こんなところに連れてくるかな？結構、人通りあるよ？」

海未：「ええ…ですが練習が始まってしまえば、部員は休憩以外の時間、中から出てくることはありませんので…」

穂乃果：「そっか……」

海未：「……ですが……いないみたいですね……」

穂乃果：「うん……」

海未：「しかたありません、他をあたりましたよ」

：

凛：「体育館の裏？」

真姫：「定番じゃない？人を呼び出すときの」

凛：「確かに」

真姫：「花陽！いるの？いるなら隠れてないで返事なさいよ」

凛：「かちゅくん！かちゅくん」

くつづく

キレたのは…

：

穂乃果：「花陽ちゃん…こんなところにいたんだあ…」

凜：「探したにや〜」

花陽：「!!」

モブA：「!!」

モブB：「!!」

にこ：「どうやら、まだ何も『起こってない』みたいね」

希：「いや、花陽ちゃん、めっちゃ『怒った顔しとる』やん」

絵里 …「希…あなたって人はこんな時まで…」

希 …「にひっ…ウチ、シリアスな場面って苦手なんよ」

海未 …「花陽…『お礼をする』…という割には、随分無粋な場所を選びましたね」

真姫 …「どんなことをしてあげるつもりだったのかしら？」

花陽 …「…ことりちゃんにも言いましたが…これは花陽の、ごくごく私的な問題なんです。なので…みんなは、何も訊かずに席を外してください」

にこ …「アホか！この状況で『はい、そうですか』って引き下がるバカがどこにいるのよ」

海未 …「おおよそ、検討は付いてますが、ひとまず状況を説明してください」

凜 …「本当はその二人に呼び出されたんじゃない？理由はわからないけど、かよちゃん、ずっと『死ぬ』って言われてたんでしょ？」

モブA …「勝手なこと言わないでよ」

モブB …「逆だって！小泉さんにここに連れて来られて『殺す』って言われるのは、

「私たちの方なんだから」

凜　　：「嘘だ！かよちゃんは『殺す』なんて言葉、絶対に言わないよ！」

モブA　：「嘘だと思ったら、南先輩に訊いてみれば？」

モブB　：「うん、先輩の前で宣言したんだから」

穂乃果　：「えっ？ことりちゃんの前で？」

ことり　：「殺す…とは言ってなかったかな」

モブA　：「南先輩!？」

モブB　：「聴いてましたよね？」

穂乃果　：「うん、やっぱり花陽ちゃんは、そんな言葉を使…」

ことり　：「でも『死ぬのは私じゃなくて、あなたたちかも知れない』って言葉は聴い

ちやつた♡」

凜 …「かよちゃん？」

真姫 …「花陽…」

モブA …「…つていうことです！」

モブB …「こんな人が、sにいるなんて、どう思いますか？」

穂乃果 …「どうもこうも、ないよね？…」

海未 …「物騒な言葉だとは思いますが…」

希 …「花陽ちゃんが、そんな言葉を口にしたのやら、よつぼどのがあつたんやろうな…：くらいにしか」

絵里 …「そのよつぼどのが、おにぎり…つてところが花陽らしいけど」

モブA …「さすが、先輩！よくわかつてるじゃないですか！まさにそうなんです！自分がお弁当を忘れたのにも関わらず、なぜか私たちに逆ギレして」

モブB …「こんなところに連れて来られて」



希 …「嘘はあかんよ、嘘は」

モブA …「いえ、嘘など…」

ことり …「ねえ？…お二人さんは嘘つきは泥棒の始まり…つて言葉、知ってる？」

モブA …「えっ？…あ…も、もちろん…」

モブB …「は…はい、知ってます…」

ことり …「それはそうだよね？だって、もうなっちゃったんだもんね…泥棒さんに♡」

真姫 …「ことり？」

モブA …「は、はい？」

モブB …「な、何をおっしゃってるのか…」

ことり：「へえ……じゃあ、二人はかよちゃんのお弁当を盗って『ここ』に捨てたりしてないんだね？」

モブA : 「あ、当たり前じゃないですか！」

モブB : 「南先輩ともあろう人が、つまらない冗談を！」

真姫 : 「あら、私もそう思ってるんだけど。体育の時間、保健室に行くフリをして教室に戻り……花陽のお弁当を盗って、ここに捨てた……でしょ？」

モブA : 「西木野さんまで？人聞きの悪いこと言わないでよ」

モブB : 「だいたい、『そんなもの』が『ここに捨てられていた』なんて、初耳だし」

花陽 : 「……そんなもの？……」

モブA : 「そうそう！それにどうして、西木野さんがそんなことを知ってるのよ」

モブB : 「もし盗まれたって言うなら、小泉さんはなんでそう言わなかったの？自分で『忘れた』って言ったんじゃない！」

にこ : 「それね…それがコイツのバカなところなのよ」

絵里 : 「にこ！」

にこ : 「まあ、何かあると『誰か助けて〜』って言ってただけの弟子が、随分逞しくなつたもんだ…と嬉しくも思うけど」

海未 : 「はい、私もそう思います」

穂乃果 : 「私も花陽ちゃんも、相当シゴかれたからねえ…そりゃあ、強くなるよ…」

海未 : 「なにか？」

穂乃果 : 「こつちな話だよ…つてか、敵さんはあつちでしょ？」

モブA : 「えっ？敵さん…つて…ちよつと待つてください？おかしくないですか？

今、ここに連れ出されて『死ね』と脅されてるのは、私たちなんですよ」

モブB : 「それなのに、どうして、こつちが悪みたいになつてるんですか？」

希 : 「花陽ちゃんを脅してたのは…キミたちちゃうん?」

海未 : 「屋上のあの落書きは…あなたたちが書いたものですよ?」

ここ : 「『コメデブは死ぬ』か…まったくナメたマネしてくれるわ」

真姫 : 「花陽の上履きを隠したのも、あなたたちね?」

絵里 : 「私たちのも」

希 : 「それはウチのスーパースピリチュアルパワーのお陰で、未遂に終わったけどな」

モブA : 「なんのことでしょう?」

モブB : 「落書き? 上履き?」

穂乃果 : 「穂乃果って人を見る目、ないのかな? ふたりは *μ's* のこと、真剣に応援してくれてたと思ったのに…もう、差し入れてもらえないのかと思うと、残念で仕方ないよ」

海未 : 「そこですか!」

モブA 「何か皆さん、凄い勘違いしてますよ。私たち、*μ* *s*のこと、本当に好きなんです！心から応援してます」

モブB 「それなのに…そんな言い方酷いです」

モブA 「むしろ、そんな*μ* *s*をこんなこととして裏切ろうとしているのは小泉さんの方で」

モブB 「私たちが訴えて、警察沙汰にでもなったりしたら、ラブライブどころの話じゃなくなっちゃいますよ」

モブA 「だよねえ！だから、一刻も早く、小泉さんをクビにするべきです！なんなら今この場で！」

モブB 「表では大人しそうにしていますが、ウラで、どれだけ汚い言葉を使ってるか知ってます？」

モブA 「園田先輩には『虐待された上に、餓死させられそうになった！』とか言ってますし」

穂乃果：「あはは…うん、それは間違っていないね」

海未：「穂乃果！」

穂乃果：「いや、だから敵さんはあっちだって…」

にこ　：「…で…アンタたちの言いたいことはそれだけ？」

モブB　：「えっ？…あ…いや…」

にこ　：「花陽、戻るわよ！もう、アタシたちがコイツらのこと知っちゃったからには、これ以上アンタに手出しはしてこないわよ」

絵里　：「そうね…色々嫌な思いをしたかも知れないけど、ここで何かしたところで、後々後悔するだけよ」

海未　：「はい」

真姫　：「私も花陽と同じくらい頭に来てるけど…相手にしないのが一番よ」

凜　　：「凜だって…凜だって、同じだよ！かよちゃんがどれくらい怒ってるか、凜は知ってるよ！絶対許さないって、気持ち、凜だってわかるよ！だけど、相手にしたら負けなんだ。だから…ね？かよちゃん、戻ろう！」

花陽 ……」

モブA ……「いい加減にしてください！何を根拠に小泉さんを庇うんですか！」

モブB ……「そうですよ！私たちが小泉さんのお弁当を盗んだっていう証拠があるなら見せてくださいよ！」

海未 ……「証拠…ですか…」

穂乃果 ……「犯人って開き直ると、必ずこういうこと言うよね」

モブA ……「先輩たちのこと、見損ないましたよ！それは…仲間が大事…っていうのはわかりますけど」

モブB ……「推測だけで犯人扱いされたら堪らないですよ！」

ことり ……「証拠なら…あるよ…」

一同 ……「えっ!?!」

ことり：「さて、これは、なんでしょう？…じゃくん♡」

一同：「SDカード？」

ことり：「せいかり♡じゃあ、このSDカードには、何が入ってるでしょう？」

一同：「…？…？」

ことり：「正解は…監視カメラの映像でしたあ♡」

一同：「!?」

真姫：「監視カメラの…」

海未：「映像…ですか？」

絵里：「この学校に、そんなのあったかしら？」

ことり：「なかったから…ことりが仕掛けちゃった♡」



一同 …「はい？」

ことり…「凄いよね！電気街に行けば、みんなにわからないように撮影出来るカメラとか、いっぱい売ってるんだよ♡」

にこ …「アンタ、それ監視カメラじゃなくて、盗撮カメラじゃない？」

希 …「…なんか怖いんやけど…」

ことり…「まあまあ…細かいことは置いて…で…ここにバツチリ映っちゃってるんだあ…そつちの娘が、授業を抜け出して、花陽ちゃんのカツグの中を漁ってる様子が…」

モブA …「あつ！…ああ…」

ことり…「それだけじゃないよ！絵里ちゃんと希ちゃんの上履きを、花陽ちゃんのことに入れてのとか…」

モブB : 「うああ…」

ことり : 「アルパカさんの前で、花陽ちゃんを虐めてるところか…」

モブA : 「ち、違います…な、何かの間違いです…」

モブB : 「そ、それはきつと別の人じゃ…」

ことり : 「往生際が悪いんだよ!!」

モブA : 「ひい!!」

モブB : 「ひゃあ!!」

μ, s : 「!!」

ことり : 「だったら、てめえの目で、この中の映像、確かめて見るか? ああん? グダグダ言ってる…」

モブA ……  
モブB ……  
μ s ……

「ことり…」ことりのおやつにしちやうぞ  
「♡

くつづく

## 真相究明

穂乃果：「……ここ、ことりちゃんのおんなセリフ、初めて聞いたよ……」

凜：「……ここ、怖かったにや……」

にこ：「……お、怒らせたなら、絶対ダメなタイプの人間ね……」

ことり：「……で？……ふたりは、まだ言い逃れしちゃうのかなあ？」

モブ A：「……」

モブ B：「……」

モブ A：「……す、すみませんでした……」

モブ B：「……ご、ごめんなさい……」

ことり：「あは、もう認めちゃうんだあ」

希　：「そりゃあ、あんな凄まれ方されたら、やってなくても、やった…って言っ  
てしまっやん」

絵里　：「確かに…」

真姫　：「そのSDに証拠があるって…じゃあ、あなたは初めから全て知ってたって  
こと？」

ことり：「うーん、始めから…って言う訳じゃないけど…」

海未　：「では…ことりが独りで行動していたのは…」

ことり：「みんなにバレないようにカメラを仕掛けてたんだ…」

穂乃果：「もう！なんで言ってくれなかったのさ…」

凜　　：「そうにや！そうにや！」

ことり：「ごめんね…だけど…」

真姫：「花陽が止めたのね？」

一同：「!!」

にこ：「みんなに迷惑掛けたくなかったから？」

凜：「かよちゃん…」

絵里：「どういふことか説明してくれるかしら？」

花陽：「…」

絵里：「仕方ないわね…花陽は教えてくれそうもないから…あなたたちに話を聴く方が早そうね」

海未：「あなたたちは花陽に何をしていたのですか？」

モブ A : 「…う、羨ましかったんです…」

モブ B : 「…えっと…その…クラスでも一番大人しそうな小泉さんが、ステージで輝いてるのを観て…」

モブ A : 「…最初は…素直に凄いなあ…って思ってたんですけど…そのうち…」

モブ B : 「騙された…っていうか、裏切られたような気分になって…」

真姫 : 「騙された？」

凜 : 「裏切られた？」

モブ A : 「普段の姿が嘘なんじゃないかっていう…」

希 : 「それで上履きを隠したん？」

モブ B : 「…ちよつと悪戯して、困らせてやろう…くらいのもりだったんです…」

モブ A : 「だから、翌日にはすぐ返したんですけど…でも…作戦は失敗しました…」

真姫　：「失敗？」

モブB　：「星空さんのところに入れたハズの上履きが、どういう訳か小泉さんのところから見つかった…って…」

真姫　：「ああ、それ？入ってたわよ、凜のところだ」

モブA　　：「えっ？」

モブB　　：「えっ？」

真姫　：「色々騒ぎになるのが面倒だから、花陽のところから見つかったようにしただけだ」

モブA　　：「そうだったんだ…」

モブB　　：「知らなかった…」



海未 ……とところで、なぜわざわざ、凜のところに戻したのですか？」

モブ A ……「それは…小泉さんが星空さんを疑えば、仲、悪くなるかな…って…」

海未 ……「やはり…ふたりの関係性を知ったことでしたか…」

凜 ……「呆れたにや…凜とかよちんの仲はそんなことで、壊れないにや！」

真姫 ……「それで…思い通りの展開にならなくて、第2段の犯行に及んだ…って訳？」

モブ A ……「…少し違うかな…実は…小泉さんを狙った理由がもうひとつあって…」

希 ……「花陽ちゃんが、ことりちゃんと仲良くしてるのが、気に入らなかった？」

モブ A ……「はい…」

モブ B ……「その通りです…」

海未 ……「嫉妬…ですか…」

モブ B 「以前、外でふたりが仲良く買い物してるところを見てしまつて……それからずつとモヤモヤしてたんですけど……」

モブ A 「私たちが上履きを隠した次の日……屋上でお昼食べてる時に、南先輩が小泉さんのところに来て……買い出しに誘つたんです」

モブ B 「その時までには、南先輩に近づける方法を探っていたから……会えて話せたことは嬉しかったけど……それと同時に……」

モブ A 「小泉さんに軽く『殺意を抱いた』というか……」

一同 ……!!」

モブ B ……いえ、本当に『殺してやろう』なんて思つてないですよ……なんて言えばいいんだろう……」

モブ A 「本気で憎らしくなつちやたんです……小泉さんのことが。どうしてこんな人が南先輩みたいな人に可愛がられてるんだらう……つて思つたら……存在自体が許せなくなつちやつて……」

真姫 …「はあ…勝手過ぎるわ…」

絵里 …「ことりは、それを知ってたの？」

ことり…「ううん…まだ、この時は…。でもね、かよちゃんの上履きがなくなつた…つて聴いて、直ぐにカメラを買つて、靴箱の上の方に仕掛けたんだあ…そうしたら…」

希 …「ウチらの上履きを悪戯するふたりの姿が映つてた？」

ことり…「うん！」

海未 …「偶然にも、ことりがふたりに会つてしまったことで、彼女たちの嫉妬心に余計な火を点けてしまった…と…ということですか？」

絵里 …「どうして私たちの上履きを？」

真姫 …「それは学校の中で一番影響力のあるふたりだもの」

穂乃果…「生徒会長と副会長の上履きが悪戯されたとなれば、それは学校に対する一種の反乱だもんね！」

凜 …「それが、かよちゃんの靴箱に入ってたなんていつたら、大騒ぎになるにや」

ことり：「幸いにも、たまたま絵里ちゃんたちが学校に来るのが遅くて、大きな騒ぎにならなかつけど」

希　：「なるほど。ウチのスピリチュアルスーパーラッキー危険回避能力のお陰で、事件にならずに済んだ…ってことやね」

ことり　：「いや、むしろ証拠を抑えてたんなら、事件にした方が良かったんじゃない？」  
絵里　　：「でも…学校の体面上…それは避けたかった？」

ことり　：「せいかりい！…お母さ…理事長にも相談したんだけど…結果として何も起きなかつたんだから、事を荒立てるのはよしましょう…ってなって…」

穂乃果　：「だけどさあ…ふたりがそういうことをした…ってわかつてたんだったら、注意くらいするべきだったんじゃない？」

ことり　：「今、思えばそうだったかも…。…でも、その時はまだ、ふたりの意図がわからなかつたし…行為に及んだのは確かだけど、何か別の理由があるかも…ってことで」

真姫 …「暫く様子を見た？」

海未 …「つまり…ふたりを『泳がせた』ということですか？」

ことり …「言葉は悪いけど…そうなるかな？」

凜 …「ことりちゃん、ふたりの事はかよちゃんに伝えたんでしょ？」

ことり …「もちろん、伝えたよ…でも『何かの間違いかも知れないし…』  
sも大事な  
時だから』って」

穂乃果 …「花陽ちゃんらしい…って言えば花陽ちゃんらしいけど…」

希 …「下手に藪を突っついて逆ギレされても困るしなあ」

海未 …「私たちもライブ前に変な噂は立ってほしくないと思っていましたから…」

真姫 …「そつちのふたりも、きつとそれをわかってた…ってことね」

モブA …「…」

モブB ……」

海末 ……「ふたつの悪戯が上手くいかなかったからかどうかはわからないですけど…  
それからは大人しくなったのですね」

ことり ……「それが…」

真姫 ……「そこから、花陽にμsを辞めるよう、直接脅すようになった…」

海末 ……「真姫…」

真姫 ……「あれだけ、ことあるごとに花陽を呼び出していけば、そう考えるのがスジ  
じゃない？もつとも、今だからそう言えることだけ…」

希 ……「アルパカ小屋で見つけた『おにぎりのゲー』は、花陽ちゃんがそのストレス  
で吐いたもの…」

絵里 ……「おにぎりのゲー？」

希 ……「詳細は聴かんでおいて…」

絵里 :「?」

海末 :「ことりが花陽と弓道場の脇で話をしていたのは…その後だったんですよ?」

真姫 :「花陽はあの時、アルパカ小屋に行ってた…って言ってたけど、本当はあなたと居たんでしょ?」

海末 :「私には花陽がことりを呼び出した…と言っていました、実際は逆だったのではないですか?」

希 :「花陽ちゃんが告白したんやなかったんやね」

ことり :「うん…アルパカさんのところにもカメラを仕掛けておいたから…ことりも…花陽ちゃんが虐められてるのに気が付いて、話をしたんだけど…」

穂乃果 :「虐められてた…って言うけど、叩かれたり、蹴られたりはしなかったの?」

海末 :「そういうことをすれば、私たちに直ぐ気付かれますから…」

希 :「バレたら警察沙汰になるやろうし…そこまではできんかったんやろ」

真姫 …「だから…精神的に追い詰める方法を選んだ…」

海未 …「ずっとμsを辞めるよう迫られていたのでしょうね」

にこ …「アンタが話をした時、花陽はそうされてることを認めなかったの？」

ことり …「認めないことはなかったけど…でも、これは自分の問題だから…μsにとつても大事な時だから…つて…」

にこ …「…はあ…まったく…バカなんだから…」

凜 …「かよちゃんは、バカじゃないにや」

にこ …「わかってるわよ、そんなこと…」

穂乃果 …「アルパカの具合が悪くなったのは、やつぱり偶然なの？」

ことり …「うん…獣医さんの言った通りじゃないかな?…花陽ちゃんがストレスを抱えるようになって…アルパカさんも移っちゃんだ…。でも、それはふたりにとつても予想外だったと思うよ」



モブA ……」

モブB ……」

ことり：「だけど、それさえも利用しようとしたんだよね？」

モブA ……」

モブB ……」

真姫 …「なるほど…アルパカが倒れたのは『花陽の自作自演』って噂を積極的に流したの、あなたたちだった…ってことね」

凜 …「酷すぎるにや…」

希 …「そやけど…花陽ちゃんの気持ちが折れることはなかったんやね」

ここ …「強くなつたわね」

海未 …「ですが…いえ、だから…と言うべきでしょうか…ふたりは…もつと強硬な手段に出たのですね？」

絵里 …「それがあの落書き？」

穂乃果 …「最低だよ…」

~~~~~

ああ無情（最終話）

海末 ……「さて…ふたりとも、これまでの話に何か反論はありますか？」

モブA ……「いえ…」

モブB ……「なにも…」

希 ……「花陽ちゃんに嫌がらせをしていたことを認めるんやね？」

モブA ……「だいたい、合ってます…」

モブB ……「ただ…小泉さんを本当に殺そうなんてことは、これっぽっちも…それだけ信じて下さい！」

モブA ……「μ s から抜けてくれれば…それで良かったんです…」

モブ B ……はい…」

真姫 ……「あんたたちになんの権利があつてそんな…」

穂乃果 ……「ねえ…ふたりは μ s のことが好きだ…つて言つてくれたよね？」

モブ A ……はい…」

モブ B ……はい…」

穂乃果 ……「ことりちゃんのこと好きなんだよね？」

モブ A ……はい…」

モブ B ……それは、もう…」

ことり ……「…だつたら…かよちゃんが μ s を辞めたら…私が悲しむことは考えなかつたのかなあ？」

モブA …「えっ…」

モブB …「あっ…」

にこ …「私が…じゃないでしょ！」

真姫に …「私たち全員が…でしょ？」

ことり …「うん、そうだね！」

希 …「恋は盲目って言うても、行きすぎるとこんななってしまうんやね…」

にこ …「花陽…アンタがもつと早く、みんなにちゃんと話してれば、ここまで面倒臭い話にならなかつたのに…」

凜 …「ごめんね、かよちん…凜、こんなことになってるとは、全然知らなくて…」

海未 …「いえ…凜だけではありません。私たちもあなたに何か異変があることに気付いていながら、今の今まで何も出来なかつたのですから…」

花陽 …「…みんな…」

にこ　：「でも…よく、その嫌がらせに耐えて頑張ったわ…褒めてあげる！それでこそアタシの一番弟子よ。アンタなりにμ　sを守ろうとしてくれたことなんでしょ？」

花陽　：「にこちゃん…」

絵里　：「もし花陽が素直に話してしまつたら、ふたりはどうするつもりだったのかしら？」

希　　：「確信があつたんやろうな…花陽ちゃんの性格やら、μ　sの現状やらを考えたら…問題を大きくするハズない！って」

凜　　：「本当に卑劣にや」

にこ　：「言つておくけど…アンタたちふたりがどう思つてるかは知らないけど…アタシたちはねえ…この9人だからμ　sなの！誰かひとり欠けてもダメなの！！ヤツに、μ　sが好きだなんて言つて欲しくないわ！」

花陽　：「にこちゃん…」

にこ …「当然でしょ」

絵里 …「それより…問題は…」

にこ …「どうやって落とし前を付けるか？つてことね？」

希 …「罪に問うとするならば…脅迫罪と窃盗罪…つてどこやろうな…」

モブA …「…あう…」

モブB …「…うう…」

海末 …「花陽に精神的苦痛を与えていたのなら、傷害罪も適用されるのではないでしようか？」

真姫 …「いずれにしても刑罰は免れないわね」

モブA …「…あ、あの…すみませんでした…」

モブB …「小泉さん、ごめんなさい…」

モブA …「…本当に…本当に…ごめんなさい…」

モブB …「もう、二度とこんなことはしないから…」

凜 …「そんなこと言っても許せるわけないにや！」

モブA …「…本当にすみません！…こ、これからは心を入れ換えて、もつともつとμsを応援しますから…」

にこ …「応援なんてしてもらわなくて結構よ!!」

モブB …「いえ、裏方でもなんでも手伝いますので…どうか…」

にこ …「むしろ、一生関わらないで欲しいわ」

希 …「うーん…まあ…現実的な話として…刑罰云々は大袈裟なんかなあ…」

海未 …「…はい…」

にこ …「まあ、コイツらのことを許すつもりなんてサラサラないけど…正直なところ、こんな時期に警察沙汰になっても迷惑なだけだし」

真姫 …「ラブライブもそうだけど、学校の評判もガタ落ちになるわね」

絵里 …「折角の入学志望者も、いなくなることも考えられるわ」

穂乃果：「そんなあ…せっかく廃校を阻止したのに…」

海未：「そういう意味では、花陽はよく耐えてくれました」

希：「ほんまやねえ」

海未：「となりますと…ふたつにひとつかと…。このまま、花陽の我慢に免じて不問に付すか…学校に報告して判断を仰ぐか…」

ことり：「残念だけど…学校はもう知ってるよ♡」

一同：「!!」

ことり：「…学校というよりは、おかあさ…理事長は…だけど」

海未：「ああ、そうでした。ことりが報告していたのでしたね」

穂乃果：「今日のことも？」

ことり：「先生が『おにぎりが散乱しました』…って、理事長に報告が上げたから…。まさかと思ってカメラを確認したら、そっちの娘が映ってたの…。先生たちにはまだ知

らさえてないけど…」

絵里　：「なるほど。…それで、理事長の判断は？」

ことり　：「被害にあつたのは小泉さんだから、彼女がどうしたいのかが大事だ…つて。教育者として、この状況に目を瞑るわけにはいかないから、本来なら親を呼び出すなどして、適正に処分することが望ましいけど…」

にこ　　：「適正に処分する？」

海未　　：「停学ですか」

にこ　　：「まあ、そんなことしなくても、この話が学校に広まれば、勝手に辞めていくだろうけど」

真姫　　：「よっぽどの神経をしてない限り、普通に通うことなんて出来ないもの」

にこ　　：「かと言って…あとで逆恨みされても困るのよのよねえ。私たちが辞めさせた…みたいになってもイヤじゃない」

ことり　：「それは大丈夫じゃないかなあ？そんなことはしないよね？だって逆にこの

映像を世に晒されたら…二人の人生終わっちゃうもん♡…それくらいはわかるよね？」

モブA ……はい…」

モブB ……もちろんです…」

モブA ……ですから、どうかこの件は…」

モブB ……本当に許してください…」

凜 ……「どうする？かよちん」

花陽 ……「さつきも言ったんだけど…花陽に辞めて欲しい…とか…ことりちゃんと仲良くするな…とか言われたことは、もう、どうでもいいんだ。デブって言われたことも…自覚してることだし」

凜 ……「そんなことないよ！どう考えても希ちゃんの方が…」

希 ……「ん？凜ちゃん？」

凜 ……「おっと、口が滑ったにや…」

花陽 …「でもね…でもね…おにぎりを捨てたことだけは、絶対許さないんだからあ!!」

一同 …「!!」

花陽 …「それだけはどんなに謝つても許さないよ!!今回のこの無礼な振る舞いは、おにぎりを作ってくれたお母さん!精米してくれたお米屋さん!八十八の手間暇掛けて、お米を育ててくれた農家のみなさん!!私に対してでなく、このおにぎりに携わったすべての方々に対する冒瀆です!!」

希 …「気持ちにはわかるけど…」

絵里 …「熱くなりすぎじゃないかしら…」

花陽 …「…この恨み、晴らさず置くべきかあ!…です」

真姫 …「花陽!」

凜 …「か、かよちゃん…ちよ、ちよつと落ち着くにや」

花陽 …すちや

穂乃果：「あれ？ポケットから何か出したよ」

絵里 …「折り鶴？」

海末 …「花陽の特技は折り紙であることは知っていますが…あれをどうするつもりでしょう」

にこ …「構えたわ」

希 …「はっ！…あ、あれは『折り鶴の結花』や！」

一同 …「折り鶴の結花？」

希 …昔、そんなドラマがあつたんよ。金属製の折り鶴を飛ばして武器にして戦う女子高生の…」

穂乃果：「えっ!?!じゃあ、あの折り鶴も？」

花陽　：「いけえ!!」

一同　：「あつ!」

ひゅっ!

モブA　：「うそっ!」

モブB　：「嫌あ!」

ひよろひよろひよろ…

ぼとん

一同　：「えっ?」

一同　：「…」

一同 ……」

花陽 ……「あはは…さすがに普通の折り鶴じゃダメだったみたいですねえ」

ことり ……「うくん…やっぱり重さが足らなかつたのかな？」

花陽 ……「リリアンの方が良かった？」

ことり ……「ビー玉じゃないかな？」

花陽 ……「今度試してみよう」

ことり ……「うん」

にこ ……「どういうこと？」

絵里 ……「私たちは何を見ているのかしら」

海未 ……「ことり、説明してもらえますか？」

ことり ……「説明もなにも…かよちゃんど、あのふたりを懲らしめる機会を窺ってたんだあ。それがたまたま今日だっただけで…」

花陽 ……「いつかやるだろうなあ…とは思っていたけど、まさか本当におにぎりに手を出すとは思いませんでした」

ことり：「ね？」

海未：「…それは…なんとわかりましたが…」

にこ：「いや、なに納得してるのよ！アタシたちが訊きたいのは、最後の下手なコントは何？つてことなんだけど」

花陽：「へっ？真面目にやったんだけど…上手いかなかったなあ…ただ単に…練習不足です！」

ことり：「こんなに早く来るとは思わなかったから、ぶっつけ本番だったもんね♡」
花陽：「はい。イメーヅトレーニングはバツチリだったんですけどね」

にこ：「…あつそ…」

海未：「あれで成敗するつもりだったのですか？」

穂乃果：「えつと…じゃあ、さっきのことりちゃんの怖いセリフは演技？」

凛：「凛、おしっこちびりそうだったにや」

ことり：「どうかなあ？」

穂乃果：「いや、そこはお願いだから『演技』って言ってよ」

絵里：「あれが本性だったら怖すぎるわ」

海未：「それで…花陽は、このふたりをどうするつもりですか？」

花陽：「そうだねえ…今後、私たちに関わることもなく、お詫びがてらお米農家のみなさんのお役に立てることって言ったら…」

一同：「…」

花陽：「一生、案山子として田んぼに立ってもらうことだね！」

モブA：「…かかし…」

モブB：「…って、あの…かかし？…」

花陽 …「それ以外になにがあるのかな？ふたりが案山子になれば、もう誰とも話さなくていいだろうし、誰の迷惑も掛けないよねえ」

凜 …「かよちゃん？」

真姫 …「花陽？」

ことり …「いい考えだね♡ … そうしたら … ことりがふたりに、お似合いの衣装を作つてあげるね♡ やつぱりかすりの着物に麦わら帽子がいいのかなあ …」

穂乃果 …「ことりちゃん？」

海未 …「ことり？」

花陽 …「さあ、どこがいい？新潟？山形？北海道かな？」

モブA …「…あわわ…」

モブB …「…うう…」

「ことり…それとも…」

花陽 ……地獄に行く?…」

この世界は悲しみに満ちている
く完く